日本サウンドスケープ協会誌

サウンドスケース SOUNDSCAPE

Journal of the Soundscape Association of Japan (JSAJ) Vol. 14

会長 西江 雅之

特集 日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト 永幡幸司、大谷英児、鳥越けい子、佐藤宏、川崎義博、箕浦一哉

小特集 個人化社会とサウンドスケープ

大門信也, 南田勝也, 辻本香子, 小川博司

協会20周年特別企画

座談会 日本サウンドスケープ協会 - 前史 - 1 平松 幸三,池村弘之,上野正章,佐藤宏,鳥越けい子

レポート

上野正章, 船場ひさお, サウンド・エデュケーション・ワーキング・グループ, 庭園のサウンドスケープ・ワーキング・グループ



Soundscape

May, 2013 ISSN 1345-4404

日本サウンドスケープ協会誌 サウンドスケープ 第14巻

目次

特集 日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト

日本サウンドスケープ協会震災プロジェクトの概要 永幡 幸司----1 被災した音の名所を訪ねて一音風景探訪企画の報告 永幡 幸司----3 宮城野のスズムシ 大谷 英児----9 鳥越 けい子---11 碁石海岸・雷岩 外洋に面した海岸線の音 いわき・五浦の音風景探訪に参加して 佐藤 宏 ---13 福島サウンドスケーププロジェクト 永幡 幸司---15 定点観測プロジェクト (from 2011, July .02) 川崎 義博---17 定点観測プロジェクトに参加して 箕浦 一哉---21 サウンドスケープが社会に対してできること、すべきこと

日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト途中経過発表会第2部の記録より 永幡 幸司---23

小特集 個人化社会とサウンドスケープ

レポート:シンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」 大門 信也---27 個人化社会における環境コントロールツールとしてのiPod 南田 勝也---35 持ち歩かれる歌と流れる音楽一香港の若者たちの事例から 辻本 香子---37

解説:今日の聴覚体験をめぐる論点

ーサウンドスケープ研究とポピュラー音楽研究の接点を意識して 大門 信也・小川 博司---41

20周年特別企画

平松前理事長に聞く 日本サウンドスケープ協会ー前史ー1

平松 幸三・池村 弘之・上野 正章・佐藤 宏・鳥越 けい子---43

レポート

2012年度 春季研究発表会(大阪)報告 上野 正章---53 2012年度 秋季研究発表会(横浜)報告 船場 ひさお---59

ワーキング・グループ活動報告

2011~2012年度 サウンド・エデュケーション・ワーキング・グループ活動報告 土田 義郎---67 2012年度 庭園のサウンドスケープ・ワーキング・グループ活動報告 曽和 治好---69

編集後記 川井 敬二

【特集:震災プロジェクト】

日本サウンドスケープ協会震災プロジェクトの概要

Outlines of the Soundscape Project for Earthquake Disaster 3.11

●永幡 幸司

Koji NAGAHATA 福島大学 Fukushima University

キーワード: 東日本大震災, サウンドスケープ研究, サウンドスケープ・デザイン

keywords: The Great East Japan Earthquake, Soundscape Research, Soundscape Design

1 はじめに

2011 年 3 月 11 日の三陸沖を震源とする観測史上日本最大の地震により、日本は大きく揺さぶられた。文字通り、物理的に揺さぶられただけでなく、科学・技術、メディア、学術、政策、…と、既存の価値観に基づいて動いてきた社会全体が揺さぶられた。

この巨大な搖動を受け、これまでの社会のあり方、そして価値観に対する見直し作業が始まっている。学術に対する、学術に今、何ができるのかという問いも、その中の一つだ。科学、社会、芸術の三者の中間地帯を本領とすると説明されるサウンドスケープ研究¹⁾も、この問いから免れることはできないであろう。

このような状況の中、日本サウンドスケープ協会は、2011年5月7日に「東日本大震災〜サウンドスケープに出来ること・すべきこと〜」と題する緊急例会を開催した。この例会における議論の中で、日本サウンドスケープ協会として、この震災に対するサウンドスケープ研究を行う震災プロジェクト(以下、震災プロジェクト)を立ち上げる運びとなったことは、既報²のとおりである。

震災から1年あまり経った2012年3月20日に、震災プロジェクトの1年目の途中経過発表会が開催された。プログラムは、表1に示したとおりである。本特集は、震災プロジェクトの報告であると共に、この途中経過発表会の報告でもある。このような位置づけの特集の中で、本稿の役割は震災プロジェクトの概要を述べることにある。

2 震災プロジェクトの趣旨

<u>震災プロジェクトのホームページ</u>³⁾では、このプロジェクトの趣旨として、次の文章が掲げられている。

この度の東日本大震災により、被災地のみならず日本中の様々な地域で、サウンドスケープが変化しました。物理的な音環境が変化しただけでなく、それを聞く私たち自身が変化したという側面もあると思われます。これらの変化を記録すること、そして記憶に留めることは、私たち自身がサウンドスケープのあり様を考える際の貴重な手がかりになるばかりでなく、次の世代の人たちにとっても、同様の価値を持つものであると考えます。

そこで, 日本サウンドスケープ協会震災プロジェク

表1 震災プロジェクト途中経過発表会プログラム

24.1	及外ノ・マニノーを一位過几次と	4/ /	7
第1部:経過報告			
1	震災プロジェクトの概要説明	永幡	幸司
2	宮城野のすずむしを聞く会	大谷	英児
3	碁石海岸・雷岩探訪	鳥越	けい子
4	五浦海岸探訪	佐藤	宏
5	福島サウンドスケープ	永幡	幸司
6	定点観測プロジェクト	川崎	義博
第2部:ディスカッション			
	サウンドスケープが社会に対し	<司会>	,
	てできること, すべきこと	塩川	博義

トでは、東日本大震災を、サウンドスケープという観点から見つめ、記録し、記憶に留めるための企画を実施します。これらの企画を通して、より多くの人々と共に、私たちが生活する音環境のあるべき姿を考え、私たちのサウンドスケープをより調和のとれた、wellbeing に資するものへと変化させていければと考えています。

ここで『世界の調律』¹⁾を紐解こう。シェーファーは「人間とその環境の音との関係は何か、またこれらの音が変化する時に何が起こるのか。」というのが、サウンドスケープ研究の中心的な問いの1つであると説く。これに従えば、震災プロジェクトが着目する、東日本大震災による音環境の変化、そして、それを聴く人々の変化は、正にサウンドスケープ研究の主要な対象だと言えよう。

さらに『世界の調律』を読み進めると、サウンドスケープ・デザインについての次のような記述にたどり着く。

今やわれわれもまた、<サウンドスケープ・デザイン>と呼べるような分野を創始することになる。それは、音楽家、音響学者、心理学者、社会学者、その他の分野の人々が 音環境を改善するために知力を尽くした提案を出し合うため、世界のサウンドスケープを共に研究する学際領域である。この領域は、サウンドスケープの重要な特徴を記録し、その相違、類似、傾向を書留、絶滅に瀕している音を収集し、新しい音が環境の中に野放図に解き放たれるまえにそれらの影響を調べ、音が人間に対して持っている豊かな象徴性を研究し、異なった音環境における人間の行動パターンを研究することなどから成り立ち、こうした知識を人類の

未来環境の設計に用いようとするものである。

この記述と震災プロジェクトの趣旨を読み比べると、震災 プロジェクトの目指すところがサウンドスケープ・デザインの実践であることが読み取れるであろう。このように、 東日本大震災によって変化した日本のサウンドスケープを 対象に、サウンドスケープ・デザインの実践を行おうとい うのが、このプロジェクトの真意だ。

3 プロジェクト概要

震災プロジェクトでは、これまで、「音環境探訪」⁴⁷⁾「福島サウンドスケーププロジェクト」⁸⁾「定点観測プロジェクト」^{9,10)}の3つの現地調査を行ってきた。

「音環境探訪」は、日本サウンドスケープ協会会員が複数名で、共に残したい日本の音風景 100 選(以下、音風景 100 選)¹¹⁾に選ばれた地を中心とする音の名所を訪れ、現地の状況を見聞し、地元の方の話を聞き、そこで感じたこと、考えたことを参加者間で共有するという企画である。これまでにこの企画では「宮城野のスズムシ」「碁石海岸・雷岩」「五浦海岸」の3つの音風景 100 選に選ばれた地といわき市の海岸を探訪している。また、協会員の参加は1名だけの番外編として、音風景 100 選に選ばれた「大内宿」と仙台市で開催された「光のページェント」の探訪があった。

「福島サウンドスケーププロジェクト」は、原発事故の 煽りを受け、市内の大部分の地域が一般公衆の被曝限度を 超える量の放射性物質で汚染されてしまった福島市におけ る、原発事故後の音環境の変化の様子を記録し、世界に向 けて発信するプロジェクトである。

そして, 「定点観測プロジェクト」は, 宮城県内で, 津波で甚大な被害を受けた地域を中心に, 音環境の変化の様子の定点観測を行うプロジェクトである。

これら3つのプロジェクトの詳細については、本稿に続いて掲載された各記事⁴¹⁰⁾をご参照いただきたい。

また、震災プロジェクトの一環として、震災による音環境の変化の手記を一般公募し、ウェブページで公開するという「耳の証人」プロジェクトも行っている。このプロジェクトについては、次巻で報告予定である。

4 おわりに

震災に起因する音環境の変化は、本稿を執筆している 2013 年3月現在でも、まだ続いている。そして、学術に対する問いかけに対するサウンドスケープという分野からの 回答は、まだ出ていない。復興の過程と向き合いながら、真剣に考え続けるしかないであろう。それが、今の時代を 生きるサウンドスケープ研究者の務めなのではないか。

5 謝辞

日本サウンドスケープ協会震災プロジェクトにご協力いただいた全ての方々に心からの謝意を表する。

註

- 1) R. Murray Schafer (鳥越ら訳) : 『世界の調律』(平凡 社,東京,1986)
- 2) 永幡幸司,川崎義博,兼古勝史:緊急例会「東日本大震災~サウンドスケープに出来ること・すべきこと~」 をめぐって,サウンドスケープ,13,5-6,(2012).
- 3) 日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト: 日本サウンドスケープ協会・震災プロジェクト, URL: http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/saj-311/index.html (2013 年 3 月 17 日参照)
- 4) 永幡幸司:被災した音の名所を訪ねて:音風景探訪企 画の報告, サウンドスケープ, 14, 3-8, (2013).
- 5) 大谷英児: 宮城野のスズムシ, サウンドスケープ, 14, 9, (2013).
- 6) 鳥越けい子: 碁石海岸・雷岩, サウンドスケープ, 14, 11-12. (2013).
- 7) 佐藤宏:外洋に面した海岸線の音:いわき・五浦の音 風景探訪に参加して,サウンドスケープ,14,13-14, (2013).
- 8) 永幡幸司:福島サウンドスケーププロジェクト, サウンドスケープ, 14, 15-16, (2013).
- 9) 川崎義博: 定点観測プロジェクト(from 2011. July 02), サウンドスケープ, 14, 17-20, (2013).
- 10) 箕浦一哉: 定点観測プロジェクトに参加して, サウンドスケープ, 14, 21, (2013).
- 11) 環境庁大気保全局大気生活環境室監修:『残したい日本の音風景 100選』, (実業之日本社, 東京, 1997).

【特集:震災プロジェクト】

被災した音の名所を訪ねて

音風景探訪企画の報告

A Report on the Visiting Soundscapes of the Affected Area Project

●永幡 幸司 Koji NAGAHATA 福島大学 Fukushima University

キーワード: 音風景探訪企画, 宮城野のスズムシ, 雷岩, 五浦海岸

keywords: The Visiting Soundscapes of the Affected Area Project, Bell crikets in Miyagino, Thunder Rock, Izura-Kaigan coast

1 はじめに

東日本大震災から約1月経った2011年4月7日,日本サウンドスケープ協会のメーリングリスト上に,イギリスに滞在する平松 11 から,残したい日本の音風景 100 選(以下,音風景 100 選) 10 の被災状況を尋ねる投稿があった。それに対し,五浦海岸の六角堂が流されたこと 3,4 ,碁石海岸も音が変わっていると思われること 4 ,八戸港蕪島のウミネコにはどのような影響があったのかよくわからないということ 4 等の返答があった。私の記憶が正しければ,これが,本協会の公式活動の中で震災後最初に,音風景 100 選について具体的に語られた記録である。

この一件が端的に示すように、音風景 100 選に選ばれた地のような音の名所(ここで「音の名所」とは、「音を聴くことが楽しめる場所として広く知られている場所」程度の広い意味で用いている。)は、サウンドスケープに関わるものにとって共通の関心事であり、その被災状況は、震災後比較的早い時期から、多くの関心を集めるものであった。そのため、それらの現状を知るということは、サウンドスケープが、そして日本サウンドスケープ協会が、今般の震災に直面して何ができるのかを考える大きな手がかりの1つとなり得るであろう。

また、音風景 100 選等の音の名所は震災前の音の記録が 残されているため 5、震災前後の音の様子の変化を比較的 容易に知ることができる。そのことを通して、今般の震災 の激甚さ、更には自然の力の絶大さなどに思いを巡らせる ことも可能であろう。

このような考えより、日本サウンドスケープ協会震災プロジェクトの柱の1つとして、音風景探訪企画は立ち上げられた。この企画は、日本サウンドスケープ協会会員が複数名で、共に音風景 100 選に選ばれた地を中心とする音の名所を訪れ、現地の状況を見聞し、地元の方の話を聞き、そこで感じたこと、考えたことを参加者間で共有するというものである。ここで、複数の協会員で行くということにこだわったのは、次のような考えからである。ある地に複数のもので出かけ、そこで聞いた音風景について語り合う際、そこには複数の視点からの音風景が立ち現われる。それらをお互いに共有することで、一人で出かけた場合とは違った気づきが得られることであろう。そのような気づきが体験できる企画は、日本サウンドスケープ協会ならではの企画といえよう。

この企画では、これまで、宮城野(仙台市), 碁石海岸・雷岩(岩手県大船渡市), 五浦海岸(北茨城市)という3つの音風景 100 選の地と、いわき市の海岸を訪れた。

本稿ではこれら探訪の概要を報告する。

ところで、前述のとおり、この企画は複数で探訪することに意義を見出して実施されたものである。それゆえ、その報告もまた、複数の視点から書かれるべき性格のものであろう。紙幅の都合もあり、参加者全員とはいかなかったが、本号には本稿とは別に各探訪につき1名ずつの参加者レポート ⁶⁸⁾を掲載している。それらのレポートも本稿と併せて読んでいただけたら幸いである。

2 宮城野のスズムシ

宮城野のスズムシは、古来から七振り鳴く 9と風流人の間で名高く、昭和 46 年には市民投票で市の虫に選ばれる10)といったように、市民にも広く親しまれてきた。ここで七振りとは、スズムシが「リリリリリリリ」と7回1セットで鳴くということである。さらに、スズムシの音を「宮城野の音」として守ろうという取り組みがある 9ことも評価され、「宮城野のスズムシ」は音風景 100 選に選ばれた。そこで、音風景探訪企画の第1弾である「宮城野のスズムシ」では、宮城野のスズムシの音を聞くことと共に、スズムシを守り続けてきた「すずむしの里づくり実行委員会」の方々、そして、その活動を支える、宮城野区まちづくり推進課の方々と情報交換会を行うことを、主たる目的とした。この企画は、宮城野のスズムシの季節である 2011 年9月13日に開催された。

2.1 情報交流会

音風景探訪企画は、すずむしの里づくり実行委員会の 方々、宮城野区の方々、そして日本サウンドスケープ協会 のメンバーによる情報交流会で幕を開けた。情報交流会を 開催した岩切市民センターの周辺は、地震の被害が大きか ったところで、交流会当日、センターの外では復旧工事が 執り行われていた。そして、センター自体の被害も大きく、 まだ閉館中であった。そんな状況の中、センターの入口で はスズムシたちが出迎えてくれた (♪)。

情報交換会を始めるにあたり、まずは、すずむしの里づくり実行委員会の創始者である三浦一雄氏にご挨拶いただいた。続いて、日本サウンドスケープ協会理事長の鳥越氏より挨拶があり、震災プロジェクト代表である永幡から震災プロジェクトの概要紹介を行った。

交流会本編では、まず、すずむしの里づくり実行委員会の事務局長の鈴木孝雄氏から、すずむしの里づくり事業の概要についてご説明いただいた。彼の話によると、この事業の目的は、「市民の手で『すずむし』を飼育し、自然界に放虫し、自然の中で生息できるような環境造りを実施す



図1 岩切市民センターのスズムシ

ること」と「多くの市民が 『すずむし』に触れる機会を創出すること」の2点にあるとのことである。同委員会は大変アクティブに活動しており、スズムシの飼育を行い、市民に配布したり、 放虫するという活動のみならず、仙台市宮城野区内の小中学校ですずむしについての出前講座を行ったり、すずむしの奏でる音色と併せて生の音楽を聴くという コンサートを開催するなど、様々な事業を展開しているとのことである。また、委員会の拠点である岩切市民センターには「すずむし室」という名のスズムシの飼育部屋があり(図2)、そこで飼育されているスズムシは、無農薬の茄子を食べているとのことであった。スズムシの世話は、被災後も途切れることなく続けられ、世話係の方々が交代で、週3回世話をし続けてきたという。この継続力には、非常に感服した。

引き続き、すずむしの里づくり実行委員会を立ち上げた、 元岩切市民センター長の三浦一雄氏から、会の立ち上げの 話と宮城野のスズムシにまつわる様々な話を伺った。

昔の人たちの話によると、少なくとも昭和 10 年頃までは 宮城野(現在、野球場のあるあたり)で、間違いなくスズ ムシが鳴いていたとのことである。しかし、例えば一説に よると、進駐軍が殺虫剤をまいた際にスズムシまで巻き添 えをくったと言われているように、その後、スズムシの音 を聴くことはできなくなっていった。このように、時の流 れの中で、まちでスズムシの音を楽しむことが困難になっ てしまったということが、すずむしの里づくり実行委員会 の目的の背景にあった。

また、三浦氏の話によると、彼が岩切市民センターにセンター長として赴任する際、当時の宮城野区長から「市民にスズムシを配れるよう、ちゃんと育てろ」というミッションを与えられたのだそうだ。その当時、市民センターの夜間警備の方がスズムシの面倒をみていた。ところが、その方が急死されたため、誰かがスズムシの面倒見を引き継がなくてはならなかった。そこで、すずむしの里づくり実行委員会が成立していったとのことであった。

続いて、東北大学大学院でこおろぎの研究をされている 三浦大地氏から、「秋の夜長に聴く虫の声」というテーマ でレクチャーがあった。三浦氏自身の手による<u>このレクチャーの要旨</u>いは、日本サウンドスケープ協会震災プロジェ クトのホームページで読むことができる。

情報交換会最後に、宮城野区まちづくり推進課の後藤氏から、行政の立場から見た「すずむしの里づくり事業」についての紹介があった。事業の予算は、仙台市の補助率100%ではあるが、実際の活動については、実行委員がほぼ全てを運営しているとのことである。そして、実行委員を



図2 すずむし室の表札

助けるサポーターを, 市民センターでの講座を通して養成 し, その中から次の実行委員が出てくることを期待してい るとのことであった。この話を聞く限り, この事業は, 市 民主体でまわっている事業であると評価できるであろう。

2.2 放虫場所探訪

情報交流会に引き続き、すずむしの里づくり実行委員会の方々のご案内で、彼らが育てたスズムシを放虫している現場2か所を訪れた。

最初に訪れたのは、仙台市野草園である。この野草園は、市内中心部に程近い大年寺山に位置し、仙台市内の野山にある貴重な山野草を保護することを目的に1954年に開園され、東北地方の代表的な植物展示されている¹²。そのような野草園の一画に、スズムシは放虫されていた。私たちが訪れたのはまだ日が暮れる前の時間帯であったが、放された虫たちは元気よく鳴いていた(♪)。

野草園のスズムシを堪能した後,もう1か所の放虫場所に向かう道すがら,鈴虫壇という史跡に立ち寄った。ここは,その昔,お姫様たちが行列をつくって,スズムシの音を楽しみに来たと言われている場所だそうだ。残念なことに,今,ここにスズムシはいない。かつてスズムシがいたことを示す痕跡は,公園内に建てられた石碑と,鈴虫荘という公園前のアパートの名のみだ。

続いて訪れたのが、七北田川上流河川敷の放虫場所である。実行委員会の方によると、3年前からここでの放虫を始めたとのことである。JR東北本線沿いに位置するこの放虫場では、虫聴きを楽しんでいる最中に、電車が通り過ぎていく音が聞こえてきた(♪)。私は最初、どうせ放虫するのならば、電車みたいな無粋な音が間近に聞こえてくることがない場所を選べばよいのに、と思っていた。しかし、同行者の大谷英児氏(だったように記憶している)の、鉄道の音と共にスズムシの音が聞けるというのは、人の生活の近くでスズムシもまた生活しているということで、とても良い感じだ、といった趣旨の発言を聞き、確かにそのような聞き方もできるなと納得した。そのような気で聞いていると、通り過ぎていく車の音もまた、単なる雑音ではなく、一つの風景を織り成す様々な音の中の一つとして聞こえてくる。

野草園にせよ、七北田川河川敷にせよ、放虫された場所では、スズムシ密度が高い。そんなところで虫の音に耳を傾けていると、最初は虫かごの外のスズムシの声をとても贅沢に感じていたはずなのだが、だんだん私にとっては、そのありがたみが薄れていったことが印象的だった。

また、今回の探訪で七振りという言葉を覚えたので、七振り鳴くスズムシがいないか、シラブルの数を数えてみたが、私が数えた中では六振りのものまでしか見つけることができなかった。

2.3 自然生息地探訪

すずむしの里実行委員会の方々と別れ、軽い夕食をとった後、東北大の三浦氏の案内で、スズムシが自生しているという枡江の森を訪れた。ここは、音風景 100 選のガイドブック³で紹介されている地だ。

確かに、ここでもスズムシが鳴いていた(♪)。その密度は、放虫場所と比べて、明らかに低い。ここでのスズムシの音は、実に自然な印象であった。そして、いつまでも聴いていたくなるような、そんな素敵な音風景であった。なお、ここでも六振りのものまでしか聞き取ることはできなかった。

最後に、スズムシの生息地ではないが、津波により大きな被害を受けた、七北田川河口部を訪れた。大谷氏、東北大の三浦氏など昆虫の専門家たちの話によると、虫の卵が津波によって流出してしまったり、塩によってやられてしまったりして、虫が激減している恐れがあると考えられたからである。ときどきしながら現地まで向かった。そして、そこで聞いたのは、秋の夜を彩る、様々な虫たちの合唱である。津波にも負けず、虫たちは秋を謳歌していた。

このように、すずむしの里実行委員会の方々の尽力と、 虫たちの強い生命力により、宮城野の秋の音風景は守られ ていたことを確認することができた探訪であった。

3 碁石海岸・雷岩

碁石海岸は、陸中海岸国立公園の中に位置するリアス式海岸である。ガイドブックによれば、そこにある雷岩からは、「『ドーン』と足がたちすくむような巨大な音が響き渡る」²⁾のだという。実際、震災前の録音を聞いてもみると、とても迫力のある音が聞こえてくる⁵⁾。

今般の震災で、三陸海岸は津波による甚大な被害を受けた。碁石海岸のある大船渡市は報道等で有名となった奇跡の一本松のある陸前高田市と隣り合わせだ。そういう地理的状況にある雷岩とその周辺は、巨大な津波によりどのような影響を受けたのだろうか。それを自分たちの耳と目で確かめようというのが、探訪企画第2弾の目的であった。この企画は、2011年11月23日に実施された。

3.1 椿の里・大船渡ガイドの会会長との面談

碁石海岸探訪の手始めとして、雷岩最寄の観光施設である碁石海岸レストハウスを訪ね、そこで、事前に大船渡市商工観光課の方からご紹介いただいた小川廣文氏から、碁石海岸に関する様々な話を伺った。小川氏は、大船渡の観光地を自分たちで取材し、『大船渡観光ガイドブック』¹³⁾ というガイドブックにまとめているなど、アクティブに活動してきた地元のガイド団体、椿の里・大船渡ガイドの会の会長である。そして、私たちが訪れたレストハウスを運営する会社の社長でもある。このように、彼は雷岩について非常に良く知る、耳の証人である ¹⁴⁾。以下、小川氏の話に耳を傾けてみよう。

碁石海岸にある碁石岬は、江戸時代には碁石岬と呼ばれるようになっていたようだ。名前の由来は、碁石浜や大浜といったこの辺の浜にある石が、碁石のような形をしているところからきたと言われている。浜にころがっている石



図3 碁石海岸レストハウス前に建てられた石碑

のうち、その多くを占めている黒い石は、碁石浜のあたりで産出される石で、堆積岩が剥がれ、洗われることでできた石である。そして、白い石は北東や南西の対岸から流れ着いた石だと言われている。

大正 12 年(1923 年)8 月に村道ができ、自動車で多くの人が来訪するようになったという記録が残っている。当時の資料にはこのあたりの八勝が挙げられており、その中に「碁石浜」も含まれていた。昭和 12 年(1937 年)に、碁石海岸が国指定の名勝・天然記念物として指定され、昭和 30 年(1955 年)には国立公園に指定された。観光客が来るようになったのは 5~60 年前からと思われるとのことである。

このあたりを特徴づける音として,音風景 100 選に選定された雷岩の轟音は,元々有名であった。この音は,洞穴に押し寄せてきた波が洞窟内の空気を圧縮することで生じると言われている。

加えて、最近は碁石浜の波音も「音がきれい」と言われ、パンフレットなどに載るようになった。これは「雷岩」が100選に選ばれた後の話であり、100選の副次効果だろうと思われる。もともと、碁石浜のあたりはワカメの作業場で、観光の場ではなく、あまり音についての意識はなかった。

津波の際、岬の突端部は大きな影響を受けなかった。けれども、奥の方に入っていくと大きな被害を受けている。例えば、岬の突端部の高台にあるこのレストハウスは、地震で柱にひびが入ったものの、津波の被害は受けなかった。しかし、大船渡市内にある(小川氏の)会社の事務所は、木工団地から流れてきた丸太が37本もささり、大きな被害を受けた。

雷岩の轟音は、震災前、レストハウスの中に居ても聞こえてきていた。しかし、震災後は音が小さくなり、レストハウスの中まで聞こえてくることはなくなった(実際、私たちが話を伺っている間に、それらしき音は全く聞こえてこなかった。)。津波の際に、洞穴の中に何らかの変化があったのだと考えられる。この音が小さくなったということは、地元新聞の記者にも伝え、記事になった。

また, 碁石浜の波音も, 石が波の中を泳ぐ距離が短くなってしまったためか, コロコロという音が聞こえづらくなった。でも, 大浜の方は, 今でも聞こえるはずである。

震災前は、1 日にバス2台ずつ予約が入っていたが、震災により、入っていた6月までの予約が全てキャンセルとなった。今でも観光客はほぼ0だ。ここに食事を食べに来ているのは、ボランティアさんや、親戚などを訪ねに来た人たちだ。津波で店が流されてしまったため周囲に食事ができるところがほとんどないので、結構離れたところからでも、ここまで食べに来る。レストハウス1階の土産物屋



図 4 雷岩

では、震災後は生活用品も置くようにした。これも、周りのお店が流れてなくなってしまったことへの対応である。

3.2 雷岩探訪

レストハウスで話を伺った後、小川氏の案内で、雷岩に向かった。小雨の降る中のことである。雷岩の前に立ち、波音の中にそれらしき音を探すのだが、一向に聞こえてこない。小川氏の「ほら、今、出た」という声を何度か聞くうちに、なんとなく、それらしき音を探し出すことはできた。しかし、私がそれだと認識した音が本当に目当ての音だったのか、今一つ自信が持てない。同行した乗友美智子氏は、おおよそ6分に1回程度の頻度で、雷岩の音らしき音を聞いたという 150。私がそれだと認識した音も、だいたいそれ位の頻度であったので、おそらく勘違いではなかったのだと思いたい。

記録のため、現地の音を一応は録音をしてみた(♪)。 読者諸氏も、雷岩の「轟音」を探してみて欲しい。なお、 録音開始後しばらくは、ヘッドホンでモニタをとっていた のだが、その間に聞こえた音は、マイクが風に吹かれたノ イズなのか、目当ての音なのか、正直よくわからなかった ことを付記しておく。

3.3 碁石浜探訪

雷岩の「轟音」探しを1時間程行った後、引き続き小川氏の案内で、碁石浜に足を運んだ。前述の小川氏の話にあるように、碁石のような形をした石が敷き詰められた浜である。震災前は浜一面の碁石だったとのことであるが、津波で石が流されたため、石がないところも見られるようになってしまっていた。

ここの波音は、碁石浜の名の由来でもある碁石のような石が、コロコロと石が波の中を転がっているような音が特徴的である(♪)。石が流されてしまったためか、このコロコロという音も、震災前より聞きづらくなってしまったとのことである。

このように、音風景探訪企画第2弾で訪れた地は、津波の計り知れない巨大な力により、音環境が大きく変わってしまっていた。雷岩の轟音が、時間の流れの中で、元の轟音に戻るのか、このまま静かな状態を保つのか興味があるところである。ここの音風景は、今後も定期的に再訪して



図5 碁石涯

いきたいと思うし、いく必要があると考える。

4 いわきの海岸

いわき市は福島県の南端にあり、音風景 100 選に選ばれた五浦海岸のある北茨城市と隣接している。ここには、庄野泰子氏の有名なサウンドインスタレーションが設置されていたり、うつくしまの音 30 景(福島県版音風景 100 選)に選ばれた浜が2つもあったりと、音名所がいくつもある。そこで、2012 年 3 月 1 日に開催した音風景探訪企画第 3 弾の前半では、いわきの海岸線にある音名所を巡ってみた。

4.1 小名浜港 2号埠頭探訪

いわきでの最初の探訪の地は、小名浜港2号埠頭であった。さんまの展示で有名な水族館、アクアマリンふくしまに隣接する埠頭である。ここには、庄野泰子氏によるサウンドインスタレーション"Wave Wave Wave"と"Umi-Tsukushi"が設置されている。

小名浜の津波の被害は深刻であり、私たちが訪れた際には、アクアマリンふくしまは開館していたが、埠頭はまだ復旧工事のため、立ち入り禁止であった。アクアマリンの脇から覗いてみると、インスタレーションは無事のように見えた。そこで、工事を管轄している福島県小名浜港湾建設事務所にご無理を聞いていただき、事務所の遠藤氏に現場を案内していただくことになった。

遠藤氏の話によると、"Wave Wave"も"Umi-Tsukushi"も、構造体そのものは無事だったが、夜間のライトアップのための装置などの付帯設備は、津波によって破壊されてしまったとのことである。また、"Wave Wave Wave"のまわりの舗装も被害を受けていた。

私は震災以前に何度か"Wave Wave Wave"を訪れているが、その際はいつも、観光客の声とともに海の音を楽しんでいた。しかし、今回周囲から聞こえてきた音は、巡視艇の無骨な音であった(♪)。これは、新鮮な体験ではあったが、こんな音風景は一度聞けば十分である。早く平時の観光客の明るい声とともに海の音が聞ける状況に戻ってほしいと心から思った。

海にあてた聴診器である"Umi-Tsukushi"(♪) は、海の音を楽しめるよう、潮位を十分に考慮した長さのパイプが海側に入れられていた。しかし、埠頭が地盤沈下してしま



図 6 Wave Wave Wave

い、パイプの先が海の中に入ってしまうことが多くなってしまったため、期待通りの音が聞けない日が多くなってしまったとのことである。私たちが訪れた際は、潮位が特に低い時であったため、海側に一番深く入れられているもの以外は、そこから聴こえてくる音を堪能することができた。これは、とても運が良いことのようであった。

4.2 豊間海岸探訪

次に訪れたのは、豊間海岸である。ここは、いわき市内で唯一、鳴き砂が聞ける浜ということから、うつくしまの音30景に選ばれた地である。

私たちが訪れる前日、いわき地方は雨だったようで、浜はどこも湿っていた。そのためか、砂はどこもがっしり固まっていて、靴を少しだけ土の中に沈ませるのにも、かなり力が必要であった。そんな悪条件の中、鳴き砂の音を求めて、浜辺の北側から南側まで、そして海よりから陸側まで色々と歩いてみた。しかし残念なことに、最後の最後まで、砂が鳴くのを聞くことはできなかった。今回の同行者の1人である鳥越けい子氏によれば、砂が乾いていないと、鳴かないのではないかとのことである。したがって、震災後も砂が鳴いているか否かについては、砂が乾いていそうな日を見計らって再調査する必要があろう。

浜辺には私たち探訪者以外誰もおらず、津波で大被害を受け、多くの家が流されてしまった防潮堤の向こう側にも人影はなく、自動車の音なども聞こえてこなかった。そのため、私たちが鳴き砂探しの歩みを止めれば、聞こえてきたのは海の音ばかりだった。津波で壊滅的な被害を受けた集落の姿を見たせいもあり、実は、はじめのうちは波の音が本当に怖かった。しかし、ここの波音は美しかった(♪)。波音以外聞こえてこない環境下で、高いシュワシュワいう音が左右に動いていく様子が、非常にクリアに聞こえてきたことが特に印象的だった。その音を聴いているうちに、だんだん怖さは薄れていき、最終的には波の音が楽しんでいた。

4.3 薄磯海岸探訪

塩屋埼を挟んで豊間海岸の北側に位置する薄磯海岸は潮騒と海岸に生息するカモメたちの鳴き声によってうつくしまの音 30 景に選ばれたとのことである。確かに、浜の北側にてカモメたちは羽を休めていた。しかしながら、寒かったせいか、はたまた17時前後と時間が遅かったせいか、カモメの声を聴くことはなかった。

ここでも浜辺には私たち以外に誰もおらず、津波で甚大



図7 豊間海岸

な被害を受けた防潮堤の向こう側の集落にも人はおらず, 通りかかる車もほとんどなかったので、聞こえてくる音は 波の音ばかりであった。この日のここの波音は、豊間海岸 の波音を楽しんだ後の私にとっては、あまり魅力的でなか った。日が異なれば、もっと魅力的な音に出会えるのかも しれないが。

このように、音風景探訪企画第3弾の前半では、2か所の波音を聞きに行ったが、そのどちらにおいても、周囲の集落が津波で流されてしまったせいで、人の出す音が聞こえてこず、波の音だけが響き渡っていた。この自然の奏でる音の不変さと、人の出す音の不在との対比から、第2弾で訪れた碁石海岸とは違った形で、自然の力の巨大さを強く感じとることができた探訪であったと小括したい。

5 五浦海岸探訪

岡倉天心は、東京美術学校(現東京芸術大学)を辞し、日本美術院を創設する際、茨城県の最北端、五浦の地を選んだ。五浦は、端磯、中磯、椿磯、大五浦、小五浦という5つの浦から成っており、岡倉天心はそのダイナミックで変化に富んだ景観に魅了され、ここに居を構え、晩年を私語したのだという 160。彼が聞きながら思索したという波音により、この地は、音風景 100 選に選ばれている 20。2012年3月2日に実施した音風景探訪企画第3弾の後半では、この五浦の地で岡倉天心とその愛弟子たちが聞いたであろう音を巡る探訪となった。

5.1 茨城県天心記念五浦美術館訪問

茨城県天心記念五浦美術館は,五浦の最も北側である端磯の北側に位置している。この美術館は,岡倉天心とその弟子の横山大観をはじめとする五浦の作家たちの業績を顕彰することが目的の一つとして建てられたとのことだ。

美術館内にある岡倉天心記念室では、天心の業績が常設展示されている。その中には、天心の晩年の書斎まで再現されていた。併せて、横山大観ら天心に指導を受けた作家たちについて紹介する一画もある。そこには日本美術院研究所で並んで絵を描く作家たちの写真が展示されていた。また、美術館内には、岡倉天心邸、横山大観邸、日本美術院研究所等の位置関係を示す立体地図が設置されており、そこから岡倉天心と日本美術院に集まった天心の弟子たちとの関係の深さを読み取ることができる。

ここは、天心とその弟子たちが創り上げた、五浦海岸の 持つ文化の一側面を知るには絶好の美術館である。五浦の 音風景をより深く味わうためにも、ここの音風景を探訪す



図8 五浦海岸・中磯

る際には、ぜひ立ち寄っていただきたい。

5.2 天心らの聞いた音風景探訪

中磯は岡倉天心が創設した日本美術院研究所があった場所である。跡地は現在、天心遺蹟記念公園として整備されている。崖下から聞こえてくる波音は、横山大観ら日本美術院研究所の作家たちの作品制作中にも変わらず聞こえていたことであろう(♪)。

日本美術院研究所の跡地から少々南へ下った先にある浦の最深部からは、浦全体を見渡すことができる。ここでの波音は、北側からの波が崖にぶつかる重低音がよく聞こえてきて、私好みの音であった(♪)。

続いて、茨城大学五浦美術文化研究所の前まで訪れた。 ここは旧岡倉天心邸であり、その敷地内に六角堂があった。 冒頭に記したとおり、今般の津波により六角堂は流されて しまい、私たちが訪れた際はその復旧工事の最中であった。

その後、六角堂を眺めることができたであろう小五浦まで足を伸ばした。同行者の鳥越けい子氏の言葉を借りれば、ここで波音を聞くということは、天心が聞いたのと同じ波音を、対岸で聞いているようなものだ (♪)。六角堂跡地を眺めながら、しばし波音に耳を傾けた。

五浦の音風景探訪の最後に、岡倉天心の墓地を参拝した。岡倉天心の遺骨は、彼の辞世と伝えられる「我逝かば花な手向けそ浜千鳥/呼びかう声を印にて落ち葉に深く埋めてよ/12 万年明月の夜/弔い来ん人を松の影」に従って、五浦に分骨されている。波の音がほどよく聞こえてくる墓地で、岡倉天心はどのような音を聞いているのだろうか。

六角堂の復元工事は終わったとのことである。復元後の 六角堂で聞く波音は、天心の聞いた波音と同じだろうか。 再度五浦に足を運び、六角堂での波音を聞きながら思索に 耽ってみたい。そんな余韻を残して、五浦の音風景探訪は 幕を下ろした。

6 おわりに

音風景探訪企画で、被災地の音名所を訪ねてみて改めて 感じたことは、サウンドスケープに興味を持つものが連れ だって現地を訪れ、そこの音風景を聴き、地元の方々の話 を聞き、感じたこと、考えたことを話し合うことの、実り の多さだ。音風景への思いを共有することは、世界の調律 ¹⁴⁾の基盤だ。本稿をここまで読み進めてくださった方々に は、ぜひ、次回の探訪企画の参加者となっていただきたい という願いを書いて、筆を置くことにしたい。



図9 五浦海岸・小五浦

註

- 1) 平松幸三:残したい音風景百選はどうですか,日本サウンドスケープ協会メーリングリスト,saj:01020,(2011).
- 2) 環境庁大気保全局大気生活環境室監修:『残したい日本の音風景 100選』, (実業之日本社, 東京, 1997).
- 3) 大庭照代: Re: 残したい音風景百選はどうですか, 日本サウンドスケープ協会メーリングリスト, saj:01021, (2011).
- 4) 鳥越けい子: Re: 残したい音風景百選はどうですか, 日本サウンドスケープ協会メーリングリスト, saj:01022, (2011).
- 5) 例えば, 財団法人日本伝統文化振興財団: 『日本の音 風景 100 選まるかじり』, (ビクターエンターテイン メント, 東京, 2009).
- 6) 大谷英児:宮城野のスズムシ, サウンドスケープ, 14, 9, (2013).
- 7) 鳥越けい子: 碁石海岸・雷岩, サウンドスケープ, 14, 11-12. (2013).
- 8) 佐藤宏:外洋に面した海岸線の音:いわき・五浦の音 風景探訪に参加して,サウンドスケープ,14,13-14, (2013).
- 9) 日本の音風景検討会: 残したい"日本の音風景 100 選" の選定にあたって, 騒音制御, 20(4), n.d., (1996).
- 10) 仙台市:紋章, 市の花・木・鳥・虫, 仙台市ホームページ, http://www.city.sendai.jp/kikaku/seisaku/toukei/mark/index. html (2012年3月1日参照)
- 11) 三浦大地: 秋の夜長に聴く虫の声, 日本サウンドスケープ 協会 震災 プロジェクトホームページ, http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/saj-311/miyagino/miura_abstract.html (2012年3月1日参照)
- 12) 財団法人仙台市公園緑地協会:仙台市野鳥園,(仙台市公園緑地協会,仙台,2011).
- 13) 椿の里・大船渡ガイドの会:『大船渡観光ガイドブック』,(椿の里・大船渡ガイドの会, 岩手, 2011).
- 14) R. マリー・シェーファー (鳥越ら訳): 『世界の調 律』, (平凡社、東京、1986).
- 15) 乗友美智子:参加者の感想,日本サウンドスケープ協会 震災 プロジェクトホームページ, http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/~nagahata/saj-311/goishi/index.html (2012年3月1日参照)
- 16) 茨城大学: 天心遺跡 茨城大学五浦美術文化研究所 (パンフレット),(茨城大学, 茨城, n.d.).

【特集:震災プロジェクト】

宮城野のスズムシ

Bell Crickets in Miyagino

●大谷 英児 Eiji OHYA 森林総合研究所 FFPRI

キーワード: 音風景探訪企画, 宮城野のスズムシ

keywords: The Visiting Soundscapes of the Affected Area Project, Bell crikets in Miyagino

宮城野は宮城県宮城野区の一部、木ノ下の北側、榴ヶ岡の東側、すなわち現在のクリネックススタジアムを中心とする一帯を指すが、ここには昔「七振りのスズムシ」と呼ばれるスズムシが生息していたと言われている。

「振り」とは、スズムシがリーン・リーンと「鈴を振る」ように鳴く回数のことである。スズムシの雄成虫は繁殖のため雌成虫を呼ぶ際に、右前翅の裏側にある「やすり器」を左前翅の表側にある「こすり器」でこすって音を出す。この「振り」の回数は、普通は3回から5回くらい(東京産は3-4回、浜名産は4-5回(松浦 1989))であるが、宮城野のスズムシは7回振ると言われていた。

震災プロジェクトでは、この「宮城野のスズムシ」を飼育し野外放虫している「すずむしの里づくり実行委員会」、その放虫場所である七北田川上流河川敷(♪)と仙台市野草園、今では住宅街の公園の片隅にある鈴虫壇、そして現在でも野生のスズムシの声が聴ける枡江の森公園(♪)・七北田川河口部河川敷などを訪問した。

江戸時代、伊達藩の姫たちはスズムシの声を聴くため、ここ宮城野原に「鈴虫壇」なるものを設けた。秋には緋毛氈が敷かれ、姫たちは野点などをしながらスズムシの声を愛でたという。青葉城から鈴虫壇への道は「鈴虫道」とも呼ばれたそうである。現在ではクリネックススタジアムの東500mほどの南宮城野公園内にその記念碑を残すのみとなった。このように「七振りのスズムシ」は、すでに江戸時代初期からスズムシの有名ブランドであり、江戸で虫売りが大流行した寛政年間には高価で取引されていたという(加納 2011)。なお、スズムシの生息北限は現在岩手県南部であるが、江戸時代の年平均気温は今より数度低かったため、当時はこの辺りが北限だったのかもしれない。

七北田川河口部では、震災に伴う大津波のため河川敷は すべて冠水し、表土は流出したのみならず、3月11日に 地中にあった虫たちの卵は、流失あるいは塩害による浸透 圧のため多くが破壊されたと思われた。しかし6カ月後の 夜に訪れてみると、エンマコオロギ・オカメコオロギ類・ カンタンなど多くの種が盛んに合唱しており驚かされた。 津波による影響があったかどうかを評価するには、津波以 前の録音と比較しなければいけないのだが、種数・個体数 とも、津波を受けていない同等の河川敷と、さほど遜色が ないように聞こえた。

今回の津波の規模は貞観津波並みであり、およそ 1100 年 ぶりだという。コオロギやスズムシの先祖は 3 億年前の古 生代後半にはすでに地上に姿を現していたというから、彼らの遺伝子はこの規模の津波さへ、すでに 3 0 万回も経験してきたことになる。このような淘汰圧の洗礼を受けてきた子孫たちなのだから、今回の津波によって思ったほどの影響を受けていないことは驚くに値しないかもしれない。放虫場所である東北本線岩切駅近くの河川敷でスズムシの声を録音していたとき、折しも目の前の鉄橋を通過する列車の走行音と警笛が聞こえた(♪)。岩切駅 1 9 時 5 分発一関行普通列車だ。津波の被害を受けてしばらく経済活動も停滞していた三陸沿岸を通る列車だ。私には、人間の復興に虫たちが声援を送ってくれているように聞こえた。

註

- 1) 松浦一郎 (1989) 鳴く虫の博物誌、文一総合出版
- 2) 加納康嗣(2011)鳴く虫文化誌、HSK

【特集:震災プロジェクト】

基石海岸·雷岩

Goishi Kaigan • Kaminari Iwa / Thunder Rock

●鳥越けい子

Keiko TORIGOE 青山学院大学 Aoyama Gakuin University

キーワード: 音風景探訪企画, 雷岩, 碁石浜, 世界の調律

keywords: The Visiting Soundscapes of the Affected Area Project, Thunder Rock, Goishi Beach, The Tuning of the World

東日本大震災とその後の津波によって、特定の場所のアイデンティティを担うさまざまな音が失われている。それらは、それぞれの地域の暮らしや活動に大きな喪失感をもたらすと同時に、私たちに深い学びの機会を与えている。

*

碁石海岸は、岩手県大船渡市の南に位置する末崎半島の東南部、約6kmにわたるリアス海岸一帯の景勝地(図1)。名前の由来となった碁石のような形をした扁平な石が敷き詰められた「碁石浜」をはじめ、3つの洞門を持つ「穴通磯(あなとおしいそ)」、深くえぐられた豪快な景観の「乱曝谷(らんぼうや)」等、碁石八景と呼ばれる場所がある。

その八景のひとつが「雷岩」(図2)。巨大な岩のなかにできた洞穴内部の空気が、岩に打ち当たる波によって圧縮される。その空気が、海中に一気に排出されるとき、雷鳴のような音が轟くことから、その名前がついた。環境省による「残したい日本の音風景」にも選定され、同省サイトには「打ち寄せる波を切り裂く、足がすくむような轟音/季節や時期に関係なくいつでも聞くことができる」¹⁾と紹介されている。

この音風景への津波による影響を確かめるため、協会の仲間たちと現地を訪れたのは、2011年の11月23日の午後だった。一ノ関からレンタカーで、陸前高田市を通り、先ず向かったのは碁石海岸レストハウス。予め連絡をとった



図1 碁石海岸と雷岩

大船渡市商工観光課より、その運営会社の社長、小川廣文さんを紹介いただいたからである。



図2 雷岩(崖上から見下ろす)

ていなかったのは、水平距離的には海面からの距離がかなりある、つまり文字通りの断崖絶壁の地形に守られたためだと思われた。

その建物のなかで、「椿の里・大船渡ガイドの会」会長でもある小川さんにうかがった碁石海岸の歴史は、この場所に村道ができたのは大正 12 年 (1923 年) 8 月。そのため、人々が自動車でやってくるようになったが、当時の資料には既に「碁石八景」の記載がある。その後、昭和 12 年 (1937 年) に国指定の名勝・天然記念物に、さらに昭和 30 年 (1955 年) に陸中海岸国立公園に指定され、多くの人々が訪れるようになったというものだった。

小川さんによれば、震災前はレストハウスのでもはっきり聞こえていたその雷鳴が、震災後、とても小さく頻度も稀になった。原因は恐らく、地震の衝撃で洞内に落盤が起こるなどして、岩のなかに取り込まれる空気の量その他に変化が生じたためだろう、とのことだった。その時点で、小川さんによる指摘はなかったが、地震による海岸の地盤沈下もまた、雷岩内部の空間を狭くしたに違いない。

また、大船渡湾の奥に位置する市街地の被害は甚大で、 市内にある小川さんの会社の建物には、近くの木工団地から流れてきた大量の丸太が突き刺さり、大きく破壊された という。そのような大きなショックと全くゆとりの無い情 況のなかにいたため、小川さんも含めた地元の人々が、雷 岩がその音を失ったことに気づいたのは、震災後数日経ってからだったとの話は、印象的だった。

その後、小川さんの案内で、雷岩の音を聞きに行った。



図3 雷岩の案内板





図4 津波で大量の石が流出 した碁石浜(左)と、 碁石浜の石(右)

レストハウス裏手の松林のなかを進むとすぐ、切立った崖下にその巨石を見下ろすことができ、そこには雷岩の説明板(図3)も設置されていた。氷雨のなか、皆でじっと耳を澄ましたが、いくら待っても、それらしい音はしない。

「あ、今ちょっと鳴りましたね」と、小川さんがつぶやく。しかし、私たちには何も聞こえない。それでも「ホラ、今のがそう」と何度か言われるうちに、ようやくその微かな音が聞こえてきた。それは、岩のなかでときおり低く響く「鼓動」のような音だった。が、それは「録音できる音」からは、ほど遠いものであるように思われた。

見た目は全く変わらないその巨石が、何とか命をつないでいることを、皆それぞれの思いで確かめている。音よりもむしろ静寂が、ときに大きな意味をもつことを思い出す…そんなひとときが続いた。そうしたなか、私個人としては、音風景をテーマに仕事をしてきた自分自身が長年、雷岩の音は「流氷の音」などに比べればいつでも聞ける、などと思っていたことを大いに反省かつ後悔した。

私たちはその後さらに「碁石浜」を訪れた。小川さんによれば、もとは碁石海岸のなかで「音の名所」と言えば「雷岩」だけだったが、音風景 100 選の指定を受けた後、この「碁石浜」の音も独特だということで、その音が「雷岩」の雷鳴とセットで扱われるようになったという。

堆積岩が剥がれ、長年波に洗われてできた黒石が敷き詰められたその浜の音に、小川さんと一緒に耳を傾けた。波が引くときに、波のなかを石が泳ぐ独特な音は、はっきり

と聞くことができたし、こちらは「録音可能な音」だった。 しかし、小川さんによれば「以前はもっと高く軽い感じだった」という。

帰り道、私たちは小川さんの解説のもと、以前は海岸を厚く埋め尽くしていた大量の石が、津波によってごっそりともっていかれた痕跡を確認した(図 4)。浜辺の石が、こんなにも激減したのであれば、その浜辺に打ち寄せる波の音も変化して当然、と思わずにはいられなかった。

*

R.M.シェーファーの主著『世界の調律』の原題、The Tuning of the World は、ロバート・フラッドの『両宇宙誌』の挿絵から採られており、その絵(図 5)はわが国では「宇宙の一弦琴」と呼ばれている。つまり、地球そのものがひとつの「楽器」であり、その楽器は「神の手」ならぬ「自然(地球と宇宙)の摂理」によって奏でられているということを意味している。

宇宙が地球を楽器にして奏でるそれらの音の一部は、人間と出会って聞き取られ、さらにその一部が「地域のシンボル」、サウンドスケープ研究の用語では「サウンドマーク/標識音」と呼ばれる音となる。

地球の営みはときに容赦なく、そうした音を奪い、また変化させる。人々は、それぞれの地域で大切にしてきた音の記憶や記録を手掛かりとして、自分たちの環境の変化をリアルに意識することになる。それらの音の変化を確認し、それを他の人々にも伝えようとする。

そうした営みのすべてが、自然と共に生きる人間の文化 活動そのものであり、震災プロジェクトの活動とその意義 もまたそこにあると言えよう。

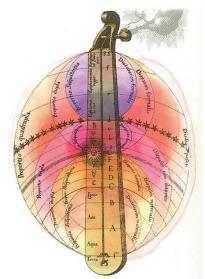


図5 宇宙の一弦琴 (『世界の調律』平凡社ライブラリー版カバーより)

註

- 1) http://envgis2.nies.go.jp/oto/
- 2) この石碑をはじめ、本稿が報告する「雷岩」と「碁石浜」 の画像と音については、永幡幸司:被災した音の名所を 訪ねて,サウンドスケープ,14,3-8,(2013)を参考とされ たい。

外洋に面した海岸線の音

いわき・五浦の音風景探訪に参加して

Sounds of Seashore Facing Outer Sea: Visiting Soundscapes of Iwaki and Idzura

●佐藤 宏 Hiroshi SATO

キーワード: いわき, 小名浜, 五浦, 六角堂, 東日本大震災 keywords: Iwaki, Onahama, Idzura, Rokkakudo, The Greart East Japan Earthquake

2012 年 3 月 1 日と 2 日、私は、永幡幸司会員が震災プロジェクトの一環として企画した、音風景探訪企画第 3 回(いわき市及び北茨城市五浦海岸)に参加しました。探訪の報告は既に、専用ホームページ(いわき市及び北茨城市五浦海岸)に掲載されているので、本稿では、一参加者として個人的に印象に残ったことを、書いてみようと思います。

私が参加した音探訪企画では、訪れる場所で震災前に、他では聞くことのできない特別な音が聴こえていた、という訳でもなく、震災前後の音の変化についても、小名浜港で地元の方に少しお話を伺えた以外は情報が無かったので、震災の影響を"調査"するのは難しい状況でした。津波の直撃を受けた町では、訪問時点では誰一人戻っていなかった地域も多く、家の基礎だけが残って並ぶ土地の状況から、震災前後の音の変化を、"想像"することも可能でしたが、私は訪問先を回りながら、見ず知らずの土地の過去を無理に想像するより、訪問先で聴いた音を足がかりに、これから先のことを想像してみた方がいいかな?と思うようになりました。

そして探訪2日目、旅の最後に訪問した、<u>五浦観光ホテル別館大観荘</u>の支配人から伺ったお話が、私にとって非常に示唆に富む内容でした。支配人によると、ホテル周辺の岸壁の遊歩道の手すりは、岸壁の風化に伴い何度も付け替えられているそうです。つまりこの地にホテルが開業してから100年もしないうちに、ホテル周辺の景観そのものは(岸壁の風化に伴い)大きく変化しているのですが、ホテル側は遊歩道の手すりを付け替えて、以前と同じような、景観の"楽しみ方"を、顧客に提供しているわけです。

さて、この視点を持って再度、今回の旅を振り返って見ると、小名浜港の Umi-Tsukushi は、震災による地盤沈下の影響で設置当初の音が聞こえなくなってしまいましたが、このような変化は、大地震が起きなくても、早ければ設置数十年後には避けられないと思われ、震災が結果的には、長大な時間の流れをシミュレートしたとも解釈できます。

五浦の六角堂も、今回は地震による津波で流されてしまいましたが、もともと六角堂が立っていた細長い岩場は、戦前に撮影された昔の写真と見比べると、六角堂建設以来、先端からどんどん浸食が進んでいるのが分かりました。六角堂もやはり、数十年後、どんなに遅くとも数百年後には、移設されない限り波に流される運命にあったと思います。

考えて見れば言うまでもないことですが、景観や音環境は、人為的な介入があろうがあるまいが、日々刻々変化し続けています。一方人々が、風景と呼んで語り継いできた概念は、特定の瞬間の景観や音や、香りや手触りではなく、ある程度の時間的変化を織り込んだ、全体的な印象だった



図 1 Umi-Tsukushi の音を録音中の筆者 (♪, ♪)



図2 再建のためやぐらが組まれた六角堂跡

はずです。私たちも、音風景を残すことや創ることを考えるとき、カメラや録音機の普及で無意識のうちに染み付いてしまった、特定の時間枠だけで世界を捉えがちな習慣にひきずられないよう、注意した方が良いのかも知れません。

ところで「震災の影響」とは別の視点から今回の訪問地を振り返ってみると、いわき市郊外や五浦で聴いた波音は、特別風が強い訳でもないのに、東京湾や相模湾の波音とは著しく違った印象のダイナミックな音で(音だけではなく実際に波も高いのですが)、やっぱり外洋に面した浜は違うな、というのが一番印象に残りました。



図3 豊間海岸に押し寄せる波



図4 湾曲した堤防の断面が独特の反響を生む (♪)

波音が比較的大きいおかげで、例えば豊間海岸の砂浜と 車道の間の堤防は、断面がまっすぐな壁ではなく、海側が 凹んだ弓形になっていて、海側から堤防に近づいて堤防か らの距離を変えながら音を聴くと、(恐らく壁からの距離 によって強調される周波数が変わるせいで)波音のピッチ が、まるで<u>フランジャー</u>(電子楽器の演奏で使われるエフ ェクタのひとつ)を通したように変化するのが楽しめまし た。

五浦の海岸線は、切り立った断崖に囲まれた小さな入り 江が多く、波音は一層荒々しく響いていました。外洋に面 したこの海辺の風景は、首都圏(東京湾や相模湾の湾内) と比べて、見た目も音も、季節や天候によって大きく変化 するのではないかと思います。私たちが五浦を訪れたのは ほんの半日足らずでしたが、横浜出身で海外の仕事も多か った岡倉天心が、わざわざ故郷からも首都からも遠く離れ



図5 五浦の切り立った岸壁(♪)

たこの地を、自ら率いる日本美術院の制作拠点にしたのも うなづけます。今でも五浦海岸周辺は交通量が少ない上に、 海岸と車道が離れているので、波音を録音するには絶好の ポイントではないかと思います。

今の日本でいろいろな街を訪れても、目に付くのは産業の違いと経済的な繁栄度合いの違いばかりですが、本当は、(産業構造に反映されなくても)土地それぞれの風土の違いがあるはずで、同じ外洋に面しているといっても、冬も温暖な外房と、冬はそれなりに寒いいわきや五磯(北茨城)とでは風土に大きな違いがあります。高々一泊二日の駆け足旅で、何か具体的な提案が出来る訳ではありませんが、どこかへ出掛けて何かを調べるときは、事前に設定された課題に沿って、知性で対象を捉えるだけではなく、何か新鮮な発見はできないかと、五感を働かせ続けるのも、大切ではないかと思います。

今回の旅では波音が印象に残りましたが、旅先によっては、風が印象に残ったり、光(湿気や塵や空気の汚染度合いによって日差しは微妙に変わる)が印象に残ったり。余談になりますが、都内の中原街道沿いに住むある友人は、今は(埋立てによって)海から遠く離れたその土地で、

「風が吹くと(故郷の湘南に居たときのような)潮の香りがする」と言います。それは単なる個人の思い込みかも知れませんが、それが工学や経済学やコミュニティー論からは生まれない、創造のきっかけになることも、あるのではないでしょうか?

【特集:震災プロジェクト】

福島サウンドスケーププロジェクト

Fukushima Soundscape Project

●永幡 幸司 Koji NAGAHATA 福島大学

Fukushima University

キーワード:福島サウンドスケーププロジェクト,福島サウンドスケープ

keywords: Fukushima Soundscape Project, Fukushima Soundscapes

1 はじめに

福島市は福島第一原子力発電所から 60km 離れている。しかし、運が悪い事に、原子力発電所の爆発事故当時の風向きの影響により、市内の大部分の地域が一般公衆の被曝限度を超える量の放射性物質で汚染されてしまった。このことにより、市民の生活は原発事故前と大きく変わった。それに伴い、福島市の音環境も原発事故前とは大きく異なっている。そして、それらは変化し続けている。

R. マリー・シェーファーが『世界の調律』¹⁾の中で述べているように、音環境の変化の様子を記録にとどめておくことは、サウンドスケープ研究の重要な役割の1つである。それ故、このサウンドスケープの変化を記録し、発信しなければ、私はこの時期にこの地に生きるサウンドスケープ研究者の役割を果たしたとは言えないのではないかと考えた。福島サウンドスケーププロジェクトはこのような考えから生まれたプロジェクトだ。

本稿では、このプロジェクトと、その成果物である『福島サウンドスケープ』の概要について紹介する。

2 プロジェクト概要

福島サウンドスケーププロジェクトの目的は、世界中の人々に、原発災害は市民の生活にどのような影響をもたらすのか知ってもらい、今後世界中の原発をどうしていくべきなのかを考えるきっかけとしてもらうことにある。このような目的を設定したのは、原発事故後の福島の音環境の変化は、当事者である市民は実感しているが、報道ではなかなか伝えられることがない、原発事故の市民生活への影響をよく象徴していると、私自身が強く実感していたためである。

前報²⁾に記したとおり、2011年5月1日に、小鳥の森、飯坂温泉、信夫山、新浜公園の4か所でフィールドレコーディングを行った。これが、福島サウンドスケーププロジェクトの始まりである。これらの地点は、まず第一に、私にとって福島らしいと思う地点であり、震災前からよく知っている地点である。さらに、これらの録音地点のうち、小鳥の森、飯坂温泉、信夫山の3地点は多くの市民にとってなじみ深い場所であり、信夫山と新浜公園は原発事故後、福島市内で最初に見つかったホットスポットであるという今回の原発事故についての象徴的意味を持つ。この時録音したサウンドスケープについては、前報²⁾に記したとおりである。

最初の録音を終えた後、市内を移動する際はデジタルレコーダとカメラを持ち歩くようにし、その時期の福島らしさを感じる音が聞こえてきたら、確実に記録できるように

表 1	『福島サウンドスケー	-プ』	の録音地点一覧
1.	阿武隈川	2.	飯坂温泉
3.	小鳥の森	4.	四季の里
5.	信夫山	6.	新浜公園
7.	高畑天満宮	8.	南向台小学校
9.	福島駅	10.	福島駅前
11.	福島県庁	12.	福島市内
13.	福島大学	14.	文化通り
15.	まちなか広場	16.	よしだ屋前
17.	渡利・天神橋	18.	渡利 (阿武隈川)
19.	渡利 (住宅街)	20.	渡利支所前
21.	渡利中学校		

(2013年3月16日現在)

している。そして一度記録した地点は、出来る限り定期的に訪れるようにしてきた。その結果、本稿を執筆している2013年3月16日現在で、表1に示す21地点のサウンドスケープの記録が蓄積されている。このなかには一部、例えばよしだ屋という行きつけのラーメン屋がなくなってしまったというような、一発もの(しかも、かなり個人的)のネタも含まれているが、多くの場所では定点観測を行っている。そして、この中には、渡利の住宅街における除染のように、短期間に集中的に記録している地点もあれば、小鳥の森のように数か月に1回記録している地点もある。

このような記録を整形して世の中に発表する際、それらのメインタイトルとして用いているのが『福島サウンドスケープ(Fukushima Soundscapes)』だ。従って、『福島サウンドスケープ』は、福島サウンドスケーププロジェクトの一環として制作された作品の総称ということもできる。

3 福島サウンドスケープ

『福島サウンドスケープ』の名の下に、最初に記録を公開したのは、ウェブページ³⁾の形であった(図1)。プロジェクトの目的である世界の人々に発信するということを実現するのに、最適な方法だと考えたからである。このページは、2011年5月8日に日本語版が先行して立ち上がり、同年5月26日に英語版の公開が始まった。そして、現在も随時、更新中である。

このページでは、トップページの下に、それぞれの地点における1回分の記録が1つのページとして登録されている。そして、それぞれのページは、各地点で録音した音(wav 形式と mp3 形式の2種類)と、1~4枚程度の写真、そして、録音した際の状況等を伝える簡単なコメントによって構成されている(図2)。プロジェクト全体の目的が、

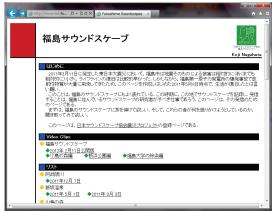


図1 『福島サウンドスケープ』のトップページ



図2 『福島サウンドスケープ』の一例

人々に考えてもらうことにあるため、コメントは客観的な 状況記述を中心に、できるだけ短く書くことを心掛け、私 自身の意見や感想等はよほどのことがない限り書かないよ うにしている。

『福島サウンドスケープ』として次に制作したのは、World Forum for Acoustic Ecology の承認の下、ドイツのディーブルクで 2012 年 7 月 25 日から 28 日に開催された "The Global Composition"という国際会議の一環として企画された展覧会での展示用 DVD に収めた映像作品である。この DVD には、『福島サウンドスケープ』の他、音風景探訪企画、定点観測プロジェクトの成果が収められている。

DVD 版の『福島サウンドスケープ』は、『小鳥の森』『信夫山』『新浜公園』『まちなか(まちなか広場を含む福島駅周辺の地点)』『福島大学の除染)』の 5 つの小品からなる。それぞれの小品では、各地点で録音した音を日付順につなげる形で編集し、その音に合わせた写真をスライドショー形式で切り替えていった。そして、日付と簡単なコメントを字幕で流すようにした。

なお、この DVD は、今後、現在計画中の日本サウンドスケープ協会 20 周年企画などの場で公開する予定である。

さらに、『福島サウンドスケープ』の作品として、2013年2月11日に東京大学で開催されたシンポジウム「アカデミズムは原発災害にどう向き合うのか」の中で上映するために制作した映像作品がある。

この作品は、2011 年 5 月から 2012 年 8 月までの福島市内各所の音環境の様子を、時間軸上に並べたものである。音に合わせた写真のスライドショーに、録音場所と日付の情報と簡単なコメントを字幕で流すというスタイルは、DVD版と同様である。また、この作品とあわせて、『小鳥の森』『新浜公園』『福島大学の除染』の 3 編について、プレン



図3 『福島サウンドスケープ』映像版 (写真をクリックすると映像が見られます)

テーションの中で使いやすいよう再編集した小品を作成した。

シンポジウム上映用の作品は、当該シンポジウムで上映した他に、福島大学共生システム理工学類人間支援システム専攻研究交流会でも上映した。また、この作品及び、同時期に再編集した小品は、ネット配信用に映像の解像度を下げたものを、<u>『福島サウンドスケープ』のホームページ</u>で配信している。興味を持たれた方は、本稿を読み終えた後に、ご覧いただきたい。

また、このレポートのために、シンポジウム上映用の作品からコメント字幕を除いたバージョンを作成した(ただし、ファイルサイズの問題で、解像度は落とした)。日頃からサウンドスケープに関心を持っている本協会会員の方々には、私のコメントに引きずられることなく、福島のサウンドスケープの変化を感じ取ってもらいたいと考えたからである。図3の写真をクリックすると映像が見られるようになっているので、以下へと読み進む前に、まず、ご覧いただきたい。

4 おわりに

皆さんは、福島のサウンドスケープから何を聞き取っただろうか。そして、何を考えただろうか。さらなる問いかけを1つ。皆さんは、サウンドスケープがこのような状況である福島に、積極的に住みたいと思っただろうか 4)。

今般の原発災害に直面し、サウンドスケープが、あるいは、日本サウンドスケープ協会が何ができるのか、何をすべきかを考えるにあたり、これらの問いかけが、1つの重要な切り口になるであろうことを指摘して、本報告を終わりたい。

註

- 1) R. マリー・シェーファー (鳥越ら訳): 『世界の調 律』, (平凡社, 東京,1986).
- 2) 永幡幸司: 東日本大震災の音風景をめぐって, サウンドスケープ, 13, (2012), 13-18.
- 3) 永幡幸司:福島サウンドスケープ, URL: http://www.sss.fukushima-

u.ac.jp/~nagahata/fsp_311/index.html (2013年3月16日参照).

4) 永幡幸司:なぜ, サウンドスケープ研究者の私が放射能 汚染問題に対して発言を続けるのか, 福島大学原発災害 支援フォーラム, 東京大学原発災害支援フォーラム編: 『原発災害とアカデミズム』,(合同出版, 東京, 2013), pp. 201-231.

定点観測プロジェクト(from 2011. July .02)

Fixed - point Recording Project

●川崎 義博

Yoshihiro KAWASAKI 東京藝術大学

Tokyo University of the Art

キーワード: 定点観測、東日本大震災、宮城県

keywords: soundscape observation, The Great East Japan Earthquake, Miyagi Prefecture

1 定点観測プロジェクトの始まり

2011年3月11日以降、SAJの ML 上で東日本大震災に 関しての様々な会話が交わされていた。当時「まずは現地 の人の生活が成り立つようになってからではないか?調査 は二の次で良いのでは?」と言う意見が多くを占め、「現 地に調査にいくのは控えては?」という空気になっていた。 勿論、「個々が、まずは関わりのある人や地域との対応で、 それどころではない!」という現状もあった。このような 状況の中、「サウンドスケープの研究として何が出来るの か?」が問われ、5月初頭に緊急の研究会が行なわれた。 実は、その一方で永幡(福島大)と川崎(東京芸大)の間 では「調査をどうするか?」がメールで話し合われていた。 実はこのメンバーは、1995年の阪神淡路大震災の折、 神戸市の六甲を拠点にサウンドスケープの調査をいち早く スタートさせ、その後1年間の調査を行なったメンバーで あった。その時の経験を踏まえ、早い段階からの調査が必 要である事はお互いわかっていた。「どのような調査が行 えるか?いつ現地に入るのか?何処に?」など話しあわれ た。居住地であり被災者であった神戸の場合と異なり、距 離だけでなく、関わり方が違う東北にいつ入るか? まし て、永幡は福島での原発被害の問題や避難場所としての福 島大学内での対応に追われていた。そこで、永幡の提案も あり、まずは現地に入り現状の把握と、現状の記録から始 めようと、この定点プロジェクトがスタートした。しかし、 実際に現地に入れたのはようやく4ヶ月後の7月であった。 まずは、観測し、記録して行く定点を決めようと現地に入 ったが、実は立ち入り禁止区域も多く、又、道が無く、侵 水のため入る事が不可能の土地も多くあった。その中で、 調査の為の定点が決められて行った。

2 調査目的とその方法

目的は簡単に言えば、「被災地の音からの調査」であり、「音環境の変化、コミュニティの変遷をサウンドスケープ調査から捉え、将来的な「街つくり」に役立つものにする」と言う事であるが、被災地に置ける調査例はほとんど無く、その手法も例がほとんどない。1995年から約1年間の神戸の調査(その後、10年後、15年後の調査も一部地域で行なわれた)では、実は震災以前から進んでいた音環境調査があった。震災後にその目的、対象、調査方法を急遽変

更し、神戸の象徴的な音、町の音が震災後にどう変化したか?を調査し、コミュニティの変遷、個々の生活の変遷、改めて「神戸の街」を捉えようとした。またその調査結果は報告書にまとめられ、街作りに役立つような提言として神戸市にも報告された。しかし、東北の場合は「何が出来うるのか?」を問いつつ、まずは記録を始めることでしか、スタート出来なかった。そこでは、神戸での経験に頼りつつ、「方法論」を改めて問い、「とにかく長期に記録して行こう」という模索の中からのスタートであった。サウンドスケープで何が出来るのか?

[調査項目]

なお、定点ポイントでの調査の項目は以下である。

- 環境音の録音 (高性能マイクによる録音,HD レコーダー使用)
- ・動画記録 (HDカメラ使用、360度)
- · 360°写真
- シートへの書き込み。
- ・ 聞き取り調査 (現場に人がいる場合は質問して聞き取り)
- 気になる音の記録(定点の音以外に、イベンタリーであれ、独特の音など)

[定点ポイント]

では、定点ポイントはどのような地点だろうか?以下の要素を考慮して決められた。

- 町や村の中心地
- 町や村の代表的、象徴的な場所
- 町の経済的中心地
- 古くから残る場所
- 人が集まる場所
- 自然の観点から興味深い場所
- 特に被害にあった地域

しかし、先に書いたように、2011 年7月の時点でも立ち入れないところが多くあったので、今後の調査の事も考え、仙台から車で行ける場所の宮城県の海岸部を中心に調査を進める事とした。2011 年7月の調査は、まず海岸線の近くを走り調べる事から始め、現状の把握、定点ポイントの候補決定、記録を行なって行った。2012 年3月の時点で再度同じ場所を確認し、15カ所以上を定点ポイントに決めている。又、2012 年7月の時点では、数カ所オプション的に追加されている。以下がポイントである。

東北調査ポイント

果北調宜かイント			
番号	名称	住所	
仙台			
A-1	仙台港岸壁	多賀城市七ヶ浜宮内4	
A-2	照徳寺	仙台市宮城野区新浜通	
A-3	荒浜小学校跡	仙台市若林地区荒浜	
A-4	荒浜海水浴場	仙台市若林地区荒浜	
A-5	名取日和山	名取市閖上	
A-6	仙台空港	名取市仙台空港	
A-7	仙台一番町	仙台市青葉区一番町	
A-8	阿武隈川河口	岩沼市鳥の海都市公園	
松島			
B-1	遊覧船乗り場	宮城郡松島町町内	
B-2	磯崎漁港	宮城郡松島町磯島	
石巻			
C-1	お稲荷さん	石巻市南浜町	
C-2	看護寮	石巻市南浜町	
C-3	加工工場区域	石巻市明神町	
C-4	日和山1	石巻日和が丘	
	日和山2	石巻日和が丘	
C-5	商店街	石巻市立町南三陸町	
南三陸	町		
D- 1	庁舎跡海側	南三陸町志津川塩入	
気仙沼			
E-1	曙橋	気仙沼市内の脇	
E-2	駅前	気仙沼市仲町	
E-3	魚市場岸壁	気仙沼市魚市場前	
E-4	フェリー乗り場	気仙沼南町	
E-5	大島乗り場	気仙沼市大島浦の浜	
E-6	十九鳴き浜	気仙沼市大島大初平	

[調査日 調査員]

第一回 調査 2011年 7月

川崎 西原 岡本

第二回 調査 2012年 3月

川崎 西原 箕浦

第三回 調査 2012年 7月

川崎 西原 箕浦

マッピング地図



3 調査例

[仙台港]

定点に決めた理由

- ・ 仙台港(仙台塩釜港 仙台港区) は、仙台市に直結。
- 太平洋フェリーの発着港、東北の玄関。
- 貨物フェリーの発着港。
- 車などの積出港。
- 震災時 物資の補給の拠点。
- 高速のインターチェンジが近くにある。
- 釣りのポイント



1) 2011年

音:荷物用フェリーのエンジン音、壊れた施設を解体する クレーン、波音、釣り人の声。

2011年7月の時点で、入れたのは1カ所。そこにフ ェリーが1隻入り荷揚げが行なわれていた。至る所で壊れ た施設は解体中であった。又、岸壁が壊れ、フェリーター ミナルも立ち入り禁止であった。向かいの岸壁には巨大な 船が打ち上げられていた。空き地は壊れた自動車がかなり の数積み上げられていた。震災後初めて来た釣り人が釣り

車などの出入りは少ない。

2) 2012年

音:フェリーのエンジン音、行き交う車、岸壁工事作業音、 釣り人の声。

フェリーターミナルは修理され、大きなフェリーが入港。 係留する船が増えていた。港内を作業の車が行き交う。貨 物用フェリーには車がどんどん積まれて行く。釣り人の車 が何台も止まっている。全体に動きが増えている。

「仙台 照徳寺]

- ・ 古くからあるお寺。銀杏の木は3百年の樹齢。
- 村の中心でもあり、バス停がある。
- 地元の人のお墓が多い。
- ・本堂は残ったので、早くから活動。
- この地区は海辺に近い農村。
- ちなみに近くにある水路は伊達政宗が作ったもの。
- ・廃村の危機? いつ人が戻るのか?



1) 2011年

音:スズメ、若干の作業音。

農村地帯なのだが、まだ農作業はできない。村中が全体に静かで、時折瓦礫を片付ける重機の音が響く。多くのスズメの声が妙にのどかに聞こえる。郵便配達あり。

2) 2012年

音:車の出入りの音。

昨年よりは人の気配がある。倒れていたお墓が直され、 新たに華が捧げられているのが多い。7月にはお寺の前に バス停が出来ているのを確認。住んでいる人も若干いるが、 残った家はそのままに放置されている。

[仙台 荒浜地区]

- ・仙台近郊の海辺の町。歴史もある町。
- ・すべてが流され、小学校も廃校状態。
- ・地元の人たちは、荒浜の町に愛着があり、帰って来たい。 荒浜の町の再生を望んでいる(至る所に黄色い旗。意見 看板が立っている)
- すぐそばの海岸は海水浴の場所として、施設も整っていた仙台随一の海水浴場だった。



1) 2011年

音: 風、瓦礫運搬のトラック、重機 まだ、壊れた家が残され、一部撤去されつつある。近くの 幹線道路は、瓦礫運搬のトラックが多い。住民は全くいな

2) 2012年

い。小学校は閉鎖されている。

音:風、車(乗用車)時折。

撤去は終わったので、見渡す限り荒れ野の状態。ところで頃に家の基礎が残る。人は全くいないが、時折,かって 住んだ人が訪れる。

[石巻市浜町]

- 一番被害が多かった住宅地の一つ。町全体が崩壊。
- ・いくつかの家は残っているが、放棄され取り壊しになる。
- 再び住む事ができるのか?新たな町として再現出来るのか?法的な問題を含めまだ未定の事が多い。
- 古くから町にある稲荷神社(ほこら跡)と松が残っていた。その場所で録音、記録。



1) 2011年

音:風、重機、トラック。

人はいない。周りはまだ壊れた家や瓦礫が多い。津波の 凄さを物語っており、スタッフ一同立ち尽くしている。風 が強い。瓦礫撤去の重機の音。時折横のでこぼこ道をトラ ックが通って行く。ぬかるみが多い。たまに、自分の家の 跡を訪れる人がいる。小さなほこらのそばで記録。松が奇 跡的に残っている。

2) 2012年

音:車(トラック、乗用車)、風。

かって泥道だったところが補修され、車がひっきりなし に走る幹線道路に復活。周りは、家の撤去がほぼ終わり。 人はいないが、時折見学の人たちが訪れる。風が強い。町 としてどうなるかは、まだ未定。ポッと残った家が、唯一 住宅地であった事の証明に。

[気仙沼地区]

- 気仙沼の今後を左右する地域。
- ・ 港があり、水産加工場が集まる経済の中心地。地区全体 が被災、火災にも見舞われる。
- 日本有数の漁港であり、魚市場や加工工場との連携によって、町の経済が成り立っている。働く人も多かった。
- ・この地区は全体が地盤沈下。1.5 m 以上のかさ上げが必要。
- 駅が流され、レールも無いので、鉄道の回復は遅い。



1) 2011年

音:重機、風、時折車(乗用車)。

一部瓦礫の撤去の作業音が聞こえる。町の中を走る道は 仮設のでこぼこ道。周りは沼地のようで、地図を見てもまったくわからない町に変わっている。線路も流されている のでどこにあったかわからない。駅は水没。入れない地域 が多い。焼けこげた大きなビルが、所々にたたずんでいる。 漁港は早くから復興、震災後初めての漁船が入って荷揚げ が。漁港部分だけが人の気配。

2) 2012年

音:車(乗用車)、風。

瓦礫の撤去は終わり、駅部分はようやく水がひいてホームが残る駅跡に入れる。道は多少かさ上げされ、整備された砂利道に。乗用車がひきりなしに走る。(地元の人,見学の人。)漁港、魚市場部分はかさ上げ工事が行なわれており、魚の荷揚げもあるので、ここだけは活気を感じる。

4 調査の課題

調査をしつつ、感じた今後の課題を書き出す。

- ・神戸での調査を踏まえ、長期に渡る調査の継続が望まれる。少なくとも、10年計画で行なう必要がある。
- 記録し続ける事で見えて来る事の考察。何を読み取るか?記録のアーカイブ化と分析が必要。
- ・音環境に関しては、変化の歴史を長期的に記録していく 前例は少ない。サウンドスケープ的調査の手法の研究も 求められる。
- この調査結果を「未来の街造り」にどう生かすか?
- ・ 定点の中でも、重点調査地域を決めて調査を行なう必要 があるか? 地域を絞ると調査しやすい面もある。
- もっと聞き取り調査を行う必要があるが、住民がいない 地域が多いので、少しづつ進めている。さらなる現地で の聞き取りは、仮設住宅などを訪れる必要がある。
- ・ 新たな人員と調査費用の確保。

5 調査から戻り

2011 年の調査のおりには、とにかく現地に入り、状況を 把握したいという思いであったが、物理的に入れない地域 が多く、もどかしい面もあった。又、村ごとなくなってい る場所もあり、どこにポイントを決め記録し始めるかが難 しい場所もあった。しかし、とにかく走り回る事で定点の 候補を選び、少し今後の調査の方向が見えて来た。神戸での調査と同じく、「どう現地に入って行けるか?」が今後の鍵を握っている。しかし、現地の惨状の凄さは、心身共に負担がかかり、調査後助手が寝込んでしまったのも事実である。

2012 年の春の調査では、多少地域に差が出始めているの が見えて来た。全く手が付けられていない場所。少しずつ 進んでいる場所。撤去は終わったが、方向が決まらずフリ ーズしてしまった所。いち早く手が付けられ回復して行く 状況が良くわかる場所。さらに、2012 年夏の調査では、こ れが如実になり、フリーズして方向が決まらない場所は、 とにかく人気が無く静かで、時が止まり、海風の音だけが 妙に印象に残っている。一方、気仙沼の港などは鰹の水揚 げで活気があり、「7、8月は休みなしや!」と言う市場 の人の言葉、にぎやかな作業音が印象に残る。動いている 場所、動かない場所。それらは、音に表れ、それぞれの時 間の差、空間の質量の差に現れて来る。7月の調査で特筆 すべきは、海の音(海と関係する音)が少しずつ戻って来 た事である。勿論、漁港は早くから戻って来たのであるが、 一般の人がどう「海」とつきあうか?が聞こえて来た。気 にしていた、「海水浴」の音が宮城県で1カ所だけ聞こえ た。調べてみると、積極的に「海」に親しむワークショッ プ(地引き網体験など)などが開かれている。一方、かっ て県一番と言われていた海水浴場は廃止が決まり、今は瓦 礫を運ぶトラックの音と砂埃が待っている。「今後、海と どう関って行くのか?」「海の音をどう聴くか?」これは、 今後の街つくりの中で大きなキーワードでもあるように思 える。個人的には、アートが自分の分野なので、調査、記 録して行く事をさらに深め、進めて行く事へのもどかしさ はある。専門分野の永幡、箕浦両氏と共に進めて行く事で, 見えて来る物があると信じてはいるが、出来うるなら若い 研究者がもっと加わってほしいとも思っている。短絡的、 直接的な物でもなく、長期に渡る調査から見えて来る何 か?それは、我々の日常、自分たちの環境と繋がっている。 我々自身への問いかけでもある。更に、調査しながら思考 して行きたいと思っている。

*編集担当より

このプロジェクトで収録した音の一部を著者より提供いただきましたので、下図のようにDVD中の「定点観測」フォルダに収録しました。

本文とともにお聴きください。



定点観測プロジェクトに参加して

Impressions after participating the project for soundscape observation in the tsunamistricken areas

●箕浦 一哉

Kazuya MINOURA 山梨県立大学

Yamanashi Prefectural University

キーワード: 定点観測、東日本大震災、宮城県

keywords: soundscape observation, The Great East Japan Earthquake, Miyagi Prefecture

2012 年 3 月と 7 月の 2 回,川崎義博さんが中心となっておこなう定点観測プロジェクトに参加させていただいた。川崎さんたちは 2011 年 7 月に初回の調査を行っており,私が参加したのはこのプロジェクトの 2 回目と 3 回目の調査であった。自身の都合でそれぞれ 2 日間ずつしか参加することができなかったので,きわめてささやかな経験でしかないが,私にとっては貴重な機会であった。

調査では、宮城県の沿岸部のうち象徴的と思われる場所を順次訪れて音環境の記録を行った。私は録音機とともに騒音計を持参し、録音をしながら騒音レベルの変動を記録した。私の参加した範囲でも、南は亘理町から北は気仙沼まで、150km におよぶ広い範囲が対象となり、移動のために多くの時間を要した。各地点で時間をかけて音の記録をし、さらに人々にも話を伺うことが理想であるが、短い調査日程の中では困難であった。被害の広範囲さをあらためて実感するとともに、震災後の音環境を観測し記録するというプロジェクトの困難さを感じた。

最も強い印象を受けたのは、やはり激甚な津波の被害を受けた地域である。被災した方々が発生時に経験したこととその後続いている困難を思うと言葉がない。仙台市若林区荒浜、名取市閖上、石巻市南浜町、南三陸町志津川などでは、瓦礫がほぼ撤去されて一面更地の風景が広がっていた。建物の基礎の一部などが辛うじて手がかりとして残されているばかりで、初めて訪れた者にとってはそこにあったはずの生活を具体的に想像することは難しかった。音風景としては、生活の音がない静けさと、遮る建物がないために遠くの音が聞こえることが印象に残った。

仙台市荒浜地区の深沼海水浴場は 2012 年夏も閉鎖されていた。7月の調査で訪れた時は夏休みの晴天の日中で、本来であれば海水浴客の賑わいが聞こえるはずだったが、人々の姿はなく、やや強い風のなかで波の音や鳥の声が聞こえ、静けさを感じるような音風景であった。浜には仮設の道路があり、ときどき大型トラックが砂煙を上げて走っていた。やや遠く、1、2km ほど離れたところから、重機による作業音が断続的に聞こえていた。津波と重ね合わせて聞かれているであろう波音、かつてあった賑わいの不在、復興のための土木・建設作業音や大型車の交通音、と象徴的な音が多い場所であった。

日本三景・松島の観光遊覧船乗り場には、観光客の賑わいが戻っていた。波の音、カモメの声、船のエンジン音、

拡声器からのアナウンスとともに、行き交う人々の足音や 声を聞くことができた。7 月にはエンジン音を響かせて水 上オートバイを楽しむ者の姿もあった。

いずれにしても、今回の調査結果について現時点で言えることは少ない。震災前のサウンドスケープを経験していないため、変化を検討することができないということが大きい。その代わり、今後調査を継続していくことができれば、何かを取り戻していく過程が記録されていくことになるだろう、と思っている。そのことを通じて、震災発生直後にその場所から欠落していたものは何なのか、その場所のサウンドスケープをどのような音が特徴づけているのか、ということがわかってくることを期待している。

もうひとつ感じたことは、ふだんは日常的すぎて顧みられないサウンドスケープのかけがえのなさである。失われてしまうと、そこにどのような音があったか、よく分からなくなってしまう。そのような音は地域らしさを形成する上では重要な要素だと考えられる。私たちが自分の地域の音にふだんから注意を向けていくことの大切さを思う。

似たようなことが阪神・淡路大震災後のある調査結果から示されている。地域風景の手がかりとなる建物や樹木などが失われたことや、地域生活の中での何げない経験の伝承がなされなかったことなどによって、復興の過程で地域らしさが失われる結果となり、住民には全体として風景喪失として意識されていたというり。ことさらに重要とは思われていない何気ない日常的な風景のなかに地域らしさが潜んでいるということは知っておくべきことだろう。

前回調査で訪れてから 8 ヶ月が経過しようとしている。 頻度は限られてしまうが、継続することで意味が出てくる プロジェクトなので、できるだけ長く関わっていきたいと 考えている。また、取り組む人が増えれば観測の頻度や地 点を増やして記録の厚みを増すことができるので、関心を 持って参加してくださる方があることを期待したい。

註

1) 鳴海邦碩,小浦久子:『失われた風景を求めて:災害 と復興、そして景観』(大阪大学出版会,大阪,2008) 【特集:震災プロジェクト】

サウンドスケープが社会に対してできること、すべきこと 日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト途中経過発表会第2部の記録より Discussion on What Soundscape Can/Should Do for Society in This Age

●永幡 幸司 Koji NAGAHATA 福島大学 Fukushima University

1 はじめに

2012 年 3 月 20 日に開催された日本サウンドスケープ協会震災プロジェクト途中経過発表会は2部形式の構成であった。第1部では、震災プロジェクトの概要説明の後、プロジェクトの一環として現地調査を行った音風景探訪企画(報告者:大谷英児(宮城野のスズムシ)、鳥越けい子(碁石海岸・雷岩)、佐藤宏(五浦海岸))、福島サウンドスケープ(報告者:永幡)、定点観測プロジェクト(報告者:川崎義博)について、それぞれの報告がなされた。

それらの報告を受けた第2部では、塩川博義による司会の下、「サウンドスケープが社会に対してできること、すべきこと」をテーマとしたディスカッションを行った。本稿では2時間にも及ぶこのディスカッションの記録の中から、サウンドスケープ及びサウンドスケープ協会が社会に対してできること、すべきことを考える際の手がかりとなりそうな部分を抜粋して紹介したい。

なお、抜粋にあたり、発言者を特定するよう心掛けたが、 録音状態の問題で、特定できなかった発言が少なくない。 本題に入る前に、まず、この点、お詫び申し上げたい。

2 ディスカッションの趣旨

ディスカッションの冒頭,司会を務めた塩川より,次のような内容の趣旨説明があった。

今般の震災のようなことが発生した際、サウンドスケープの調査・研究は、実際に現場へ出かけていくことが、第一歩である。その際、何をしなければいけないというものはない。サウンドスケープを研究する者として、まず、現地に行って見るということが必要なことであると思う。

現地に行き、調査をすることの大事さは、阪神淡路大震災の際に震災後の音環境の調査の経験をしている川崎や永幡らが強く感じており、それもあって、彼らが中心となって今回の震災プロジェクトが立ち上がり、サウンドスケープ協会として取り組んでいく活動がスタートした。第1部の川崎の話にあったように、阪神淡路の経験を踏まえると、今回も調査をやらなくてはならないし、長期的に考えて調査を進めていかなくてはならない。そして、何をどのようにしなければならないのかということは、現地に赴き、調査をしながら考えてやっているところである。今回の報告会は、そのような中での経過報告という位置づけである。

第2部のディスカッションでは、参加者の皆さんといろいろと話し合う中で、個人として、さらには、サウンドスケープ協会として今般の震災に対して取り組んでいくにあたり、どういう方向に行くべきなのかということに、1つのキーワードみたいなものが見つかればよいと考えている。

3 鳥をめぐって

まずは、川崎による定点観測プロジェクトの報告にあった「照徳寺では被災後スズメがいなくなったが、1週間くらいすると戻って来た。しかし、海岸の松林に住む鳥達は戻って来ていない。もっと山の方に移動してしまった。」という話題に対する、参加者からの「被災地での生物学的な調査はどのようになっているのか」という質問がきっかけとなり、鳥をめぐる意見交換がなされた。

川崎:自然に関わる音として、セミや昆虫の鳴き声や波音など色々あるが、その中でも、鳥の鳴き声というのは、アマチュアの録音家がいることもあり、数多くのデータがある。震災前の録音もあるので、昔と現状を比較することもできる。さらに、毎年、鳴き声の調査をしている人の情報は、信頼できる。

大庭:でも、鳥を録っている人があまりいなくなった。私が学生の時も、「なんでそんな音を録るの」というのが当たり前で、「私は音を聞かないから、調査する人のことが分からない」という人が大半だった。

鳥類研究者に対する期待が非常に大きすぎて、何ともそれに応えられない。この頃の人は、録音するとなると消極的にやっている。次の世代までには、この状況を何とかして欲しい。録音したものがあれば、ある手法を用いて音源分析することによって音環境、その地域の生態系の音の情報が出せるので。

ただ、昔、DATで録音したものがあっても、機材が使えなくなってきていて、聞くことができないという問題が起きている。これは、実にもったいない。いろんなところで、DAT録音の音が出てきて、「博物館でなんとかしてくれ」と来るが、道具が壊れている。

鳥越:最近,鳥類学者の樋口広芳さんの東京大学での最終 講義があった。

鳥の種類にもよるが、人間との関係で生きている鳥と、その関係度が低いのとがいる。カラスなんかはすごく上で、人間の中で生きている。樋口さんによれば、今回の震災では人がいなくなり、物が無くなったために、人との関わりの中で生きている鳥もいなくなったという。

鳥類研究の人が、鳥の文化みたいな、社会みたいなイメージで研究していると、すごくいい研究チャンスになるかもしれない。大庭さんが言うように、鳥もサウンドスケープ的に捉えた方がいい。つまり、最初に永幡さんが言ったように、サウンドスケープには繋いでゆくタイプの思考がある。普通は、鳥と社会との繋がりといったものは見えにくい。だから、サウンドスケープ的に音を録っているからこそ気付く色々なこともある。

震災後の音風景、鳥にはどう聞こえているのか。人間の

音がしなくなって寂しい、いや不便だと思っているのかな。

大庭:カラスの場合,繁殖期は集まってねぐらを取る。地震の直後はどうだったかというと,鳥も揺さぶられてビックリした。人間のように安全なところにねぐらを取る。人間と同じで,安全に仲間と一緒に眠れる条件の場所がないと,簡単には,ねぐらなんか出来ない。

秋になると「ああツバメがきたかぁ,もうそろそろ冬だぁ」と感じるのだが、今年は全然つばめが来ていない。11月の初め頃、私の家の近くには毎年11羽いたのが、今年は少ない。色んなことを言う人がいて、山に食べ物があると、平地には下りてこないとか。

男性:鳥の数が減ったということがネットニュースで一時 話題になっているが。

女性: 今年はそうだ。

大谷:長期的にみると、放射能によりどういう影響がでるだろうか。土壌や水の放射能は結構高いものが出てる。その辺にある落ち葉にある放射能も高い。

大庭:千葉でも、私の知り合いの人が言うには、自分たちで耕作しているが、何グラム 200 ベクレルと言われて食べることが出来ない。身近な鳥にその影響が出てきている。

塩川: 例えば鳥に関してだが、これまで出てきたのは、鳥の声が聞こえるか、聞こえないかという調査だ。あとは、鳥の声も変わってきたりとか、そういうような話である。

文化というか音に対する研究というものに結びついて、 人間の音に対する感覚、聞き方という風に結びついていく ような調査をする方は少ないのか。

大庭: 生態学とかの人には違和感がある。その地域にどんな鳥がいるかとかいうことは、正確に調べたいが、地域の人がどのように、あるいは、地域としてどのように受けとめ、それを将来に伝えたいのかという思いなどについては、生態学の調査とはちょっとずれていて、少し違っている。だから、そういうことを繋ぐようなことを私はしたいと思っている。

市民の感覚では、こういう鳥の声が聞こえて、そういう 声を残すために生態系があるべきだ。その生態系を守って いくためには、専門家の調査がすごく重要で、そういうこ とを繋げる橋渡しを、日本サウンドスケープ協会や博物館 など、そういうところが担っていくと。

4 ある場所にとって大事な音をめぐって

鳥をめぐる対話は、ある場所・地域にとって大事な音と はどのような音かという話へと発展していった。

塩川:例えば、自然の音、波の音とか風の音とか、に対して人間は興味を持ち、「この音面白い」とか「この音はこの町の特徴である」とかそういう興味を持ち、それで観光の目玉として、そういうのを取り上げている。

音は自然に色々鳴っている。我々の普段の生活の中に音はいっぱいある。自然の音もあるし、人工の音もいっぱいある。当たり前の音を取り上げるかどうかというのは、その音に人間が興味を持つかどうかという問題だ。

今回,まず震災で調査しようとしたのが,音の百選に取り上げられている音,あるいは地域での観光の音。そういうものを選んで,取っ掛かりとして調査開始している。

人間が,これは観光の目玉になるとクローズアップした 音の調査をしていくのも,それは人間との関わりの中で生 まれてきているのではないか。この関係をもっと追究する ことは非常に大切なことだと思う。これまでそれをやって ないわけで、鳥の声は鳥の声で研究している。

研究ではないが、商業的にうまくいくのかというと、地域の活性化になっている街づくりで、人を呼べるとか、お金がここに落ちるとか、それがいいか悪いかは別問題として、ある程度そういう風に取り上げられて、文化が生まれてくれば、自然に、音にもっと目が向けられるようになる。ある程度、協会として私たちがそういうことを考えることも必要なのでは。

そういう風に、そこをある程度見つめてみて、文化的な背景、なぜある音が興味をもたれるのか、文化的背景とかプロセスとかを見る必要がある。それは変わってくるかもしれないし、震災みたいなことがあると、ぱっと途絶えてしまったりとか、生き残ったりとかもする。新しい音が生まれて、それがどうなっていくかということもある。

我々の日常の中でも、なんらかの拍子に、興味をもたれるようになり得る音はいっぱいある。

永幡:大事なものは、無くしてみて、はじめてそれに気が付くということがある。阪神大震災の際、まちの人たちへのインタビューで、神戸の港らしい音とはどんな音かと尋ねたことがある。その時、ある港湾労働者の方から「震災前だったら汽笛とか答えただろうけれども、いざこうなってみると、クレーンやフォークリフトの音かな。今までずっと聞いていたから当たり前すぎて、いざその音が無くなってみると自分の知っている港ではないと感じる」といった返答があった。

また、今般の震災に関してはこんな話もある。NHKのラジオ番組から、震災プロジェクトで取材を受けたが、その際、NHKの人が独自に裏とりの取材もしていた。その取材の中で、まちの人に「福島の音がどう変わりましたか」と聞くと、「子供の声が聞こえなくなった」と返ってきていた。子供の声は、いつでも聞こえてくる音だったから、そんな音をわざわざ震災前に録音する人はあまりいない。私自身も震災前、いくつかの公園には、日常的に行っていたが、そこで録音した音は持っていない。そして、このたびの原発事故で、放射能を怖れて子供たちは公園で遊ばなくなってしまった。本当にいつ行っても、いままで自分がそれまで聞いていた音とは全然違った音になってしまっている。そこで改めて、本当に大事な音というのは、いつも身の回りにあった音だと気づく。

大庭: 震災の前も、震災後も、市民に録音機を渡すと、皆本当に普通の音を一生懸命録っている。子供が歩いて、缶けりしている音とか。帰って地図の上に落としてみて、このような音がなんかあったら、無くなるんだと。

音を録っていくことは、すごく大事なことだと思う。また録音するということで、震災前に録ったのと同じ音が録れてたら、その復興というか、復興に至る道の上にのっていると言えるのかもしれない。震災プロジェクトでは、そういうことが出来たら、良いのかな。

缶けりの音、足音なんか録ってどうなるのとさんざん博物館で言われ続けてきた。で、思うのだが、そういうようなことがすごく大事なことだと。

男性:名所だと言われたものが、名所だと思われ続けるのだろうか。

鳥越:名所に濃縮された,色んな物が確かにある。雷岩も, もとは音が鳴っていても誰も気づかなかったかもしれない。 それが人間社会に徐々に組み込まれることによって発見され、意味づけられて地域のシンボルや観光資源になっていく。そのなかで記録も記憶もされていく。だからこそ、震災等でその音が急に消えたとき、その変化に気づく。それが消えた後も、その音が語られる。それが、人間の文化のシステムだっていうことが、良くわかりますよね。

男性: 雷岩に関しては、見た目は何も変わらないのに、それほど音だけが違う。

5 音の聞き方をめぐって

ディスカッションのなかでは、音自体の変化のみならず、 人の音の聞き方の変化についてのやりとりもあった。

男性:文化が無くなっていく。実際の生活には関わりのない、自然との関わり、繋がりが切れていく。生活の中から、本当に海岸の音が無くなっていく。今般の震災でびっくりしたのは、「津波が引いたときに海に入った人がいた」と聞いた。普通、海の傍に住んでいたら、ありえない。

男性:ここまでは来ないだろうと思って。そういう人はすごく多い。

鳥越: 私たちが探訪した豊間海岸では、すごく立派な海水浴の監視台が見事に廃墟になっていた。とても綺麗な海だったけれど、その状況をみると恐ろしくも感じた。

自分が被災したわけではないが、メディアで報道された 様子を思い出しても怖い。私ですらそう思うのだから、あ の津波を体験した人達は、以前と同じ景色を見て、同じ情 景を聞いていても、今は何を思うのだろうか。

塩川: 震災後の環境の変化に関する話が続いたが、サウンドスケープというのは、人と環境との間のこと。人側の聞き方に関しては、どうか。

鳥越: 先ほど言ったように、同じ波の音を聞いていても、 ただ綺麗な海があるからといって来た人と、津波が来たと きにそこにいた人とでは、受け取るものが違う。

塩川: 震災が起き、ニュースを見て、例えば、自分の生活の中で変わったもの、例えば、聞こえ方がなんかに対してすごく慎重になったとか、あるかもしれない。また、社会の耳が、社会の聞いている音がどういう風に変わってきているのか。それは、長期的なものかもしれないし、短期的なものかもしれない。

自分で生活してて,震災前と震災後に対して,何か変化 を感じた方はいるか。

大越:宮城県出身で、約20年年間、石巻専修大学にいて、 津波が来る半年前に千葉に移ったが、今も客員を兼ねている。海洋生物学が専門で、自然現象を押さえなくてはならないので、そういう仕事を震災の後も続けている。

地震の前と後では感覚的に大きく変わった。私は海が大好きだが、海に行くのは怖くなった。学生を連れて行くのも非常に危ないし、津波がいつ来るかもわからないこともあって、私がフィールドにしている場所に、震災後最初に行ったのが4月の6日ぐらい。その2日ぐらい前にご遺体が2体上がっている。砂浜に行ったら瓦礫を触って、瓦礫を動かすのが怖くて…。それから後、砂を1m程掘って、そこにどんな生物がいるのか調べるのを3ケ所。入れ歯があって、最初入れ歯だあと思って安心したら、その後何秒かしてからみんな背筋がゾオーッとして、「先生、ここ掘るのはもうやめましょう」って言って。

子供の頃からよく行っているところであっても, 今は, 調査以外で行く気になれない。まだ見つかっていない人が, 沢山いるので。

6 自然の変化/人の変化のタイムスパン

自然の変化の中には、長い時間をかけて変わっていくものもある。それは人の生きる長さと比べて、非常に長いものだ。

大越: サイエンスとしては、さっきの雷岩なんかも、多分地盤沈下したことによって、波の入り方、空気の入り方によって圧縮したことによって、音が出なくなったと考えられる。おそらく数十年ぐらいかかると思うが、だんだん元に戻ってくる可能性がある。

碁石海岸は、かなり内側が浸食されている。地盤が大体7~80cm下がっている。1年位の間に、まだ-80cmのままで、満潮になると、もともと駐車場だったり、岸壁だったりしたところまで水がどんどん上がってくる。

地盤がだんだん下がっていく。その間に恐らく、少しづつは変わってくるはずで、長い年月、ずっと記録していけば、その音の変化もあるだろう。

男性: 人間が相手だと 10 年とかそういう単位で物事は移り変わっていくが、自然相手だと、もっと長いスパンでみる必要がある。

大越: 自然は全くは同じにはならないが、今のところ絶滅 した海洋生物というのは知られていない。意外に自然は大 丈夫なところがある。

今,私は千葉にいて,茨木県とか千葉県の貝塚やその周辺を調査している。それは何かと言うと、例えば縄文人の貝塚というのは、貝が食べられた跡だが、津波に襲われて貝が死んだような地層があるかと、20万年前から現在までの間、調べているのだが、なかなか見つからない。1ケ所それらしい場所があったが、3,500年の間に7回くらい大きな津波が来ており、長いサイクルで変わってきている。

男性: 先ほど川崎さん, 阪神淡路の話をしていましたが…。

川崎: 震災後すぐに再開した市場は、仮設の小さな店の集まりだった。物もそれほど豊富ではなかったが、多くの人々が集まり、にぎわいが生まれた。お互いに生きている実感を確認したり、震災時の話をしたり。この市場のにぎわいは、復興の象徴的な音であった。

ところが 10 年経って行ってみると、他の地域から移り住んできた人たちは、どちらかというとスーパーに買い物に行っているという状況になっている。そこに長く住んでいた、お年寄りとか、本当に市場にコミュニケーションをすごく楽しみにしてきていた人達が地域からいなくなってきている。住んでいる人の生活は 15 年くらい経つと、本当に長期になると、変化する。

女性:それについてどう思う?

川崎:結局、それは震災後の都市計画、区画整理などの問題が大きい。住民の意思とは別に新たな区画が生まれ、旧来の町は無くなって行く。例えば、長田の象徴的であった靴の工場のミシンの音。これも工場が震災後、区画整理で無くなり、象徴的な音は消えたということがある。また、町の路地での年寄達のおしゃべりの声なども消えた。まちづくりをもう一回見直さなければならない。

女性: 今の神戸の例は、復旧を思うけれど、コミュニケー

ションを考えないで、新たな計画を立ててしまっている。 コミュニケーションを考えながら計画したら、違ったかも しれない。

7 原発災害の問題をめぐって

東日本大震災が、これまでに日本で起こった震災と大き く異なる点は、福島第一原子力発電所の事故という、自然 災害とは異なる大災害まで引き起こしたことにある。

永幡:福島にいて思うのは、音というものは、人間の生活 から出るものなんだということだ。例えば、子供たちが、 外で遊んでいないから、その声が聞こえてこない。

そういう状況で何を考えるかと言うと、結局、音が普通 に聞こえているという状態, 日常の生活に戻ったサウンド スケープの状況が、普通に良い状況なのだろうと。ここで、 WHOの健康の定義というのをもう一度思い出してみると、 健康というのは、病気じゃないことではなくて、肉体的に も精神的にも社会的にも心理的にも、よい状況である、と いうのが健康の定義であるが、そのように見ると、福島の 今の生活は、良い生活が送れてはいない。

肉体的には病気じゃないと思うんで、病気ではないとい う意味で「健康」という言葉を使うのであれば、確かに放 射能問題で、健康に被害はなかったかもしれない。でも、 皆が自分たちにとっての良い生活が出来ていない。すなわ ち、健康ではない。健康な生活ができないところに、福島 の人たちは、未だに住み続けている。

それをすごく象徴的に表しているのが音だと思う。私自 身『福島サウンドスケープ』というホームページを作る際 にこだわっていることは、今の状況がいかに日常ではない のかを伝えることにある。もちろん、ある部分では日常に 戻っていて、例えば、ようやく、子供達が外で遊び始めた 公園などもあるが、そういう場所はまだ少ない。音を通す ことで、このような意味で健康被害があるところに人が皆 住み続けるということが、本当に良いのだろうかというこ とを問いかけることが出来ると考えている。

福島で福島の音を聞きながら、そのような形で、世の中 に対して発信することは出来るだろうと思ったことが、昨 年(2011年)の5月からホームページを作り始めた本当の動 機だ。

健康被害がないと見えても、実はすでに健康被害が出て るんだと言いたくて作り始めてはいたが、ある程度、それ が言えるデータを集めないことには、言い難いだろうなと 思ったので、最初の頃はそういうことをはっきりとは言わ なかった。しかし、今、大体1年ぐらい経って、これだけ データが揃えば言ってもよいだろうと思い, 最近ようやく こういうことをはっきりと言い始めた。

鳥越:では、その先にあることは、いわゆる健康被害がな くっても、健康に影響があるから移るべきということか。

永幡:まず、移りたいと思った人には、もっと支援をすべ きだ。さらに、本当に健康な生活とはどのような生活なの かということを皆で考え直すべきだと思う。なぜなら,今 回のように、いつどこで何が起こるか分からない訳だから、 同じようなことが他の所でも起こるかも知れないのだ。そ う考えた時, 自分にとって健康な生活とは, いったいどん な生活なのだろうか、そこではどんな音が聞こえているん だろうかと考えること、それを皆が自分の問題として考え ることがとっても大事だと思う。

鳥越:ああ、やっぱり。

永幡:放射能問題は、私たち福島に住むものにとってはリ アルな問題だ。本当に目の前で進行している。私自身, 最 近,線量計が安くなったので,買って鞄に持ち歩いている。 本当にリアルな問題だ。それが福島を1歩離れれば、リア ルな問題ではない。

騒音問題も本当にひどい地域の人にはリアルな問題だけ れども、私を含む多くの人にとって、リアルな問題ではな く、「騒音問題ってあるよね」っていう他人事になってい る。他人事の問題に対しては、世の中、なかなか動かない。 自分にも関係ある問題だと何となくわかったきに初めて, その問題に対して、皆勢いよく動く。公害問題の中でも、 大気汚染は、皆が立ち上がりやすかった。あれは、どんど んどんどん広まってゆくから、皆の問題に成りやすい。局 所的な問題ではなく,より広範囲にわたるから,より自分 の問題だとリアルに感じやすい。やはりあのような問題と いうのは、皆、より神経質になるし、リアルな問題なのだ。 そうやって考えると,放射性物質って意外とリアルでは ない。音も同じで、多くの人にとってあまりリアルな問題 ではないわけ。そこで私たちが出来ること、サウンドスケ ープが出来ることというのは、音の問題はすごく身近な問 題で、最後に自分自身に帰ってくる問題なのだということ を皆に気づいてもらうことではないか。

8 おわりに

締め括りに、塩川によるまとめの発言を引いておこう。

塩川:震災プロジェクト、さらにはちょっと大きな話をす ると、音の問題自体には2つの方向性があるのだと思った。 1つは、例えば地域とか生物とかいろいろ震災によって起 こった変化を、音という切り口で見せてやって、聞こえる ようにしてやるっていう方向性である。もう1つは、音と いうものの価値が、今まで気付かなかったことが、今回、 震災によって見えてきたんだということを見ていこうとい うものだ。この2つの方向性があるのだと思った。

それらは実は裏表になっていて、少なくともリンクして いて、そのあたり念入りに意識しながら、何より私たちは 音というものを使って、音とは結局ある側面しかないもの だから, 道具というか, 音という切り口で何を見ようとし ているのか、その辺をよく意識することが大事だという感 じを受けた。

本稿の最後に、途中経過報告会に参加してくださった全 ての方々に心からの謝意を表する。また、本稿をまとめる にあたり, 文字おこしにご協力いただいた今井信さんに謝 意を表する。

レポート:シンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」

Report: Symposium "Individualized Society and Soundscape"

●大門信也

Shin'ya DAIMON 関西大学 社会学部 KANSAI University, Faculty of Sociology

キーワード:個人化、音楽化社会、iPod

keywords: Individualization, Musicalized Society, iPod

1 本特集について

2012年5月19日(土)、サウンドスケープ協会シンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」が開催された。実行委員長として小川博司会員、委員として大門信也会員と箕浦一哉会員が企画運営を行った。本号では「小特集」の形で、このシンポジウムのレポートと、2人の事例報告者の当日報告資料、および当日の討論をふまえた今後のための論点提起を収録する。

まず本稿では、シンポジウムの趣旨と、3人の講演内容およびパネルディスカッションでの討論の内容をレポートする。

シンポジウム当日は、まず小川会員により「音楽化社会の変容とサウンドスケープ」と題する基調報告が行われた。 続いて小川会員の司会により、事例報告が行われた。まず ゲストの南田勝也氏が「個人化社会による環境コントロー ルツールとしてのiPod」を報告し、続けて辻本香子会員が 「持ち歩かれる歌と流れる音楽—香港の若者たちの事例 から」を報告した。第2部のパネルディスカッションでは、 ゲストの細川周平氏と箕浦会員を指定討論者としてむかえ、 引き続き小川会員の司会によりフロアを交えた議論を行っ

以下、煩雑を避けるため登壇者は敬称を略して表記する。

2 シンポジウムの趣旨

2.1 なぜ個人化を問うのか

今日、聴覚メディアの技術的進展と普及により、個人に よる聴覚環境のコントロールの範囲が大きく広がっている。 本シンポジウムではこれを「聴取の個人化」と捉え、その 実態を理解することと、サウンドスケープ論がそうした状 況とどのように切り結ぶことができるかについて議論する ことを目的とした。

音楽配信、デジタルオーディオプレーヤー、ノイズキャンセリングヘッドホンなど、新たな聴覚メディアが近年爆発的に普及している。こうした技術によって人びとは、聴きたい/聴くべき音(のデータ)を個々人の都合に応じて入手し、並べ、再生するといった操作を繰り返しながら、状況に応じて自らの「気分」をも個々人でコントロールす

ることができるようになった。人びとの聴取体験は、20世紀末よりもさらに断片化、機能分化され、より個別的で操作的な行為に変容しているのではないかと考えられる。

もしこうした事態の進展を、社会学でいう「個人化」概念になぞらえて、「聴取の個人化」と呼ぶことができるとすれば、そうした状況に対してサウンドスケープ論は何を語りうるだろうか。

2.2 なぜ音楽メディアを扱うのか

シンポジウムでは、とくに音楽をめぐる状況に着目し、 とりわけ iPod に象徴される携帯音楽デバイスを事例として 扱った。このような企画を立てた背景には、現代音楽を出 自とするサウンドスケープ概念と、現代の「音楽」との関 係をいまいちど問い直したいという企画者側の意図もあっ

かえりみれば、『波の記譜法』が著され『世界の調律』が翻訳された 1980 年代中ごろは、ミニマルミュージックやアンビエントミュージックなど現代アートとポピュラーカルチャーとの境界領域が活発化しており、サウンドスケープ概念もそのような中で受容された側面がある。また後述の小川の基調報告にもあるように、日本サウンドスケープ協会と日本ポピュラー音楽学会は「日常生活と音楽研究会」という出自を共有している。実際に小川は従来よりポピュラー音楽研究の文脈でサウンドスケープ概念を使用してきた。

こうした歴史をふまえ、あらためてサウンドスケープ研究と音楽研究との接点を探ることも、本シンポジウムの潜在的なテーマであった。

3 第一部:講演

3.1 音楽化社会の変容とサウンドスケープ

小川からは、シンポジウムの全体の基調をなす問題提起が行われた。具体的には、まず音楽体験の個人化の現状について概観し、次にそれに重なるようにして展開してきたポピュラー音楽研究とサウンドスケープ研究の展開過程についてふれ、最後にいまサウンドスケープ研究にどのような課題が課せられているか、という問いを提起した。

3.1.1 「街鳴り」: BGM から FGM へ

1980年代以降、数多くの選択肢の中から音を選び出して聴く「選択的聴取」の体験が増大しており、またそれと同時に、マスメディアや街中で大量の音楽にさらされる「被音楽状況」が進展している。小川はこうした事態を「音楽化社会」と呼んできた。

とりわけ「被音楽化状況」については、近年「街鳴り」という興味深い現象が生じている。20世紀を通じて発展してきた BGM とは異なり、現在では売りたい曲を全面に押しだす「フォアグラウンドミュージック」が出現している。これらは、コンビニやショッピングモールなど、街のいたるところで特定の楽曲を流すことでその楽曲の購買を促進する手法である。小川によれば、それは共同性の喚起などではなく、消費者としての「個人」に対するプロモーションとして行われている。またそれは、音楽を売るためには街で流すしかないというレコード業界の苦肉の策でもあるという。

3.1.2 共通の原点としての「日常性」

こうした「音楽化社会」の中で、日本のポピュラー音楽研究とサウンドスケープ研究は共に進展してきた。そして双方の原点には、1983 年前後に発足した「日常生活と音楽研究会」がある。これは音楽学や社会学などで現在活躍しているそうそうたるメンバーが参加した刺激的な研究会であった。この研究会での活動が、一方では1989 年の日本ポピュラー音楽学会の結成につながり、他方では1993 年の日本サウンドスケープ協会へとつながったのである。『波の記譜法』の執筆や『世界の調律』の翻訳は、そうした研究活動の発展(と分化)のさなかに行われた取り組みであった。こうして1980 年代から1990 年代にかけてのポピュラー音楽研究とサウンドスケープ研究は、ある種の「車の両輪」として「元気にまわっていた」と小川は指摘する。

3.1.3 「サウンドスケープ」は思想か分析概念か

最後に小川は、「思想としてのサウンドスケープ」と「分析概念としてのサウンドスケープ」という2つの側面を提示し、前者は「聴覚体験の連続性」「共同性」「社会的文化的重要性」「施策提言」「デザイン実践」といったことを関心の中心としてきたのに対して、後者は「ポピュラー音楽体験」「音楽体験の「図」と「地」」「ポピュラー音楽の中のノイズ」「広告音楽の体験」を関心の中心としてきたと整理した。この分類に即せば、小川はおもに後者に着目してきたが、多くのサウンドスケープ研究は、前者の側面を重視してきたといえる。

確かに現在の選択的聴取や被音楽化状況を見すえたとき、サウンドスケープ論の思想的側面を押しだすだけでは、現状を分析的に捉えられなくなる可能性が否めない。思想に含まれる価値判断をいったん括弧に入れ、(事実を淡々と見つめる)「分析概念としてのサウンドスケープ」の可能性を示唆する形で、小川の報告は締めくくられた。

3.2 個人化社会における環境コントロールツー ルとしての iPod

南田は、音楽社会学を専門としており、『ロックミュー

ジックの社会学』(青弓社、2001)を上梓した後、近年は野外ロックフェスのフィールドワークや、音楽メディアデバイスの利用と音楽体験についての実証的研究に取り組んでいる。本報告で南田は、まず社会学における「個人化」概念をドイツの社会学者 U. ベック等に依拠しながら紹介した上で、それを音楽体験の変容と結びつけ、現在の「聴取の個人化」の様相を分析した。

3.2.1 個人化とは

南田はまず「個人化」を、従来の「個人主義」「個性化」「私化」といった言葉と異なり、技術の発達や社会構造の変化によって「個人が膨大な選択肢にさらされる状態」を指していると説明する。20世紀の後半より、人びとは以前にも増して職業や人間関係や人生の歩み方等を、あらゆる規範に縛られることなく自由に選択できるようになってきた。その中で、「個人」は社会の規範から「脱埋め込み化」されることとなり、社会的なコミットメントもネットワークも「主体的に選び取る」ような存在に変わってきている。それは個人が、常に自分自身の演技者であり演出家たることを強いられるようになったことも意味する。

3.2.2 音楽聴取の形態

そもそも近代以前において聴覚体験は、共同的な形態をとっていたと考えられる。祭りにおける音楽のあり方や教会の鐘の音などは共同性の中で聴取が行われていたことを表わしている。あるいは近代化の過程にあっても、学校の校内放送、ラジオなど「公共」という形をとって共同的な聴取形態を生じさせてきたといえる。一方、家庭においても、かつてはステレオが応接間に鎮座しており、年末には紅白歌合戦を家族みんなで視聴するなど、共同的な聴取のあり方が見られた。

しかし南田によれば、これらは 20 世紀後半から 21 世紀 にかけて 2 つの段階を経て崩れていくという。

第1段階は、1970年代から80年代である。これは学生運動の時代が過ぎ、しらけの世代が登場した時期でもある。その当時、人びとが社会への関心を失う「私化」が問題とされた。子どもには個室が用意され、車が普及する時代に、音楽の領域での象徴的デバイスとして登場したのが「ウォークマン」だ。周囲のことを「我関せず」と街を闊歩する若者を捉えて、「閉塞的な現代青年像」がクローズアップされた。例えていえば、ウォークマンは、面倒な外界の出来事をシャットアウトする「繭」の役割を果たしていたといえる。

ただし、一本ないし数本のカセットを持ち歩くというスタイルは、選択的聴取に量的な制約を与えていた。

ここに第2段階目(1990年代~2000年代)のプロセスが 生じる。「ベスト4万曲を持ち歩こう」というキャッチフ レーズで注目されるようになった iPod がその象徴的デバイ スである。これは個人による選択の幅を広げると同時に、 そのつどそのつどの自分自身に対するコントロールを強い る技術ともいえる。その中で個人は、強い能動性を要求されることになる。

3.2.3 サウンドスケープの個人的選択

iPod は、デジタル技術による操作性の拡大によって、使

用者の身の回りの風景をより劇的に変える効果を持つ。南田はこれを、「私」に閉じこもる「繭」のような存在から、「蛾」のような存在への変化として説明した。蛾は、外界から身を守る繭を突き破り、鱗粉を散らしながら外界へと飛び立つ。つまりiPodは、単に外界から閉じこもる「繭」にとどまらず、むしろ外界に働きかける(かのような効果を持つ)存在なのだ。

その様子を南田は、自らのインタビューデータをもとに 説明した。調査によればiPod ユーザーたちは、桜のきれい な公園で桜を題材にした曲をセレクトして聴く、お別れコ ンパの後で気分に合うセットリストをつくって気分に浸る、 旅の車窓で田舎の風景を楽しむ、海外旅行で普段は聴かな い洋楽を用意して異国情緒を楽しむ、といった形で、各々 好きなように人生の「シーンメイキング」を行っていた (詳細は本号収録の南田資料を参照されたい)。iPod は、 このように、操作者の気分に応じて外界を粉飾する装置と して機能しているのである。

3.2.4 エゴキャスティングの果てに

最後に南田は、こうした個人化の果てにある「共同化」 についていくつかの仮説的見解を示して議論を締めくくった。

クリスティン・ローゼンは、情報を広く放つ「ブロードキャスティング」から「ナローキャスティング」へ、さらには自分向け放送としての「エゴキャスティング egocasting」の世界に至ったことを指摘している。ポッドキャストなどがその好例といえる。それは個人の嗜好や自分の選択肢しか受け付けない不寛容さにもつながるとローゼンは述べている。他方で、自己決定を強いられる状況は、個人にプレッシャーを与えることになる。そこから「誰かに決めてほしい」という欲求、自分が属する共同体への欲望が喚起されると考えられる。そこに共同性への希求も生まれるだろう。

南田はこのように指摘した上で、インターネットを通じた、ドミューン(Dommune)や、ネットレーベルなどは、そうした共同体形成の希求の欲望を表している可能性があるとする。いずれも、リスナーがその場にコメントを残していくシステムが採用されている。つまり他者と一緒に消費する仕組みになっているのである。南田はここに、強い結びつきや一部の「仕掛け人」の存在を前提としたコミュニティをとは異なる、「コミュニケーションがコミュニケーションを生む」といった不定形な共同体の姿を見出している。

一方で、こうしたネット配信で扱われるの音楽が、「テクノ」など一部のジャンルに偏っている点も見逃せない。 それはまちの中で偶然に新たな音と出会うような経験とは 異なり、あらかじめ自分のデータベースにマッチした音 (や他者)を選択しているにすぎないようにも見える。南田はそこに閉鎖的な共同性の萌芽も見て取っている。

3.3 持ち歩かれる歌と流れる音楽——香港の若 者たちの事例から

辻本は、伝統芸能とそれを取り巻いている音のあり様について、香港での長期にわたる竜舞(Dragon Dance)とそ

の担い手たちについてフィールドワークを行ってきた。と りわけ伝統芸能の担い手たちが聴いている芸能の音とそれ を取り巻く音が織りなす聴覚世界について研究を進めてい る。今回の報告では、芸能の若い担い手たちが自分のため に構築している音環境はどのようなものか、という問い立 てつつ、とくに携帯電話で音楽ファイルに着目して報告を 行った。

3.3.1 鳴り響くパーソナルサウンド

民族誌研究においては、文化の担い手への直接的な接触と、その文化を表す素材の収集が重要になる。辻本は現代化する伝統芸能の姿を捉えるために、競技竜舞に打ち込む若者のグループとともに行動し、彼(女)らがどんな音を聴いているかについて参与観察を行った。共に過ごす時間が長くなり親しくなるにつれて、竜舞グループのメンバーたちは、自らの携帯に入っている音楽を辻本に紹介してくれるようになったという。

興味深いことに、香港では電車内で着信メロディーが鳴ったり、電話で会話をしたりするのは普通の風景である。 竜舞グループの集まりのなかでも、メンバー一人ひとりが 携帯のスピーカーで音楽を流して聴いていた。つまり屋外 ではとくにイヤホンやヘッドホンで聴くことの多い日本と 異なり、香港では音を共有する機会が多いといえる。

こうした状況に身をおいた辻本は、「不思議な感覚」に とらわれたという。というのも、香港の10代若者の携帯から10年前のJポップ、または見たこともないはずの日本の 深夜アニメの音楽などが流れていたからである。

3.3.2 携帯のなかのポピュラー音楽

辻本のフィールドワークは、2009年から2011年、および2012年の長期にわたって行われた。対象は中国竜舞チームの10代の若者であり、1992年から1997年生まれで当時13歳から18歳であった。男子は7名、女子は5名で、いずれも携帯電話を扱っていた。辻本は、彼(女)らの携帯電話の画面を撮影していきデータベース化している。その分析結果を以下のように報告した。

音楽ファイルの総計は1460件であり、曲を地域別にみると香港の曲が一番多く、日本が次に多い。韓国が3番手となっている。これをさらにアーティスト別に分類してみると、出身地が二つあるグループことに気づく。例えばあるアーティストは、中国出身で祖積は北京であるが活動は香港で行っている。国籍と歌に使用される言語が錯綜しているのである。また、パラリンピックを意識した曲、

"Everyone is No.1"などに見られるように、同じ曲でも北京 語と広東語など複数の言語で作られている曲も少なくない。

次に所有者ごとのファイルリストを見てみると、10代の男子の事例では、英語、日本語、中国語の曲がまざっていた。含まれるアーティストを見てみると AKB48、90年代に日本でも活動をしていた香港のロックバンド「ビョンド」などが入っている。また別の所有者のファイルリストを見ると、日本語の曲が多く、音声ファイルは、ほぼ「初音ミク」と日本のアニメの主題歌で埋まっている。

さらに曲単位で分析していくと、いくつかの興味深い曲が指摘される。例えば前述の"Everyone is No.1"は、「みんなでうたう歌」である。この歌は、滞在中、イベントごと

のあるときに参加者全員で歌われていた。このような「みんなでうたを歌う」という光景は、合宿先のご飯のときなど些細な場面も含めて多く見られた。

一方で、つくられた経緯が特徴的な曲もある。あるインフォーマントが持っていた「紡歌」という歌は、もとは中国風の曲に日本語の詞をのせたボーカロイド曲であった。その所有者の携帯に入っていた曲は、中国人のファンが中国語に訳してリメークしたバージョンなのだ。

これらの全体的な特徴を箇条書き的にまとめると、まず個人によって内容の偏りが大きいこと、アルバム単位ではない聴取が行われていること、そしてインターネットからのダウンロードが多いことが指摘できる。また中国語ポップスの地理や空間広がりも特徴的である。こうした背景には、香港が1997年に中華人民共和国に返還され、その後、返還以前に外国に移住していた人びとの子どもたちが帰国アーティストとして活躍するようになっているという事情がある。彼らは英語、中国語を使いこなせる。他方で日本の曲は、70年代から80年代にかけて香港のアーティストによる歌謡曲のカバーという形で受容されていたが、現在の若者はボーカロイド曲や、(見ていないであろう)アニメ関連の曲が受容されていることがわかる。また、Jポップ以上にKポップが浸透してきている様子も見て取ることができる。

3.3.3 音環境は個人へと切り離されているのだろうか

これらをふまえ、最後に辻本は、音環境はほんとうに個人へと切り離されているのだろうか、と指摘する。3.3.1 で述べたように、香港では携帯の音がスピーカーによって音空間に鳴り響くことが多い。またその音楽の中身は3.3.2 で述べたように文化的に多様である。さらに、そうして流された音楽を伴奏として「みんなで歌う」姿も観察された。このようにみると、南田が明らかにした「個人化」の姿は、必ずしも香港社会のなかでは当てはまらないものであり、音はいくつかの水準で共有される存在でもあった。

以上、小川の基調報告をふまえ、南田と辻本による事例報告を概観してきた。これらを踏まえて、次節ではパネルディスカッションの様子を見ていく。なおパネルディスカッションの司会も引き続いて小川が担当している。以下は、小川の進行や交通整理を下敷きにしつつ、適宜筆者が再構成した。

4 第二部:パネルディスカッション

4.1 細川コメント: それでも世間はつくられる

まず指定討論者の一人である細川は、1981年に『ウォークマンの修辞学』を上梓した頃のサウンドスケープに対する評価について語り、「有益な言葉であろうと直感」したが、同時に都市の音楽や生活について考えるときに、共同性や音による人のつながりについて素朴に信じている様子を物足りないと感じ、批判的に論じたと述べた。

一方で当時は現代思想などに強く魅せられていたが、その後日系ブラジル移民の研究を行うようになり、マルクス主義も何も無意味で、ただ人の行動を観察し、移民たちとともにカラオケにいって話しをすることを通じて、「人間

を描くことの方が理論を考えるよりも大事に思えてきた」 という。それは学問の名前でいくと民俗学に近い。

そのような立場から、細川は南田報告に対して、社会学が(相変わらず)独自の専門用語に依存している様子に疑問を呈した。また新しく変化するものばかりに着目する社会学に対して、辻本のような人類学、民俗学の立場は、表面上の姿は変わっても、実は人びとはいつも変わらずに「世間」を形成していることを重視していると整理した。

こうした整理をふまえて細川は南田に対して、2つの質問を出した。第一に、ウォークマンはリスニング、技術的制約によって限定され、iPod はその制約を取りはらったというが、これは技術決定論ではないのか。むしろ新しい技術が導入されても、人びとはそれを使いながら変わらずに「世間」形作っているのではないか、という疑問である。

第二に、コミュニケーションがコミュニケーションをつくるというのは、対面状況でもやっていることであり、ネット上でも基本的にそこに変わりはないのではないか、という疑問である。

4.2 箕浦コメント:環境の音と音楽との関係

して下記のようなコメントを行った。

もう一人の指定討論者である箕浦は、他の登壇者とは異なり環境分野を出自としている。地域の人びとが音環境をどのように認識しているのか、そこから地域の音環境の保全をどうするのかという立場から、「音楽」の議論と、「サウンドスケープ」論の議論をいかにつなげるかに着目

第一点目は、個人化とは逆の「つながり」に関するものである。例えば南田報告の最後には、共同体への回帰の話もあった。電子ネットワークの普及の中での音楽の楽しまれ方の変化もあった。若い人の音楽経験の中で、「個人化」とは逆の「シェア」や「つながり」が生まれている可能性をどのように考えればよいのだろうか。

重ねて箕浦は次のように指摘した。耳にイヤホンをいれて一人で聴いている絵は確かに孤立しているように見えるが、音楽を通じて外の何かとつながっていることを意味しているようにも見える。つまり、個人化に見えながら、個人化ではなくつながりが生まれていると捉えることもできるのではないか。

次に第二点目として箕浦は「環境」や「風景」という論点との関係について下記のように述べた。

確かに南田のデータは、環境をコントロールしているように見えて興味深い。再生装置の中にある音楽が、自分のいま置かれている状況やいま見ている環境、経験している世界に新しいものをつけくわえている。しかし、このような聴き方はどの程度普遍的なのだろうか。実際にiPodは、どの程度まで環境コントロールツールたり得るのか。

これに重ねて箕浦は、とくに小川と辻本への質問として、「音楽」というものを、サウンドスケープと関係させてみていく際のポイントはどこにあるのだろうか、と問うた。「環境の音」に興味があってサウンドスケープ研究を行っている者からすると、音楽をサウンドスケープ概念で分析するということは、必ずしも自明ではない。「音楽」や「音楽の個人化」といった現象をサウンドスケープと絡めてどう展開できるのか、という点が箕浦の疑問である。

第3点目として箕浦は、「場所」や「歴史」という論点 を次のように提起した。

サウンドスケープ概念の核にあるのは、ある場所の音環境のありようを考えるということであろう。ある場所にはそこに特有の音があって、その背景に空間の歴史を培ってきた人びとの文化がある。サウンドスケープ研究はまさにこのことを重視してきたと考えられる。この、「場所があって、そこに蓄積されてきた歴史があって、そこに音がある」というサウンドスケープ理解に対して、現代の新しい「個人化社会」というものは、どのような位置にあるのだろうか。それは端的にいうと、シェーファーが指摘したような、伝統的な音と人とのありようが失われてきているという話になるのか。それとはもう少し別の結末があるのか。以上が、細川と箕浦からのコメントである。次にこれに対する報告者からの応答を紹介する。

4.3 報告者からの応答

4.3.1 南田: 多様な聴取スタイルの存在

南田からの応答は下記の通りである。

細川から技術決定論ではないか、箕浦から「環境コントロールツール」という理解は普遍的かとの指摘があったが、シンポジウムのテーマ上、あえて図式的に「環境コントロールツール」としての側面を強調して語った側面がある。実際のiPod のユーザー調査では、技術に対して積極的に対応するタイプとそうでないタイプがいることが明らかになっている。例えばDJのようにしてそのつどそのつどに音楽をつないでいくタイプや、自ら選択せずにシャッフルでランダムに聴くタイプがいる一方で、CDの単位で曲を聴くようなタイプや、あえてその日聴きたいもののみを持ち歩くMDのような聴き方をするタイプもいた。つまり同じ技術でも、使用の在り方は多様である。ただし前二つのタイプのように、技術がもたらす新たな聴取スタイルを積極的に取るユーザーも出てきているのは事実である。

続いて南田は、「個人化」に対応する言葉は何かという 箕浦の質問に対して次のように応答した。対応するのはや はり「共同性」になると思うが、「個人化」の含意として より重要なのは、旧来からの「近代的主体」像との違いで ある。20世紀までの近代化のプロセスにおいて「個人」は、 大きな政治的な理念や目標に即して理想的に描かれる「近 代的主体」であった。しかしベックがいうように、20世紀 後半からの後期近代になると、東西イデオロギーに代表さ れるような「大きな物語」が信頼できなくなり、近代的な 主体像が崩壊していく。つまり個人化は、こうした「近代 的主体」との対比のなかで考える必要がある。

この点は、細川の第二の質問にも関連する。南田は細川の指摘におおむね同意した上で下記のように応答した。

ツイッターや動画サイトでのコメント欄で見られるコミュニケーションの連鎖は、近代的というよりもある種原始的な姿にすら見える。コンサートホールでの聴取のようなものよりも、祭りへの参加のようである。したがって、ここに新しさがあるとすれば「新しさがまるでないところ」といえるかもしれない。

最後に箕浦の「地域の音環境」の議論に関連して、南田

は下記の観光地の例をあげ、逆に論点を提起して応答を締めくくった。例えば観光船の中でカモメや波音をききたいのに歌謡曲や演歌などのBGMがかかっているという状況がある。それは「サウンドスケープ」なのだろうか。もしそれが現実だとすれば、南田自身は、携帯プレーヤーで自分の好きなものを聴いた方がよいと考えるが、サウンドスケープ論者はこれをどのように考えるのか。

4.3.2 辻本:「音楽」からとりこぼされるもの

続く辻本は、まず箕浦の論点について次のように応答し た。

「場所と人と歴史とそこに音がある」という点にサウンドスケープ論の核心があるとの指摘があったが、生まれたときにすでにウォークマンがあった辻本のような世代から見れば、そこにリアリティを感じることは必ずしもできない。そうした人間がいる事実を議論の出発したいと考えている。

続けて辻本は、「そもそも何が音楽なのか」と問いを立てた上で、次のように述べた。

環境論的なサウンドスケープ研究からみると「音楽」はひとまとりに捉えられてしまうのかもしれない。しかし逆に、「音楽」というものの中からみると、こぼれ落ちてしまうものがとても多い気がする。携帯の着信音や、BGMの体験などは、「音楽」のようでいて音楽研究の分野では扱われづらい。それを拾える概念としてサウンドスケープ概念はやはり有効だ。ただし20年前、30年前の分析概念というところから、今の都市を理解するのには難しい部分もあるかもしれない。また「思想としてのサウンドスケープ」という側面で日本の研究は進展しているが、分析概念としての話しがあまり進んでいない印象がある。辻本はそこに取り組んでいきたいと考えている。

最後に「個人化社会」との関連で、つながれることの価値が変わっているといえるのではないかと指摘した。

4.3.3 小川:「気づき」の体験とその記述

箕浦の「音楽をサウンドスケープとして捉えることの意味」についての質問に対して小川は下記のように応答した。

広告音楽という体験を記述するには、サウンドスケープという言葉は大変便利である。テレビやラジオなどをつけながら家事や仕事をしていると、ふとある音楽が耳に入ってくることがある。この体験を記述するのにサウンドスケープ以外になかなかいい言葉がない。近年の「街鳴り」戦略も、まちのなかで音が聞こえてきて、気づいたら買わされてしまうという体験を生み出している。この「気づき」という契機がセットで含意されている点が重要である。このような点から、現代の音楽体験を説明するのに「サウンドスケープは使える」と小川は指摘した。

続けて小川は、論点として「近代的主体」をめぐる問題と、「共同体」をめぐる問題の2点を指摘し、パネルディスカッションへとつなげた。

次項では、フロアを交えたディスカッションの様子を見ていく。なお誌面の関係上、一部のやり取りを抜粋した。

4.4 フロアを交えた議論

4.4.1 箕浦:「牧歌的」批判に対して

まずフロアからのコメントに入る前に行われた、箕浦から南田への再応答を紹介しておく。

南田の挙げた観光船の話について、箕浦は下記のように 説明した。「それはサウンドスケープなのか」と問われれ ば「サウンドスケープだ」といえる。なぜならその土地に その音を付け加えるということが地域の人びとに受容され て、音風景が成立しているといえるからだ。しかし、「そ れが唯一のサウンドスケープか」と問われれば、そこに価 値観が入ってくる。当然答えは変わってくる。個人的見解 としては、「良い」とまでは思わないが、地元の人がそれ を選んで付け加えているということに、面白さを感じる。 ただし、人によっては、そういう音を付け加えるのはけし からんと考える人もいるだろう。

続けて箕浦は、これまでのやり取りのなかで、サウンドスケープ論は「牧歌的に昔の音のあり方がいいんだという価値観を前提にしている」と捉えられているように感じられたが、そうではないと反論した。あくまで「対象」として環境の音を扱うときに、そこには「避けがたく、その土地と歴史とか場所が含まれている」ということだ。そういうことを含めて音のことを考えられるのが「サウンドスケープの魅力」だと箕浦は説明した。

4.4.2 ライブ体験と個人化

フロアからは、まず現在のライブ動員の増加と個人化の 関係について、次のような質問が出された。近年、ディズ ニーランドに行く際、その世界にあった格好に完璧に「正 装」する若者がいるが、そうした場所に集う人びとのコミ ュニティについてどう考えるか。

これに対してまず南田が応答し、90年代後半に盛んになってきた野外ロックフェスティバルが、個別のアーティストを目的にしておらず、みんながそれぞれ違うものを見ている特徴があることを説明した上で、実際に参与観察すると、ステージを見に行かず、芝生に寝転びながらヘッドホンで音楽を聴いている人、テントをはってその中でそれぞれのものを流しているという状況もあると指摘した。

これに重ねて小川は、テープや音楽ファイルを選ぶのと同じように、行きたいステージを適宜選んで組み合わせるという操作的体験、つまり「データベース化された選択肢」としての「フェス経験」が生じていることを指摘した。つまりライブ体験もメディア体験も似た状況になっているのである。

4.4.3 より全般的な音楽体験の変化について

次に、より全般的な音楽体験の変化について、一つひとつの音盤やライブを大事に聴いていた時代から音楽体験の性質自体が変化しているのではないかとの質問が出された。同時に、「個」のあり方を考える上で、本来私秘的に描かれる日記が、ブログのように他者に公開し認めてもらうものに変容しているといったことも、現代の個人化を考える上で重要なポイントではないかとの指摘がなされた。

これに対して南田は、「確かに変わってきている」とした上で、次のように答えた。アップル社が宣伝した「4万

曲」はキャッチフレーズにすぎない。ある 21 歳のインフォーマントはそれでも 1 万 8 千曲入れている。ほぼレンタルで、取りつかれたように借りた時期があったようだ。その彼が、ある時、強制的に音を聴かされているような状態――ついに彼は音楽ファイルを取得した「月」のくくりで時系列でリスト化して、その単位で音楽を聴いていた――になっていることに気づき、あえて CD ウォークマンを買って音楽を聴くことにしたという。このように、一概に言えないような聴取の多様性を、一つひとつ拾い上げていく必要がある。

次に辻本が応答し、そもそもレコードや一つのステージ に熱中して音楽を聴くという行為自体が、ある時期にある 地域でつくられたものに過ぎない点も忘れてはならなず、 現在の聴取のあり様を一方的に逸脱的なものとして捉える べきではないと指摘した。

続けて小川は、ここ30年の日本の変化をふまえると、80年代は消費社会であり、環境音楽もある種の「記号」として誇示的に消費されるような風潮があったことを指摘した。当時も他者による承認願望が見られたが、その後の90年代以降の変化としては、選択肢から任意に情報を選びだす「マネージメントカー」「リテラシャ」がされて聴きに借わ

「マネージメント力」「リテラシー」がさらに聴衆に備わってきたのではないか。「ひとりカラオケ」などはその表れではないかと小川は指摘する。つまり「誰にも見せない個」の側面も新たに生じている現象であり、そのような観点から音楽の接し方の変化を読み取る必要がある。

4.4.4 サウンドスケープの定義をめぐって

議論が進む中で、フロアからは、イヤホンやヘッドホンをして屋外で音楽を聴くこととサウンドスケープとの関係についての相反する複数のコメントが出された。

一方の意見は、イヤホンから流れた音はサウンドスケープではないというものであった。音楽はサウンドスケープを構成する要素であるのは間違いないが、今回、南田報告で扱われたのは「ランドスケープに、その場で鳴り響いていると音とは関係なしに、自分でBGMをつけている」状態にすぎない。ウォークマンであろうとiPodであろうと、個人の部屋は別として、それによって「まちのサウンドスケープ」が変わったわけではない。

他方の意見は、サウンドスケープは「主体が聴き取った聴覚世界の総体である」という考えに基づいている。すなわち、今回行われている議論は、「個人化」が進む中で、人びとが「個々人の体験のなかで音の体験を物語るようになった」という話しだ。そもそもサウンドスケープ論は、聴く主体の側から、音をある種の「ストーリー」として捉える概念である。したがって、iPodを聴いたり聴いてなかったり――居酒屋ではきっと聴かないだろう――することを含めて、その経験の総体が個人個人のサウンドスケープといえる。単に、自己演出のためのオンとオフができるようになったというだけであって、それ自体、新しいサウンドスケープのあり様として研究対象とすべきものだ。共同体がサウンドスケープで、個人がサウンドスケープの次なるものという枠組みで考えるべきではないか。

上記二つのコメントは、サウンドスケープを鳴り響く客体として捉えるか、聴く主体の側から捉えるかという点で

異なっている。前者においてサウンドスケープ概念は、 「個人化」とは別次元の議論のものとして扱われ、後者に おいては「個人化」も含めて議論することができるとされ る。

4.4.5 電子ネットワーク上にサウンドスケープは存在する か

議論の終盤でフロアからは、特定の空間あるいは場所に軸をおくのがサウンドスケープ概念の核心だという論点に関して、電子ネットワーク上で、そのような議論は展開可能かという質問が出された。

辻本報告では、香港でも初音ミクが浸透している様子が紹介された。また南田が言及したように、ニコニコ動画やSNSといった電子ネットワーク上でコミュニティらしきものができている。もともと音楽は土地や場所に根ざした文化であったといえるが、一方で、初音ミクは電子ネットワーク上の「土地」でつくられているともいえる。例えばそこで祝祭の音楽だとか、祭りだとか、もともとのサウンドスケープが扱ってきた「音の共有」のような事象が生じている。これについてどのように考えるか

これに対して箕浦は、サウンドスケープ概念を電脳空間に「比喩的」に適用するのは面白いアイデアだと答えた上で、本当の意味で空間に音が鳴り響いている状態ではない点については留保が必要だとした。

4.5 総括的コメント

最後に、非会員ゲストとして登壇頂いた南田と細川から は以下のコメントが行われた。

まず細川は、1980 年代にウォークマンが出たときに使用者に対する聞き取り調査などは行われなかったことを指摘し、ポピュラー音楽学会、サウンドスケープ協会が成立した90 年代以降に登場したメディアについては、非常に多くの調査が行われるようになった点を評価した。ただし、かつて80 年代に同様の調査が行われたならば、南田が主張するような「個人化」状況が、その当時も観察されたかもしれないという見解を示した。

次に南田は「技術は必要条件ではあるが十分状況ではない」とした上で、しかし社会の変化を捉えようとすると、技術があったからこそ可能になったものに興味が出てくると述べた。ほぼ完全に環境音をシャットアウトしてしまうノイズキャンセリングヘッドホンなど、ウォークマンの時代と異なる聴取の質の変化について今後も着目していきたいと締めくくった。

5 むすびに

以上、本稿ではシンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」の内容を紹介してきた。フロアからはほかにも、「個人化とランドスケープ」という組み合わせは成り立ち難いように感じられるが、そこに聴覚体験の独自性、サウンドスケープ概念の独自性があるのではないか、というコメントがあった。また、「街鳴り」といった事柄をより積極的に捉えて、音環境のデザインという方向で考える必要があるのではないかという意見も出された。

企画側の不備もあり、十分議論をし尽せなかった点もあ

ったが、サウンドスケープ研究と音楽研究の今後を考える 上で、重要な議論が交わされたシンポジウムとなった。最 後になったが参加者の皆様、とくに議論を大いに盛り上げ て頂いたゲスト登壇者の細川周平氏、南田勝也氏に心から 感謝を申し上げたい。

シンポジウム資料(南田報告) 個人化社会における環境コントロールツールとしてのiPod

●南田勝也

Katsuya MINAMIDA 武蔵大学 社会学部 MUSASHI University, Faculty of Sociology

<小特集によせて>

サウンドスケープを愉しむためには、耳をオープンにしなければならない。それが外世界の音の「豊潤さ」に触れる方法である。しかしいまや、電車の中は言うに及ばず、街歩き中でもジョギング中でもヘッドホンで耳を閉ざしている人は多い。音の体験は、外世界の開放された音環境に求めるものではなく、個人が手にもつデジタルオーディオプレーヤから取捨選択するものになっている。

その現況について、ウォークマンの時代に取り沙汰されたような〈外の世界に耳を傾けずに内の世界の「貧困さ」にこもる現代人たち〉という解釈はもはや成り立たない。なぜなら、小さなデバイスがもたらす内世界の音の体験は、十分に「豊潤」なものだからである。人は、数年かけても聴ききれない数の楽曲を自分の端末に携帯している。

現代のテクノロジーは、膨大な選択肢を諸個人に与えている。個人は時間的制約に基づいて生きる上で、何らかの選択と決断をその度ごとに行うよう求められている。それが「個人化社会」の含意である。「〇〇化」「~sation」の言葉には、望むと望まざるとは無関係に「そうなってしまう」の意味がある。現代人は、「個人」に「化」けざるを得ない環境に置かれているのだ。自分の聴く音を能動的に選ぶことが受動的に決められている、と言い換えてもいいだろう

21世紀における諸個人のサウンドスケープはどのような形で立ち現れるのか、今回のシンポジウムでは、そのような現状分析と問題提起を行った。多分に挑発的な論題に対して寛容に受け取ってくださった協会の企画者の方々には感謝している。私としては、テクノロジーが進化していくことと、それがどのように利用されているのかを、注意深く見守っていきたいと考えている。

1 個人化とは

「個人化」とは、「個人主義」や「個性化」や「私化」とは(重複する部分もあるが)異なる社会学的概念

- ・膨大な選択肢に個人が晒される事態 (ref. ベック『再帰的近代化』 バウマン『リキッド・モダニティ』)
- ・伝統的モデルから脱埋め込み化された個人 →自身の演出 家として振る舞うよう促進される社会規範

2 音楽聴取の形態

- ・宗教儀式の音楽、祭りの音楽、コンサートホールの演奏 会など伝統的な音楽聴取形態
- ・教会、サウンドスケープ、校内放送、ラジオなど公共的 な音楽聴取形態
- ・応接間に置かれたステレオセット、お茶の間の紅白歌合 戦など家庭内での音楽聴取形態

たしかに音楽は、古来より「共同」で聴かれるもので あった

- ・聴取の個人化の第一段階 1970~1980 年代
 - 個室や車内などプライベートな空間が各個人に用意された「私化〈プライバタイゼーション〉」の時代
 - 音楽の領域での象徴的デバイスが、ウオークマン (ref. 細川 『ウオークマンの修辞学』)
 - 面倒な外界の出来事をシャットアウトする役割

ただし、ウオークマンでは、リスニングする方法と持ち歩ける楽曲の幅は技術的制約によって限られていた

- ・聴取の個人化の第二段階 1990 年代~2000 年代
 - 集団固有の意味供給源が喪失し、社会の流動性が高ま「個人化」の時代
 - 「ベスト 40,000 曲を持ち歩こう」の iPod の普及 (ref. 南田『デジタルメディアの社会学』)
 - 今日聴く曲、今の気分にマッチする曲を自分自身でコントロールする DJ 的な能動性

3 サウンドスケープの個人的選択

- ・ウオークマンの時代 →耳栓をして街を歩くようなもの→ **風景は遮断する、繭としての音楽デバイス**
- iPod の時代→DJ プレイをして街を歩くようなもの→風景を染める、(鱗粉を散らす) 蛾としての音楽デバイス

「都市空間の意味はそれ自体、ユーザーのプレイリストからもたらされている。 (中略) 多くの iPod ユーザーにとっ

て、都市の快楽は、彼らの活力を〈混乱させ〉〈散漫にする〉他者との相互作用によってではなく、都市での生活がいかようなものであるべきかを思い起こさせる音楽を聴くことによって生じる」(ref. Bull, Michael, Sound Moves)

【iPod ユーザー聞き取り調査のインタビューデータ】

調査期間:2009年1月~7月

調査対象: クリックホイール式 iPod classic または iPod nano を所有する男女 30 名、年齢 19~37 歳、平均年齢は

22.8歳。場所は神戸と東京 調査手法:半構造化面接法

〈09.2.21 会社員 K、会社員 S、ともに 24 歳、男性、神戸〉

K:東京に去年まで住んでて、住んでたところの近くに桜がすごいきれいな公園があって、休みの日にそこをちょっと見に行こうかなと思って見に行ったときにめっちゃきれいやったんですね。それで、iPodの中に「桜」がついてる曲、ケツメイシの「さくら」とかコブクロの「桜」とかが入ってるんで、それを聴きながら見ると、めっちゃいいように見えた。すごい心落ち着くような感覚になったので、それですごく覚えてるんです。音楽でより映えるのがあるんかなと。めちゃめちゃ覚えてる。それ去年の3月。

-: はっきり具体的ですね。

K: ちょっと仕事やらかした後やったんで。大クレームやっちゃって、それがちょっと落ち着いてようやく久々の休みってのがあって、それで余計に覚えてるんですけど。

-:そのとき誰かといました?

K: いや、一人です。

S:似たような感じで、大学卒業するときに、追い出しコンパかなんかがあって、帰りの電車の夜景が曲でもう切なくなって、「もうこれで終わるんか」って。

-: ああ、いい話ですね。何の曲やったか聞いてもいいですか?

S: JUN SKY WALKER(S)の「休みの日」って曲なんですけ ど、それが彼女と別れるみたいな曲なんですけど、それが 「みんなとお別れになるんや」みたいな。

-: それは、「それを聴こう」と思ってセレクトしたんですか? それともパッとかかってしまったみたいな感じですか?

S: それは iPod を見て「ああこれいいな」「こういう気分かな」って。聴いてみたらガッチリはまってたんで。

-: 桜の方もそうですよね?

K: それはもう意識して。

〈09.5.20 学生 Y、19 歳、女性、東京〉

Y: 京都に一人旅したときに、車窓から見える田園風景を、 そのとき何を聴いたのかわからないんですけど、ふつうに 何も聴いてなかったらただの田舎じゃないですか。でも、 聴いてたらすごい……。思い出した。DAISHI DANCE の 「ROMANCE FOR JOURNEY」を聴いて。もう名前からし て「ジャーニー」、旅じゃないですか。すごい気持ちが高 揚してくるんですよ。「あ、シャッと風景変わっちゃった よ」みたいなそういう感じですかね。あと、天気がよくって、気分が、最初は 0 ポイントで音楽聴いてたら 100 ポイントに上がったっていう感じですかね。「今日、もっと天気いいんじゃない?」「緑がきれいすぎじゃない?」っていう思いになったりはしますね。

-: それは偶然かかったんじゃなくて、iPod 見てて「あ、 これかな」って聴いた感じ?

Y:はい。

〈09.5.25 学生 C、21 歳、女性、東京〉

C:ヨーロッパへの旅行中も、たとえば街を歩くときにかなり急に人恋しくなったりとかしたときに、自分のなかでテンション上げるために使ったりするんですけど、そのときはあえて洋楽を選んで、で、片っぽだけはめて、で、歩くと、ほんとに映画にきたような。街並みはヨーロッパの街並みだし、で、一応、街頭のガヤガヤした音楽っていうか音も聴こえて、で、BGM的なものも聴こえるから、こう映画に入ってるような感覚に、いつもと違うような感じに感じました。

-: それ用に、洋楽も入れているの?

C:基本的に洋楽はそんなに聴かないんで、みんな聴いてるようなのを一応取り込んでる感じです。で、なんかやっぱり普段だったら大塚愛の「SMILY」とかでテンション上がるけど、それを外国で聴くと、「何のために外国にいるのかわからない」というかそういう感じがしちゃうんで、だから外国で歩いてるときは、なるべく溶け込むように洋楽。で、なおかつ、音楽だけにハマっちゃうともったいないんで、街頭の音も聴こえるように半々みたいな。

4 エゴキャスティングの果てに

- ・「BroadCasting」 → 「EgoCasting」 の時代
- ・個人化の定着の一方で、その耐え難い側面に対する反応 としての共同体への欲望(ref. ベック『再帰的近代化』) →音楽配信ライブサイト(DOMMUNE など)やネット レーベル主催イベントは「共同」の回復行為か?
- ・データベース消費の枠内

[付記:大門信也] 本稿はシンポジウム当日に配布された資料を、南田氏自身のコメントを冒頭に付して、レイアウトしなおしたものである。南田報告の内容については本誌収録のレポート記事と合わせて確認されたい。

シンポジウム資料(辻本報告) 持ち歩かれる歌と流れる音楽——香港の若者たちの事例から

●辻本香子

kyoko TSUJIMOTO 総合研究大学院大学/日本学術振興会 The University for Advanced Studies/ JSPS

<小特集によせて>

音響再生テクノロジーの発達によって、個人がそれぞれ「好きな音楽」を自由に屋外に持ち出し、それによって個々のサウンドスケープを構築している、という図式は、現代の社会において音を共有することが難しくなっている背景として、ほぼ必ず言及される側面である。このトピックについて、そしてそれが「サウンドスケープデザイン」にどのように関わるか、という問いについては、これまでも若手座談会やシンポジウムなどを通して、サウンドスケープ協会のおもに若手研究者によってしばしば論じられてきた。

今回のシンポジウムでは、1981年に『ウォークマンの修 辞学』においてそうした《音風景》を描き出した第一人者 である細川周平氏と、そこから現代にかけて、iPod の調査 データを例にとりつつ、30年後の現在を論じた南田勝也氏 との議論に、また異なる事例を差し挟むことで問題提起を はかった。筆者が取り上げたデバイスは携帯電話、舞台は 香港である。日本と香港では、公共の場所に個人的な音を 流すという行為が許される範囲が大きく異なり、そのため 携帯電話から流れる音(風景)を耳にするのは、その持ち 主だけとは限らない。そのため、携帯電話に保存されてい る「音楽」の広がり方は、日本のサウンドスケープにおい て音響再生装置が果たしてきた役割とは大きく異なる。ま た、その音楽自体の流通経路も、この30年間の日本とは大 きく異なる点がいくつも存在する。こうした点に着目しな がら、筆者のフィールドワークで得たデータを基に、2011 年の香港に生きる若者たちがどのようなデータを保持し、 耳にしているかを紹介していった。

日本においてサウンドスケープ概念が受容されていった 背景には、同時期に発展しはじめていたポピュラー音楽研 究との密接な関わりがあった。そして、持ち歩かれる音楽 をめぐる問題はその重要なトピックであった。今回のシン ポジウムは、その交わりに再び焦点をあてる場ともなった。 箕浦一哉氏による討論と質疑応答を通し、「持ち歩かれて いる音楽」とサウンドスケープがどのように関わるのか、 また、現在のサウンドスケープがどのように関わるのか、 また、現在のサウンドスケープ研究が(ポピュラー音楽研 究をはじめとした)音楽学とどのように問題意識を分かち 合い、どのように棲み分けるのかといった問題点が浮かび 上がった。サウンドスケープは「音楽」という対象とどの ように対峙するのか?という問いを、それぞれの立場から 改めて問い直すシンポジウムであったと言えるだろう。こ の調査にあたり、快く情報提供に応じてくれた、北少林龍 チームの十代のメンバーたちに心から感謝したい。

1 問題と調査の概要

1.1 報告の概要

- ・都市の芸能の音と BGM の混淆というテーマでの研究を 通して得られた問い
 - -個人が自分のために構築している音環境の実際はどのようなものだろうか?
- ーメディアの小型化:他人の音環境に流れている音を知ることが難しくなっている
- ーインターネット配信の普及もその一端を担う?
- ・かつてはレコードやCDのコレクションとして形をとっていたものが、現在では手にとっての調査が難しい
- ・携帯電話で音楽ファイルを聴くという行為

1.2 問題設定

- ・現代の社会で暮らす若者たちの耳を占有しているイヤホン・ヘッドフォンには、いったいどのような音が流れているのか?
- →調査対象に直接接触し、了承を得て、聴いている音楽 について尋ねていくことは可能か?
 - ・『音楽をまとう若者』小泉恭子 2007
 - 一小泉は、1998年の調査をもとに、若者の聴いている音楽を「パーソナル」「コモン」「スタンダード」に分類した
 - ・『2002 年ソウルスタイル』(国立民族学博物館での 展示)も参考に

1.3 方法

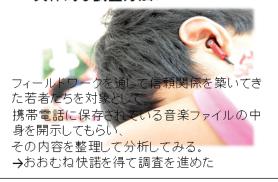
- ・音楽/芸能のフィールドワークでかかわってきた若者たちを対象にする
- ・芸能の練習風景:休憩や待ち時間にはイヤホンを用いて 音楽を聴き、ゲームをしている。また、録音機能を練習 に用いることもある
- ・親しくなるにつれ、入っている音楽を聴かせてくれることが増えたが、J-popやアニメソングが多かったため、その流通の経緯に関心を持った

てきた若者たちを対象にする

- 芸能の練習風暑:休憩や待ち時間にはイヤホンを用いて音楽を聴き、 ケームをプじる。また、緑音機能を練習に用いることもある
- 入っている音楽を聴かせてくれることが増えたが、」 が多かったため、その流通の経緯に関心を持った



具体的な調査方法:



1.4 具体的な調査方法

・フィールドワークを通して信頼関係を築いてきた若者た ちを対象として、携帯電話に保存されている音楽ファイ ルの中身を開示してもらい、その内容を整理して分析し てみる。

2 本報告で使用するデータの概要

2.1 対象となった若者たちについて

- ・2009-2011, 2012 年まで長期調査をおこなっていた中国龍 舞チームに所属する 10 代の若者
- ・1992-1997 年生まれ(当時13-18歳), 中学生
- ・男子7名/女子5名の計12名の電話についてここで扱う

2.2 データの収集方法

- ・2011年7月に実施
- ・カメラで携帯電話の画面を撮影

3 結果

3.1 音楽ファイルの概要

- ・音楽ファイルの総数:1460件
- ・地域を限定できない歌手:流れる中国語
 - -例 張敬軒……中国(広州)生まれ、祖籍は北京、活 動拠点は香港

データの収集方法

- ・ 2011年7月に実施
- ・カメラで携帯電話の画面を撮影





表1 地域別音楽ファイル数

地域	データ数
香港	533
日本	285
韓国	239
台湾	198
?	63
カナダ	24
中国•香港	22
US	20
マレーシア	13
中国	9
シンガポール	6

表2 アーティスト別音楽ファイル数

アーティスト名	地域	データ数	
古巨基	香港		110
張敬軒	香港•中国		78
初音ミク	日本		71
鄧紫棋(G.E.M.)	香港		31
BEAST/B2ST	韓国		30
周杰倫	台湾		29
陳奕迅	香港		26
衛蘭	香港		24
U-Kiss	韓国		23
F.I.R.飛兒樂團	台湾		20
劉德華	香港		19
飛輪海	台湾		19
Avril Lavigne	カナダ		17
周柏豪	香港		15
S. H. E.	台湾		11

- 「シンガポール」「マレーシア」と区分したケースも、 香港や台湾出身の華人であり、中国語で歌う
- ・中国の歌手が広東語、香港の歌手が北京語で歌うのは当
 - -例 劉德華 "Everyone is No. 1"
- -同じ曲が二種類の歌詞をもつのもごく一般的

3.2 個人別の音楽ファイルリスト

表3 個人の音楽ファイルリスト (例1)

機種	SUMSUMG	#		
特記事項		91曲		
鈴聲				
曲目リスト		歌手	言語	地域
C. Chan	Complicated 1	Avril Lavigne	英文	カナダ
C. Chan	I Don't Give	Avril Lavigne	英文	カナダ
C. Chan	You When You're Gone	Avril Lavigne	英文	カナダ
C. Chan	Innocence	Avril Lavigne	英文	カナダ
C. Chan	Not Enough	Avril Lavigne	英文	カナダ
C. Chan	What The Hell	Avril Lavigne(艾薇兒)	英文	カナダ
C. Chan	我愛她	丁噹	中文	中国·台湾
C. Chan	洋葱	丁噹	中文	中国·台湾
C. Chan	猜不透	丁噹	中文	中国·台湾
C. Chan	就是在這裡-13- Beginner	AKB48	日文	日本
C. Chan	不再猶豫	Beyond	中文	香港
C. Chan	光輝蕨月	Beyond	中文	香港
C. Chan	海闊天空1	Beyond	中文	香港
C. Chan	欒天女孩	C Allstar	中文	香港
C. Chan	愛在當下	G. E. M. & C_AllStar	中文	香港
C. Chan	兩大無猜	Mr	中文	香港
C. Chan	3650	Twins	中文	香港

表 4 個人の音楽ファイルリスト (例 2)

T. Chong	chAngE	miwa	日文	日本	日本アニメ
T. Chong	逆さまの蝶	SNoW	日文	日本	日本アニメ
T. Chong	D-tecnoLife	UVERworld	日文	日本	日本アニメ
T. Chong	Change The World	V6	日文	日本	
T. Chong	Rolling Star	YUI	日文	日本	
T. Chong	come	安室奈美惠	日文	日本	
T. Chong	moon	初音未來	日文	日本	VOCALOID
T. Chong	世界第一的公主 殿下	初音未來	日文	日本	VOCALOID
T. Chong	戀愛戰爭	初音未來	日文	日本	VOCALOID
T. Chong	甲蔥歌 VOCALOID2	初音未來	日文	日本	VOCALOID
T. Chong	电惠歌 VOCALOID3	初音未來	日文	日本	VOCALOID
T. Chong	僕らの合言葉	清浦夏実	日文	日本	日本アニメ
T. Chong	HO-KAGO TEA TIME-List	放課後TEA TIME	日文	日本	日本アニメ
T. Chong	宮崎駿~貓之報 恩			日本	
T. Chong	t.A.T.u.	All The Things She Said	英文	ロシア	

表 5 個人の音楽ファイルリスト (例 3)

T. Jiu	Everyone is No.1	劉德華	中文	香港	
T. Jiu	天比高	劉德華	中文	香港	

表 6 個人の音楽ファイルリスト (例 4)

W. Pin	宇宙無敵超韌性 男朋友(終極三 國片尾曲3)	武虎將	中文	台湾	
W. Pin	終極一家電視		中文	台湾	台湾ドラマ
W. Pin	花樣少年少女		中文	台湾	台湾ドラマ
W. Pin	我寫的每一首歌	駱胤鳴	中文	香港	
W. Pin	紡歌	?	中文	日本	APH(動画) VOCALOID カ バー曲 中国部
W. Pin	留在我身邊	青山黛瑪	日文	日本	
W. Pin	keroro軍曹op		日文	日本	日本アニメ

3.3 「紡歌」の成立過程

- ・この曲が携帯電話に入るまでの流れ(予想)
 - -動画サイトに投稿されたボーカロイドによる作品(日本語)
 - ・曲調が"中国風"

 \downarrow

- 一中国語訳をつけ、中国語で歌い、動画サイトに投稿する人が現れる
- それを無関係の漫画/アニメ作品のキャラクターと組



図 1 冬季合宿で"Everyone is No. 1"を歌う様子





み合わせて作成した動画を投稿した人がいる -

一その動画を気に入った香港の若者たちがダウンロードして携帯に入れ、聴いている



4 まとめ

- ・これらのデータから何が読み取れるか?
 - ー個人によって偏りが多い。また、あきらかにアルバム 単位での聴取とは考えられない。
 - →補足:ほとんどがインターネット上のデータからダウンロードして聴いているという回答(ファイル名での検索結果からも明らか)。
 - 中国語ポップスの地理的・空間的広がり(1997 年以降 の動向)と言語の多様性。
 - ーかつて J-pop が大量に輸入されていたが、現在の若者 にとって日本の音楽の中心はボーカロイド、アニメ、 ゲームを通して知るものであることが見て取れる。
 - -香港における K-Pop の浸透。
- ・音環境はほんとうに個人へと切り離されているのだろうか?

[付記: 大門信也] 本稿はシンポジウム当日に提示されたスライドを、辻本氏自身のコメントを冒頭に付して、レイアウトしなおしたものである(資格情報が含まれているスライドの一部をそのまま掲載している)。報告内容については本誌収録のレポート記事と合わせて確認されたい。

解説:今日の聴覚体験をめぐる論点 ――サウンドスケープ研究とポピュラー音楽研究の接点を意識して

●大門信也 Shin'ya DAIMON 関西大学 社会学部

KANSAI University, Faculty of Sociology

●小川博司 Hiroshi OGAWA 関西大学 社会学部 KANSAI University, Faculty of Sociology

キーワード: 日常性、気づき、分析 keywords: ordinary, awareness, analysis

「小町は電車に乗っているとき、音楽を聴いているよね?」 「うん、僕にとってはなくてはならないものだよ」 たしかにヘッドフォンをしながら電車に乗っている小町の 姿はとても楽しそうだった。

「あれって、自然の音とか線路と車両のコラボレーション のほうがよくない?」

1 はじめに

レポート記事³で見てきたように、シンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」では、「聴取の個人化」仮説の妥当性をめぐる南田氏と細川氏の議論を軸とつつ、場所と歴史と音との関係をめぐる問題、サウンドスケープの主体と客体をめぐる問題など、様ざまな重要論点が浮上してきた。

本稿では小特集の締めくくりとして、これらの論点を 「サウンドスケープ研究とポピュラー音楽研究の接点」と いう問題関心から整理しなおしてみたい。

2 「気づき」の契機とその分析可能性

パネルディスカッションの中で小川は、ポピュラー音楽研究にとってサウンドスケープ概念が依然として有効なのは、日常的に音楽にさらされている「被音楽状況」を記述するのに適している点にあると述べた。とくにサウンドスケープ概念が、日常の中でのふとした音への「気づき」という契機を組み込んでいる点は重要なポイントである。また辻本は、日常の「音楽のような体験」の中で通常の音楽研究から「こぼれ落ちる」ものが少なからずあり、それを分析するためのツールとしてサウンドスケープ概念に注目していると説明した。

このように「音楽そのもの」としては扱いづらいが「音楽体験(のような何か)」を記述することができる点に、音楽研究におけるサウンドスケープ概念の可能性がある。その可能性を活かすためには、日常の中での聴取体験を的確に表現するための分析用具が必要となろう。例えば鈴木秀樹の提起する「積極的受動態」概念は、日常の中での「気づき」という契機を分析するためのツールとしても有

効かもしれない³⁾。

しかしその一方で、今回「個人化社会」の象徴的デバイスとして南田が取り上げたiPodは、人びとに「音を積極的かつ能動的に選び取らせる」機能を有している。それは「気づき」の契機や「積極的受動態」という身体図式そのものを、日常経験から遠ざける可能性を有していると考えられる。聴覚体験の多くが、与えられた選択肢の範囲内で形作られるのであれば、日常や身の回りの環境への「気づき」を促す装置としてのサウンドスケープ概念は、一体どのような意味を持つのだろうか。

3 聴く主体の側から捉えるか鳴り響く空間 の側から捉えるか

この問題への対応に関して、シンポジウムでは2つの考え方が提示された。

一つ目は、イヤホンやヘッドホンから流れている音楽は、「サウンドスケープ」ではないという考え方である。この考え方にもとづけば、iPod などによる聴取行動は、サウンドスケープ研究に含まれないことになる。その背景には、サウンドスケープ概念を、空間に鳴り響く音の総体として、いわば客体として定義する発想がある。

二つ目は、イヤホンやヘッドホンでの聴取も含めた「主体の聴覚体験の総体」を捉えるのがサウンドスケープ概念であり、したがって iPod 利用者が増えたならば、そうした利用者の体験を捉える作業も、サウンドスケープ研究に含まれるという考え方である。その背景には、聴く主体の側からサウンドスケープ概念を定義する姿勢がある。

恐らく「聴く主体」か「鳴り響く客体」かのどちらかに 寄りすぎても、サウンドスケープ概念の「独自性」が削が れることになると思われる。主体の側で定義したとして、 それが単に音楽の中身のみの分析であれば、わざわざサウ ンドスケープ概念を持ちだす必要はない。一方で、鳴り響 く客体として定義しても、ただ音響事象を分析するだけで あれば、既存の音響学の知識で十分かもしれず、サウンド スケープ概念をもちだす必然性は低下する。

以上のような主/客の緊張関係をふまえると、あらためて「基調音/信号音/象徴音」のような、準客観的な分析

カテゴリーの面白さが見えてくる。これらの分析カテゴリーは、純粋に個々人の主観によって定義されるわけでもなければ、純粋に物理的な特性によって定義されるわけでもない。ここに「分析概念としてのサウンドスケープ」のポテンシャルを今後活かしていく道があるのかもしれない。これは、小川が述べた音楽体験の「図/地」といった論点、あるいは大門が論じたサウンドスケープの2つ目の定義の重要性といった論点⁴にかかわる。

4 場所と歴史をめぐる問題

またシンポジウムでは、「サウンドスケープ概念の魅力は場所や歴史との関連で音の体験を捉える点にある」という箕浦コメントをめぐって意見が交わされた。例えば辻本は、場所と歴史と音のセットを考えることは現実的には難しいと応じた。実際に、辻本のフィールドである香港では、歴史的文脈が錯綜するような音楽が、携帯電話の小さなスピーカーを通してまちのそここで鳴っている。これに対して箕浦は、サウンドスケープ論は素朴に「昔の方がいい」と言っているわけではないし、例えば南田が挙げた「観光船で流される歌謡曲・演歌」を単純に「良くない」と主張するものではないと応答した。価値判断は個々の論者によって異なり得るということである。

世界サウンドスケーププロジェクトのヨーロッパでの村 落共同体を中心とした調査をふまえ、サウンドスケープ概 念は、「人や社会に意味づけられている」ことに「強調点 をおく」という定義を与えられた。しかし箕浦が主張した ように、確かに定義それ自体には「素朴な共同体や、牧歌 的な昔の音を大事にせよ」という教義は含まれていない。

それでも、サウンドスケープ概念からそうした「におい」を嗅ぎ取り、それを批判する声がこれまでも寄せられきた。シンポジウムで細川が言及したように、そのような批判は、『世界の調律』の翻訳前から出されていた。このように見ると、音をめぐる場所性や歴史性の強調は、結果として音楽研究との相互交流を妨げる躓きの石になっているようにも感じられる。

こうした事態を乗り越えるとすれば、より分析的に現状を記述していくための理論枠組みを豊富化していく必要があるようにも思われる。3.で述べた既存の分析カテゴリーの洗練作業の重要性があらためて浮き彫りになる。

5 ポピュラー音楽研究との接点をもとめて

サウンドスケープ概念は、音楽研究という文脈において も依然として「使える」概念である。しかしそのポテンシ ャルをさらに活かせるかどうかは、今後の研究の進展にか かっている。

1980 年代に日本で盛んに議論された環境音楽は、その後「癒しの音楽」へと商品化されていき 5、BGM は「街鳴り」というマーケティングのツールとして FGM という形にまで変容を遂げてきている。こうした状況は、本来「気づき」の契機に満ちた風景体験ですら、資本の論理やマーケティング的実践の中に組み込まれつつある様子を表している。また、その中で人びとは、自らの身体や環境との関係を自己完結的にコントロールする術を高度に身につけてきてい

るようにも見える。

こうした現状を、(批判的な視点を持ちつつも)適切に分析していくためには、今後も分析的な作業努力が必要だと考えられる。そして、そうした作業努力は――冒頭で示した『僕達急行』の主人公たちのように――「日常性」という共通の関心を持っている音楽(とりわけポピュラー音楽)研究との、新たな対話と協働の道をひらくと考えられる。今回のシンポジウムおよび本小特集がその活性化につながることを願っている。

註

- 1) 2012 年公開、森田芳光監督、バンダイビジュアル。引用はノベライズ版(長尾徳子:『僕達急行――A列車で行こう』(集英社、東京、2012),70-71 頁.)より。シンポジウム当日、細川周平氏がこのシーンに言及した。
- 2) 本誌収録の「レポート:シンポジウム「個人化社会とサウンドスケープ」を参照。
- 3) 鈴木秀樹: サウンドハンティング, 『サウンドスケープ』12(2), 43-48, 2011.
- 4) 大門信也,金子智太郎:音の路上観察へむけて, 『10+1 website』,2009.6.

(http://10plus1.jp/monthly/2009/06/issue1.php)

5) 小川博司:「癒しの音楽」とは何か. 小西潤子, 志村哲, 仲万美子編『音楽文化学のすすめ――いま、ここにある音楽を理解するために』(ナカニシヤ書店、京都、2007) 147-159 頁所収.

協会史編纂事業の一環として、協会設立に至る関西での経緯について、当時をよく知る一人である平松幸三・前理事長※にお話を伺った。参加者たちの記憶を交えながら、約四半世紀前、騒音をテーマとした学問や行政をめぐって、そこにあった問題意識や時代背景を明らかにしつつ「なぜ、日本サウンドスケープ協会が必要だったのか?」を探る。——2012年10月3日、ロンドンから一時帰国した平松氏を囲み、東京にて実施

※平松幸三(ひらまつこうぞう):日本サウンドスケープ協会理事。京都大学名誉教授・日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長

参加協会員:池村弘之(協会史編纂事業リーダー)、上野正章、佐藤宏、鳥越けい子

池村:協会20年史ということで、いま年表を作成しているところですが、時代をいくつかに分類して、前史、草創期、学会化の流れ、学会化の2の時期、現在まで。こういうふうに大ざっぱに分けてみてはどうかということを考えています。それぞれの時代別にどのようなイベントがあったかとか、社会状況とか、事務局の状況とかをまとめています。各時期のキーパーソンの方にヒアリングをしようということで、今回は前史の部分で平松さんに、関西を中心とした状況を伺います。まず平松先生とサウンドスケープの出会いから。

平松:一柳慧さんの『音を聞く』でした。

上野:岩波書店から出ていた黒っぽい単行本ですね。

平松: そうそう。あれが私がサウンドスケープを知った最初でしたね。あの本で初めてサウンドスケープという言葉を知ったんですが、ただ、それが私に響いたというのは、その前にすでに問題意識があったからだ、と思うんです。

騒音工学の限界

私はご存じのようにもともと工学部で騒音の研究を やってたんですけれども、工学的な騒音研究というの は、私の考えでは10年もやれば飽き飽きするもので、 実際私は10年ですっかり飽きてしまいましたね。それ とというのも、騒音工学そのものに潜む本質的な限界 といいますか、同じ音が、時代、社会、文脈次第で騒 音になったりならなかったりする事実は工学では説明 できませんね。

私は騒音行政関係の人とつきあいがありましたが、 彼らが言うには、「学者先生のやっていることは別世 界のように聞こえる。自分たちが日常的に仕事をしていること、とりわけ騒音苦情の対応と学会で聞く研究とはおよそ関係がなく、学会発表を聞いているとむなしくなる」と言うのです。それを研究するにはどうするか、と思い始めたんですね。実は、騒音行政の中身はほぼ2つしかない。1つは騒音測定をして環境基準達のパーセントと発表されますが、あのデータ集めです。もう1つは苦情処理。たしかにあまり研究とは関係ついですね。測定方法など確立されていますし。つまり、私としては、実社会で起こっている騒音問題や騒音行政と無関係に騒音研究をしていることへの反省があったということができるかもしれませんし、工学的な騒音研究の限界をつきつけられた、ということもできるでしょう。

実験室研究の限界と フィールド研究へのシフト

もう一つ、私は騒音影響の研究をしていたのですが、騒音影響の研究は、労働衛生と軍事衛生でけっこう古くからありました。主に聴力損失を中心とする身体的影響ですが。それに比べると環境騒音の影響研究はずいぶん後発ですね。環境騒音の場合は強大な音はめったにないので、社会調査か実験室実験になる。騒音工学分野で「騒音の社会調査」と呼ばれるのは、ある程度大きな母集団を対象に質問紙調査をする研究です。一方、実験研究ですと、たいてい防音室の中に被験者を入れて、音を聞かせて反応してもらうような研究です。これがだいたい騒音影響研究の2つの流れなん

ですが、実験研究と社会調査の間にはかけはなれた距離があります。

社会調査のときには、その人がどんな音を聞いてい るかが確定できない、一番肝心な曝露量がわからない わけです。これは疫学研究一般に言えることで、例え ばタバコの影響を研究するとしても、回答者が過去40 年間にどれだけ喫煙したかは確定しにくいですね。そ れと同じで騒音の曝露量も、どの地域に住んでいるか で比較するくらいしかない。しかもどの地域といって も、地図に1辺500mの網の目を切って、その中で1 点、多くても5点の測定点をとってその地域の騒音曝 露量とするわけですが、実際問題、20mも変われば聞こ える音は変わりますよね。けれど、細かい測定点を入 れていくことは技術的にも経済的にもできなかったの で、この程度の曝露量把握となり、一方、居住してい る個人に質問紙調査の回答を求めるとうもので、いわ ば刺激があいまいなまま反応を求めていることになり ます。これに対し、心理実験では無響室の中で非常に 正確に刺激を測って実験している。

なんとかその間を埋める研究はないのかな、と私も 思っていました。実はいくつかの試みがなされてはい て、ひとつは、10人なり20人なりの被験者を騒音現場 に連れて行って実際の音を聞いてもらって音響心理的 な評価をしてもらう。また別な機会に静かなところに 連れて行って評価をさせて、両者の違いを測る。この 手の研究は内外で少なからぬ数がなされました。これ は実験室のかわりに現実の環境で実験することになり ます。また、居間のようにしつらえた部屋の中で数時 間生活してもらって、そこに現実音を再生して、評価 してもらうというような研究もありました。しかし、 それも限度があるだろうと思いますね。

ちなみにこういう一連の音響心理学的研究というの には、私自身がそれで博士学位をいただいているので 口にするのも心苦しいのですが、乗り越えにくい大き な壁があると思います。それは二重盲検が著しくむず かしいということです。薬の効能を調べるとき、偽薬 (プラシーボ)と本物とを使って、ある患者集団には 偽薬を、別な集団には本物を投与して効果に差がある かどうかを検定するわけですが、投薬される患者はも ちろん、投薬する医師も偽薬か本物かを知らされな い、という検査方法が採られます。これを二重盲検と 言いますね。これは投薬者である医師が偽者か本物か を知っていると、その態度が知らず知らず患者に影響 して薬の効果かどうかわからなくなる、と考えられてい るからです。しかし音響心理実験では、検査者はふつ う研究者で、被験者はしばしばその学生です。学生で なくとも、どのような結果になることが研究者にとっ て好ましいかを被験者が察知する状況がふつうに起こ

っていて、そこで得られた結果に信頼がおけるのか、 という批判に反論できないように思います。かといっ て、どうすると二重盲検の実験をすることができる か、と問われても困ってしまうのですけど。

まあ、こんなことで、実験研究と社会調査の間になるような方法がないかと模索していたのではありますが、方法論がわからなかったですね。後からそれが社会学や人類学でやられている方法、つまり野外調査だとわかっていくんですが、自分にその方面の素養がなく、手探り状態でした。その頃に一柳さんの本で「サウンドスケープ」を知り、こういう世界があるのか、音楽の人たちというのは、こういうことを考えるんだ、ということに初めて気づいた次第です。

私は音楽の素養がありませんから、それまで音楽といえばクラシック音楽くらいにしか思っていませんでしたんでね。それで書店に入ってそれまで眺めたこともない音楽関係の書棚を探したところ、見つけたのが『波の記譜法』でした。なぜかあのタイトルを見た時に、ピンときましたね。中を見てみると、小川さんが騒音のことを書いていたりしてましたよね。こういう世界があるんだと思って、そこから現代の作曲家の書いたものを少しは読んだりし始めました。

実はもうひとつ大きかったのは、『音の科学文化 史』の翻訳です。1981年から1年間イギリスのサウサンプトン大学で研究させていただいたときに、書店でみつけたアメリカの音響学者の書いた本を翻訳しました。それを翻訳するかたわら科学史や科学哲学の本もかじったところ、これまで漠然と、あるいはナイーブにと言ってもよいでしょうが、考えていた「科学」や「科学的方法論」に対して大きな修正を受けました。この経験が工学研究から野外研究に踏み出す自信を与えてくれた、と今となって思い返します。またある歴史家が、歴史学の知と科学の知に本質的違いはない、と述べてますが、これなんかも説得的に受け止めることができるようになりました。

関西での初動

1. 土木学会関西支部

池村: そこで同じような問題意識を持っている人と研究会を組織していったりしたのですか。

平松:大阪府の職員で、騒音行政を主に担当しておられた厚井さんが、かねてより行政関係者とか騒音研究者とかに呼びかけて騒音に関する研究会を土木学会関西支部で始めておられました。土木学会関西支部には会員の研究会活動に対して、発表の印刷代を支援するということで学会支部が予算を組む制度がありまし

た。厚井さんが中心的に面倒をみておられましたが、最初が1985年か86年だったかで、その後3年か4年やりました。その中で私が「サウンドスケープという概念があって、音環境を考える上で大事なんだ」と言い始めて、サウンドスケープの話をするようになっていった、と記憶しています。

池村:「サウンドスケープとその計画論的展開」ですよね。

平松:あ、そうです。一番最初はちょっと違った名称だったと思うんですけど。年度ごとにタイトルを変えたりしたと思います。そこは行政の人がかなり多くて、多くは騒音の予測方法の議論をしていましたね。大阪市の池田さんとか、阪神高速の溝口さんとかがいた。そこで私がサウンドスケープの概念が音環境問題にどんな意味があるのかということを一生懸命考えて文章を書いたりしていたんですね。それが土木学会関西支部の流れでした。

メンバーがだんだん増えていって、50人くらいになってきたころ、厚井さんの管理負担が重くなってきたので、それだったらいっそのこと何か組織を作って事務局を置いて活動したらよいのではないか、ということになった次第です。それがサウンドスケープ協会創立に向けて動こうということになった理由でしたね。もちろんそれだけでなくて、これは将来的に大きく発展できる分野だろうからきちんとしてもいいんじゃないか、と話もしたんですよ。だいたい居酒屋で飲みながら話しするから一気に盛り上がるわけです(笑)。それに今思うと、日本の景気のよいころで、いけいけどんどんの世相もあずかっていたかもしれません。

2. 阪神高速道路公団の研究会

もっともそれとは別に佐佐木綱先生という京大工学 部交通工学の教授がおられて、その先生が鳥越さんを 呼んでサウンドスケープの話をする機会を作りました ね。

鳥越:それなら西鶴屋橋の関係なので、1986年とか87 年ごろですね。

平松:そのころに阪神高速道路公団の研究会があって、公団には佐佐木先生のお弟子さんがいっぱい行ってますし、先生が研究会を主宰して講師を呼んでは話を聞いておられた。佐佐木先生はもともとガチガチの理系の方で、若い頃は数学がお得意で経済学部で計量経済学の助教授をしていたこともあるような方。その先生が奥様が亡くなってから5年間沈黙し、その後初めて書いた論文が「ユングは」で始まったといいます。ものすごい大転換ですね。あの先生は、高速道路は男性原理だが、日本社会は本来女性原理なので受容されにくい、などいろいろと言い始められた。道路という

ものの存在やデザインに意を注ぐ研究に向かわれたわけです。佐佐木研究室の学生は9日間熊野古道巡りをしなければいけなかった、とかききました。そういうユニークな先生でした。

鳥越: それでなぜ呼ばれたか今わかりました。そういうことで高速道路の下の西鶴屋橋で音や光で、これまでとは全然ちがう道路空間を作るということに興味を持たれたんですね。とりまきの方々はすごい固い感じの方ばかりなのに、その先生だけすごく喜んで、こういうのはいいですから話してくださいとおっしゃったんですよね。

平松: やっぱり時代だと思うんですね。高速道路を作っている世界でも、騒音行政関係の中でもこれでいいんだろうか、と思い始めている。そこでサウンドスケープ概念というものを知って、これはひとつの展開をもたらすものだ、と多くの人が思った、といえるでしょう。まずは直観でしょうね。私自身はクーンの『科学革命の構造』を読んでいたこともあって、いまの閉塞感を打開する概念だろう、という直感的なアタリがあった、と思います。

3. 日本音響学会関西支部音環境談話会

1936年に日本音響学会が設立されたんですが、その翌年に関西支部が設立されました。支部とはいうものの、後に東北大学学長をされた八木秀次先生が初代支部長でしたし、湯川秀樹先生ほか錚々たるメンバーで独自の活動をしていたようです。そういう伝統があるなかで、関西支部に音環境談話会を設置しようという機運が生まれました。全国規模の研究発表会では十分に長い時間をかけた議論ができないという欠点を補う意味もこめて、音響学会にはいくつかの「研究会」が設置されていて、「騒音・振動研究会」がすでにあったのですが、そのカテゴリに入らないことを自由に議論する場として音環境談話会が作られました。かならずしもアカデミックな研究発表にこだわらないという意味で「談話会」にしたのです。

北村音一先生が主査となられたのですが、先生は九州芸工大の副学長までされた大物学者でした。先生は音楽に対する造詣が非常に深く、堂々たる方でした。 私はそのもとで事務担当をやっていました。

池村:これはサウンドスケープをテーマにしたものではなかったんですね。

平松: そうですね。私がサウンドスケープということ を言い始めた時に、北村先生はサウンドスケープとい う言葉を使うことに反対された。理由は、「音環境」 で十分である、と。

池村:サウンドスケープのシンポジウムで同様の発言をされたことが印象に残っています。

平松:一貫して反対されていました。「サウンドスケープ」という言葉を使うなら、逆に私たちは先生に対する答えを用意しなくてはならなくなって、その答えが、「音環境」は刺激 - 反応系のイメージをぬぐえない、というものでした。音があって反応が起こる、というイメージが強い、と。「サウンドスケープ」では、実際に音が鳴っていないのに人々が聞いているとか、逆に音が鳴っていても聞いていないとか、主観的に構成されていく部分がある事実は、「音環境」という言葉では言い表しがたいのではないか、ということで、あえて「サウンドスケープ」という言葉を使う、という回答になっていきました。

先生は、音には文化的な側面がある、ということには 賛成されていて、御自身は科学者として研究されま したが、音の文化的側面をお話ししましょう、という ことで音環境談話会をつくられたしだいです。

ということで、私がやったとしたら「サウンドスケープ談話会」としただろうと思うが、そうならなかったのが歴史ですね。

鳥越: 土木学会関西支部のグループは行政関係のメンバーが多かったようですが、音響学会関西支部の音環境談話会の方はどうだったんですか。

平松:そうですねえ、音響学会関係者が半分、あとは 北村先生の知人の方々という感じでした。必ずしも研 究者ばかりではなく。北村先生が呼びかけられると100 人くらい来るんですよ。

鳥越:音環境談話会と土木学会は並行してあったんですね。

平松: しばらくはそうでした。

4. 日音研

池村: そのほかにも何かありましたね。

平松:「日常生活と音楽研究会」、略称「日音研」というものがありました。小川博司さんが東京で鳥越さんらと一緒にやっていたのを関西の大学に移られて、 大阪で新たに発足させられた、と理解してます。

鳥越:日音研は、小川さんが東大の社会学にいて私が芸大の楽理科にいたときに一緒に作った会です。そのときすごい人たちがいた。橋爪大三郎とか大澤真幸さんとか宮台真司さんとか。こんな頭のいい人がいるのかと思う人たちと一緒にやっていた。私たちは東京で続けてたんですけど、小川さんも関西で活動をはじめられたんですね。

平松:日音研もはじめサウンドスケープをテーマにして何回か会をしてましたね。あのころ『世界の調律』を翻訳していて、直後くらいに出版されましたね(1986年)。たしか日音研で『世界の調律』を読む会をしていた。それは一つの動きだったか、しかし音楽

系の人が多かったのと、サウンドスケープだけがテーマではなくむしろポピュラー音楽の方が多くなっていったように思います。

池村: これは後のポピュラー音楽学会ですか。

鳥越:ポピュラー音楽学会ができたから,日音研関西は発展的解消したと理解していました。東京の日音研は,神田サウンドスケープ研究会とか,サウンドスケープ協会ができる前のいろんな研究会があって,そちらに発展的解消した。

日音研について明確なのは、小川さんの流れはポピュ ラー音楽学会になり、私たち東京の日音研の一部はサウンドスケープ協会につながっていく研究会になった。それ以外の人たちもいたかもしれないけれど。

5. その他の流れ: 現代音楽のひとつとしてとらえる

池村:では関西の流れに話を戻すと、音環境談話会、 土木学会、日音研、この3つくらいがそれぞれの領域で 同じような問題関心でサウンドスケープとその周辺を 研究していた、と。

平松:その他というと、失礼な言い方になるかもしれませんが、関西では曽和さんや中川真さん、藤島さんなどが、組織的活動としてではなく、独自に研究活動をしておられました。それから、大阪工大の中嶋鴻毅さん。中嶋さんは大阪市の池田順一さんと交流がある方ですが、かなり早い時点でサウンドスケープの紹介と活動をされました。実は、サウンドスケープを関西に紹介したのは自分たちが一番最初だ、という自負を抱いていらっしゃいます。最初にシェーファーさんが来日した際、東京から関西までの旅費を出して関西に来てもらった、と。そこの事実関係は正確には知らないのですが、85年くらいの話でしょうか。

鳥越: たしかに『世界の調律』を出版する前にシエーファーさんが一度来日されたことがあった。たぶんその時なんでしょうね。何をされていたのか、ぜひ今度調べたい。

平松:だけど池田さんも中島さんも協会に入られたけれども、その動きは協会前史のメインストリームに入らなかったんですね。

サウンドスケープ概念が最初に日本に紹介されたときは現代音楽のひとつのおもしろいコンセプトというイメージで紹介されたでしょう。最初、『トランソニック』に高橋悠治が書いたのが最初でしたか。

鳥越:もっと前に柴田南雄先生とか。『トランソニック』の記事は、『世界の調律』の序文の翻訳だったので、おもしろおかしくというようなものではありませんでした。

平松: 当時、誤解だと思うが、現代音楽の新たなあり

方という受け止め方でサウンドスケープがとらえられていたんですよね。

池村:細川周平さんが昔新書版みたいな本を出されていた、『音楽の記号論』だったか。

上野: 『ウォークマンの修辞学』か。

池村:そこでシェーファーのサウンドスケープが出てます。それは音楽概念の延長としてシェーファーを紹介している文献ですね。

平松: だから、サウンドスケープ概念が音環境研究の ツールになるというふうには思われなかったのではな いでしょうか。

鳥越:音楽の動きとして紹介されるのと、音環境を把握するときの枠組みやコンセプトとは違いますよね。 一柳さんのはどうだったんですか。

平松: 一柳さんは音の環境の理解としてサウンドスケープを書いておられた、と思いました。だからこそ私が、ああそうなのかと思った。だから最初に関西に紹介されたときのサウンドスケープと、鳥越さんがカナダから帰ってきてサウンドスケープ研究とか調査とかデザインをやりはじめたときのサウンドスケープ研究とか調査とは、ちょっと違うように理解していますが、私が間違っているのかもしれません。音楽の一種としてとらえると、イベントはありうるけれど、音環境の研究には結びつきにくいでしょうね。研究や調査の、音環境を読み解くためのツールとなり基本概念として使えるのでなければ、私なんかは研究者としてそこに入っていかなかったと思うんです。その辺が違うんですが、関西の中でけっこう重要な流れとしてあるので、一言ふれておいたほうがいいのではないかと。

鳥越:国によってサウンドスケープの理解が違うのと似ている。そういう状況が日本にあったということですね。

佐藤: 現在でもネット上で検索すると音楽概念としてのサウンドスケープという使われ方もあるので、日本でもどこかで引き継がれているのかも。

池村:大橋力さんがサウンドスケープを批判している 文脈も、音楽概念の延長としてサウンドスケープをと らえている。そういう理解はけっこうあるのかもしれ ません。話はそれますが、キング・クリムゾンのロバー ト・フリップがつくった電子楽器を自分でsoundscape と呼んでいますし。

鳥越:どうしてもそうなりがちなのは、『音響生態学ハンドブック』(1978)におけるサウンドスケープの定義が、二重になっていることもあるんですね。音環境を理解する枠組みとして言っていながら、その結果うまれたバーチャルな音響作品もサウンドスケープと呼ぶこともできる、というのが付いていて、両方を認める定義になっています。これが問題を起こしているの

か、それとも広がりととらえるべきなのかわかりませんが、ともかく両面ありますよね。

池村:両方の側面があって受容されているということですね。

鳥越:ただ協会はそうではなかった。それだけだったら音楽学会かなんかのひとつのジャンルでサウンドスケープを研究していればよかったのですが、音環境の理解のための枠組みっていう部分にこだわるとやはり協会設立が必要となったんですよね。

池村:川崎義博さんはどのあたりで登場したんでしょうか。

平松:中川真さんでしょうね。サウンドスケープ協会を作る以前から、中川さんはたいへんアクティブに活動しておられました。さまざまなアーティストを呼んできていました。今思い出すと、驚くような人々ですが。箕浦くんが私と知り合ったのも京都で夜に行われたイベントだった(1989年秋)、と記憶しています。たぶんマイケル・ナイマンを京都に呼んで演奏会をしたときですね。あの時、打ち上げで飲みに行くところがないか、と探しても、私の知っている京大病院の近くの学生向けの居酒屋しかなくて、そこでナイマンが胡坐を組んで焼酎を飲んでいたなんて、思い出すと愉快ですね(笑)。

上野:「京都国際現代音楽フォーラム」のことではないか。

平松: それでしたかね。ほかにビル・フォンタナとか クリスティナ・クービッシュとかも来ました。川崎さんとは、それで知り合ったのだと思います。ビル・フォンタナのインスタレーションをやったでしょう。京都じゅうにマイクロフォンしかけて、それを京都の造形芸術大学がある瓜生山の見晴らしのいいところにスピーカーを置いてリアルタイムで聞かせる、という。それを川崎さんが技術的にサポートされました。クービッシュは、電波を発信するケーブルを山の中の木なんかにしかけて、それを受信するヘッドホンをつけて歩くと、彼女の作品が聞ける、というインスタレーションをやりましたね。それは協会設立前のことで、協会の設立総会をその場所でおこなったことは、それはそういう前史があってのことですね。

日本サウンドスケープ協会設立

池村:基本的には土木学会で盛り上がってきて、厚井 さんが推進役となって協会をつくったらどうかという 話ですね。それが東京の方とつながって。

鳥越:厚井さんの流れを中川さんにつなげたのは平松 さんなんですね。

平松: そうですね。

池村:協会をつくろうというときに、どのように関東と関西が一緒になったのですか。

平松:関西でけっこう人が集まって、熱い議論をやってましたね。まるでガスが溜まっているかのようにいろんな人が音について語るわけです。驚きですよね。いろんな立場の人が、音環境談話会でも、土木学会でも。それなりのニーズというか勢いがあることを感じました。関西だけでもこれだけあるんだから東京はもっとあるだろうし、福岡には九州芸工大があることだし、そういうつながりを作っていけばそこそこのものができるにちがいない、と見込んだのがひとつ。

鳥越:そのように考えたのは厚井さんと平松さんが話 してですか。

平松:厚井さんと私だけでなくて、阪神高速の溝口さん、大阪市役所の池田さん、神戸市役所の瀬林さん、京都市の板倉さんなどがいました。大阪府には他に青井さんとか何人かの人がいましたので、行政的にやれば実務的に可能と理解したんです。ただし協会をつくるにあたって、関西だけでというのももったいないので、東京にある神田サウンドスケープ研究会と合同してひとつの組織にしないか、と呼びかけました。

鳥越: そのときはもしかすると、私たちは研究会と同時にサウンドスケープデザイン研究所というのをやっていて、そのあとサウンドスケープ研究機構をつくっていたので、そのどこかの時点ですよね。ちょっと気になるのは、騒音制御工学会は関西では関係なかったんですか。

平松:騒音制御工学会というのは関西支部をつくるほ ど大きくないんですよ。音響学会の会員数が4000人く らいのときに騒音制御工学会は1000人くらいですか ら。それから、なかば想像でなかば確信的に言うんで すが、行政の騒音担当はおもしろくないんですよ。先 に言いましたように、仕事が測定と苦情でしょう? それに環境行政の中で騒音というのは非常に特殊でし てね。まず、物質移動が起こらない。多くの環境問題 は物質移動が起こるものなんですね。あと化学変化な ので、化学やっている人は環境行政の中で大気、水、 土壌などで何らかの仕事があるけれど、騒音はちょっ とお門違い。しかも騒音には心理学が関係する。環境 行政の技術系の人は薬学出身者がけっこう多くて、彼 らのポジションはそこそこあるのに、騒音の場合、 知識は独特ということで、そのエキスパートになって しまって、他をやらせてもらえなくなる傾向がありま すね。それは昇格の遅れにつながるわけです。そこで 厚井さんは、騒音行政の者で手を結んで面白いことを し、元気になって、自分たちのプレゼンスを上げてい きたい、という志を抱いてやっておられたんです。日 本の騒音行政担当者として、厚井さんはリーダーでし

たね。

池村:厚井さんはもともと騒音のご出身なんですか。

平松:そうです。厚井さんは私の大学の1年先輩で、修 士論文が騒音だったんです。大阪府に就職されて、最 初か2番目の職場が「公害監視センター」の騒音振動 係だったはずです。

鳥越: そういえば関東に関西の動きを伝えてくれたのは川崎市役所の沖山さんでした。騒音行政のネットワークから関東の方にも声がかかってきたのかしら。どこから声がかかったのか忘れてしまった。平松さんからでしたか。

平松:私が声かけたんだと思いますよ。厚井さんから もあったかもしれません。

池村:厚井さんは役所のルートでも声をかけたんですか。

平松: そのはずです。沖山さんや千葉県の石井さんは 厚井さんの系統ですね。練馬区の大野さんはどうでしたか。

鳥越: 行政は厚井さんが中心に関東に声をかけられた、ということですね。私は『世界の調律』の翻訳で騒音のところを平松さんに専門家としてチェックしてもらっていて交流があったので、その流れでしたか。

平松:そうそう、関西で協会をつくる話があるから東京も参加しませんか、ということになったんですよね。行政と研究のことに戻ると、騒音行政で言ったこととまったく同じことが研究面でも起こっています。一般に環境研究というのは、けっこう環境問題全体に関係するんですね。化学をやっていると、大気、水、土壌と物質が行き来するので連続性がありますから、どれにも関係する可能性がありますが、騒音と振動にはそれがないんですね。しかも、音は音屋に任そうと言うことで、環境学者は手を出さないで、音響学者がやるわけです。

音響学者は騒音以外に環境のことを考える機会があまりないんですよ。環境の研究をやっている学部科に普通は音響学関係はありませんね。たまたまそうなってしまったのですが、京都大学だけじゃないですか? 多いのが、電気系、土木系、建築系、機械系、心理系、あと公衆衛生などです。もちろん土木、建築、公衆衛生では環境関連の研究をしますけれど、やはりその一部という感じは残りますね。だから私は言うんですが、「音響学者は環境を知らない、そして環境学者は音響を知らない。」音響と環境に溝がある、と。音環境というのは環境であるにもかかわらず、環境を知らない人が研究していることが少なくありません。だから他の環境問題でなされている議論が、音環境の研究に反映されないことが少なからずあって、我々は指摘するんだけどそれは受け入れられない。騒

音研究は、音の研究というより環境の研究なんだ、と 認識しないといけない、と思いますね。

鳥越:環境学者というのはその場合どういう人たちのことを?

平松:多くは化学をやっている人。理系では化学が大きいですよね。それと空気、水の流れで、物質移動。 一言で言うと、物質移動と反応です。

鳥越:環境リスクというのは。

平松:環境リスクは科学だけでは閉じません。初めて環境リスクに取り組んだのは放射線研究者でしょう。 とにかく、環境のことと音のことの両方を知っている立場に、私はたまたまいたんです。それも大きいと思いますよ。音の環境という時に、音響学だけでは閉じない世界が環境の世界にもあるんだということで。

池村:北村先生が「音環境」という言葉に意味を込めたのもわかる気がする。「音」と「環境」という交わらない概念を結びつけた。

鳥越:談話会というのは、音響学会の関西支部で、音響学に入らないことをした、ということですか。排除されたということでしょうか。

平松:いや、そうではなくて、自由な議論をする場として「談話会」としていた。ネガティブに排除されたということではなく、積極的にそうした。音響学会のメンバーでない人を講師に呼んでくる会だった。たとえば島原温泉病院の方を呼んだ。NHK「音の風景」を録音したものをためていて、リハビリに来ている高齢者のライフヒストリーを聞き取りして、「音の風景」を聞かせるんですよね。一例を挙げますと、奈良で紡績女工に行っていた女性には奈良の猿沢の池のほとりの音を聞かせる。それも1回や2回でなく、好きなだけ聞いてください、と。長い人は夕方まで繰り返し繰り返し聞くそうです。聞かせた人の2/3くらいの人には効果があった、といいます。

佐藤: 先駆的な例。おそらくそれから十数年経って出てきた回想療法です。情報の共有がされて定着するようになりました。

平松:そのほかにスクール・オブ・ミュージックの人に来てもらったりした。

鳥越:私も行ったかもしれません。

平松:そうかもしれません。談話会のタイトルだけなら記録がありますよ。

なぜ日本サウンドスケープ協会が 必要だったのか?

鳥越:北村先生のお気持ちはよくわかったが、音響学会のなかでやっているだけでは学問的には一緒になりづらいのではなかったか。なぜ日本サウンドスケープ

協会が必要だったか、ということをあらためて考えたい

平松:人々の反応から見て、つくりたい、という要望があることがわかったのと、参加者が増える中で連絡が大変になった、という実務的必要性。そしてそのベースには、サウンドスケープ概念を用いた音環境研究ができる、騒音研究ではできない研究テーマに取り組めるということですね。少なくとも当時の音響学会のなかではサウンドスケープ研究は評価されないだろう、と思いました。たしかに学問論として音響学会がサウンドスケープ研究を受け入れるのは難しいところがあるのですが、それに加えて、そのときの重鎮たちが心理的に反発したところがあります。音響学はサイエンスであるのに、そんな文科系的な、学問とも思えないようなことを発表しにくるな、という感じを受けました。最初にサウンドスケープ研究の発表をしたときのことですけれど。実に冷ややかでしたね。

鳥越:北村先生がそこまで音環境のことを文化として 思っているならば、談話会がサウンドスケープ協会の ようになってもよかったが、そうはならなかった。

平松:やはり音響学というのが、あくまで理系ベースの研究なんですよね。音響学というのは英語でacousticsと言いますが、その語源はギリシア語の「聞く」ということで、聞くことの学問という意味が本来ですが、近代の音響学は物理学の一部に位置づけられてしまいました。アメリカ音響学会は、アメリカ物理学会という巨大な学会集団のひとつに入っています。

サウンドスケープ概念やそれにもとづく調査研究は、理系のサイエンスの範囲を外れる部分が多くて、 人類学的なものなどが不可欠になる。それが本質的に 受け入れられないと、直観的に音響学会の人たちが思 ったんでしょう。あんなもの学問じゃない、という印 象じゃないでしょうか。たしかにシェーファーさんの 『世界の調律』は学術書とは言いにくいですしね。

鳥越:でも人によっては今、音響学会の人でサウンドスケープは音響学の一部ですって言っている人いますよ。

平松: 随分変わりましたね。でも、やっぱり大いなる 誤解に基づいている、と思います。音響学が本来の意 味で「聞くことの学問」であれば一部になりうるでしょうけれども、それでは人類学が音響学の一部になる んですか、ということになるので。音環境は、多少と も音響学の知見がなければ十分には語れませんが、少 なくとも現状の音響学だけで音の環境を語ることはで きませんね。

池村:音響学会や土木学会では限界があるということで、新しい概念の旗印のもとに日本サウンドスケープ協会を設立しようということですね。それぞれニーズ

や研究の課題はあるけれども、ごった煮みたいな感じで、ひとつ器として組織をつくったらどうか、とそんな感じの流れですね。そうすると、協会ができたあとは、音響学会や土木学会のなかでそういうタイプの研究会はなくなったんですか。

平松: なくなりましたね。

池村:協会がそういうのを吸収したという感じになる んですか。

平松: というよりも、そこに行っていた私たちが行かなくなったわけですから。音環境談話会はもしかするとちょっと続いたかもしれませんね。でも北村先生が高齢になられてやめました。私が音響学会関西支部を主催する立場になって少しはしたんですよ。でもサウンドスケープ協会でできるんだから、する必要ないだろうと、やめました。

池村:音響学会や土木学会に会員としての活動はしていたんですか。

平松: 土木学会では私はあまり活動していませんでしたけど、音響学会にはよく行きました。サウンドスケープ研究に入れる必要のない騒音研究は、従来通りに音響学会で発表していましたから。道路騒音の予測の問題とかね、サウンドスケープ協会よりは音響学会や騒音制御工学会でしょうから。

上野:音楽学では戦前はドイツ系が強かったが、戦後 アメリカのものを取り入れるようになった。サウンド スケープも英米系なので、古い年代の人のドイツ的な もの、アメリカ的なものに対する考え方もあったでしょうか。

鳥越:サウンドスケープが英米的なものだと思って排除された、ということですか。

上野: ヨーロッパ系のものをすぐれたものと考え、アメリカ系のものは新興的なもの、歴史的蓄積がなく疑わしいものと考える風潮があった。

佐藤: 音楽療法でも、欧州で音楽を大事にされた方の 中にアメリカ的な音楽療法の考え方に言いたいことが あるような方がいた。

平松:ヨーロッパでサウンドスケープが受け入れられ にくい大きな理由のひとつがそこにあるように思いま す。

もうひとつ、厚井さんの意図として、関西では川崎さんの事務所のNADIを事務局にし、関東ではLAOを事務局にした。厚井さんの発想では、自分たち行政の人間がこれだけ入っているのだから、さまざまな予算をとってくることができる、と。それを関西であれば川崎さんの事務所でやってもらって、事務局経費はその予算から出せばいい、と。だからサウンドスケープ協会を自分たちがとってくる委託研究の受け皿として使うということも考えておられたようです。それでああ

いう事務局体制をつくったのです。

鳥越:本部を関東・関西の2本部にしたということについて、私はそこまでは知らなくて、サウンドスケープというのは土地とか地域の文化を大事にするということで、一極集中ではなくした、と理解していた。

平松: それは私がそのように理屈づけたんです。だいたいサウンドスケープの活動は、地域密着型だから、どこかに中央があって、そこで意思決定を行って指令を出す、なんていうのは、似合わない。だから、東北本部もできる、九州本部もできる、となったらいいんじゃないか、と。それぞれの本部がそれぞれの活動をして、ゆるやかな連合体がいいんではないですか、ということにして、その第一歩として関東と関西ということになったんです。

鳥越:でも最初からお金のことが想定されてそのようになっていたということは、そんなに私は意識がなかったですね。

平松:というのは、会費だけで事務局を維持できないのは明らかでしょう。LAOさんもNADIさんも、たぶん期待された、と想像しています。しかし現実にはお金をとってくるのはものすごく難しかった。受け皿になったことはありますけれども。

鳥越:LAOが(協会の関係者から)仕事を引き受けたことはあったけれども、私の理解としては、それは協会の前からの(例えば)大野さんとのつきあい(があったから)できたことで、協会(の事務局)を引き受けたから得したという感じではないですね。

平松:大阪府の仕事がLAOに行ったことがあったでしょう。だけどあまり大きな予算ではなかったようですね。環境関係の予算というのは命や健康に関わるものには気前よく出すが、そうでないものにはお金をかけない。そもそも行政は法律に基づいてなされるものですから、法律的裏づけのうすいサウンドスケープ関連に予算をつけにくいのは、よくわかりますね。結果、LAOとNADIが大きな赤字を出してしまった。つまり、それは協会として財政的に破綻状態に陥ったということで、それで統合する方向に行かざるをえなくなった。両本部の事務局がかなり持ち出しをしてしまった。厚井さんはそういうつもりではなかったのでしょうけれど、私を含めて見通しが甘かった、と言われると否定できないのではないでしょうか。

池村: 当時、厚井さんと話をしていたときに、協会を権 威づけるために、ゆくゆくは皇族の方を総裁に招きた い、というような話をされていたことがあったが。

平松: そうですか、それは記憶にないです。

鳥越: なぜ協会の設立が必要だったのか、なにを目指していたのか。関東から見れば、関西からのパワーでつくりませんかといわれて、実はこっちはそこまでの

意識はなかったんですよ。どんなビジョンが関西にあったのか、そこを聞きたい。

平松:関東はアーティスト、音楽系の方が多かった。 文化の研究ですよね。関西は土木とか騒音の理系主体 のおっさんの世界なんでしょうね。そこには何とか実 利を得たいという、そこはかとない雰囲気はありまし たね。

鳥越:そこで関東というか私としてはすごく違和感があった。お金をもらうと義務も出てくるし。私たちもできる範囲で研究会をやってたんですけど、組織にしてお金をとったらむしろ大変になるのに、どんな気持ちで厚井さんたちはやろうって言ってくるんだろうと。

平松:厚井さんは最初人数も1000人を目標にしていた。設立のときのメンバーは1000人にははるかに及ばなかったけれど、400人を超えたと思います。そのうち発起人が150人くらいいたんですが発起人になっていながら、2/3くらいの人は会費を払わなかった。これにはびっくりしましたね。

池村:大きく網をかけて、人をたくさん集めた、というところがあったんでしょうね。

鳥越:本音のところのビジョンはどこにあったのか。 関西ではどう意識されていたんだろう。

平松:研究面で言うと、私なんか騒音研究に行き詰まりがあったのでサウンドスケープ研究をやりたい、と思ってましたね。でもそれは別に協会がなくてもかまわないですよ。一番ニーズがあったのは、行政の人たちが、自分たちのプレゼンスを高めたかった、ということだと私は理解しています。騒音測定と苦情処理だけではないものが音環境の世界にはこれだけあるんだぞ、と自分たちの仕事内容を拡張できるからしれない、と。実際、行政的にはアメニティという言葉を使って、単にクリーンかどうかだけでなく、よりゆたかな環境を求めるという動きがあったときに、まなたれができるという話が出ましたね。そのようなことができるぞ、というアピールがしたかった、と。しかも、環境庁より建設省ですよね。予算規模が全然違う。建設省はデザインということに感度が高いし。

鳥越:厚井さんの方はわかったんですけど、平松さんにはどうして、協会をつくる必要があったんですか。

平松: 冗談めかして言うと、御輿に乗ったんですね (笑)。少しまじめに言うと、サウンドスケープ研究 という新しい分野が、音環境の実務に貢献できるとし たら、環境研究者としてはやはりやりがいがあるわけ です。

池村:バブル崩壊があって、最初はいろんな分野の方がいたが、実利を求める人はあまり実利がないので離れていくという経過があり、研究したい人や学生さん

が入ってくる。多様な要素をもってスタートしたんだけど、5年くらい経つと学会化というか、研究を中心にやっていこうということで大きく舵をふるわけですよね。しばらく学会化という活動があり、あと社会性をふまえてアーカイブ活動とかそういう流れにつながっていくんですかね。

平松:協会の設立時には、これを学会にするかどうかで議論しましたが、学会にしてしまうと、またその専門家とかが生まれてきて、広がりに欠けることになるから、学会にするのはやめましょう、という結論になりました。だから「協会」なんですよ。そういうことで当初は、いわゆる研究的な活動より、ほかのイベントが多かったですね。今思うと、さんざん実験的活動をやった、という感じです。

ただ、卒論や修論レベルで研究している人や、若い研究者がサウンドスケープ研究をやっても、論文発表する場がない、あるいは指導する先生がいない、という問題が聞こえてきて、だったら協会活動の中にある学会的性格を形あるものにしよう、ということになったんです。谷村先生のご意向もありましたが、イベント的活動はもしかしたら息が短いかもしれないけれど、学術活動はやはりコアとして残るに違いない、と考えたのが、今おっしゃる「学会化」というものです。その結果として協会誌を発行し、査読論文を掲載するようにしたのですが、と言っても、協会を学会にするのは、私は反対です。サウンドスケープに関する活動は、われわれの生活とかかわらなければ意義が半減する、と思うからです。

鳥越: それではそろそろ時間なので。

(了)

謝辞:本稿をまとめるにあたり、文字起こし作業を担当いただいた箕浦一哉さん(山梨県立大学)に謝意を表します。

日本サウンドスケープ協会 2012年度 春季研究発表会報告

A Report of SAJ Spring Annual Meeting 2012

●上野 正章

Masaaki UENO

大阪大学・京都市立芸術大学日本伝 統音楽研究センター

Osaka University, Research Centre for Japanese Traditional Music Kyoto City University of Arts

1 はじめに

総会前の春の半日を費やして研究発表会が開催された。 「新たな学術の創造」という方針のもとで研究発表会活動 の活性化が打ち出され、研究発表会も、本年度から年二回 開催となったのである。試行ということもあり今回は午前 中だけのささやかな開催となったが、発表を振り返ってみ るならば、日本におけるサウンドスケープ研究の将来を予 見するような斬新な着眼点で満ちていたように思われる。 私の拙い発表はともかく、日本におけるサウンドスケープ 研究も萌芽期から成熟期へと進展しつつあるのではないだ ろうか。簡単に開催概略を示し、その報告を試みたい。



図1. 関西大学南門

2 開催概要

その概要をとめると、以下のようになる。

- ・日時:2012年5月19日(土) 9:30~12:00
- ・会場:関西大学千里山キャンパス 第3学舎 D501 号室
- ・プログラム:
 - 1. 上野正章「『京都日出新聞』に連載された『写生 廿四時』から聴いた明治期末の京都のサウンドス ケープ
- 2. 鈴木秀樹、長谷川秀和 「音を見る」
- 3. 斎藤馨、小林博樹、中村和彦、中山雅哉、藤原章

雄「ライブ音配信システムとツイッターによるサウンドスケープアーカイブ構築検討」

- 4. 曽和治好、土田義郎、栗山伴芳「庭園のサウンドスケープ調査に関する基礎的考察」
- 5. 土田義郎「庭園の音風景の時刻推移 兼六園と玄宮園におけるケーススタディ」



図2. 受付風景

3 報告

最初の発表は、「『京都日出新聞』の連載記事から聴いた明治期末の京都におけるサウンドスケープ」(上野正章)。サウンドスケープの歴史的研究である。

【要旨】

近代化によってサウンドスケープがどのように変化したのかという問題は、マリー・シェーファーによる『世界の調律』も数章を割くように、サウンドスケープ研究において重要な論点の一つである。また、各地によって近代化の様相が多種多様であることを思い浮かべると、サウンドスケープも同様に様々であることが予想され、地域研究の重要性が主張される。しかしながら、過去のサウンドスケープの探求は同時に非常に難しい課題でもある。

録音や録画の発明や普及はごく最近に過ぎず、文字や図版を頼りに研究を進めねばならない。また、文献調査の過程で徐々に明らかになるのは音に関する記述の少なさであり、大量の文献の中から音に関する断片的な記述を探索す

る作業が要求される。加えて、残された音に関する記述が 過去のサウンドスケープに関してどの程度信憑性をもつの かという問題も、どこまで行ってもついてまわる。

本発表は、明治期末の『京都日出新聞』に 24 回に亘っ て連載された「写生廿四時」に注目し、当時の京都の音環 境を解明し、サウンドスケープを明らかにする試みである。 この企画は、京都の様々な地点を選択し、そこでの 1 時間 の出来事を新聞記者が細かく観察し、紙面の二分の一程度 を使用して挿絵入りで報じるというユニークな試みであり、 明治期末の京都におけるある地点、ある時間帯の音環境を 手に取るように知ることができる点で類を見ない。また、 記事の中には、記録した記者の所見もしばしば記され、記 者がどのように音環境を受け止めたのかと言うことについ ても、ある程度知ることができる。さらに、『京都日日新 聞』は明治期末の京都市最大のメディアとして、京都の 人々に購読されていたことから、連載記事は、京都の人々 のサウンドスケープを方向づけていったという可能性を指 摘することもできる。

まず、1.新聞記事から当時の京都の音環境を明らかに することを試み、次いで、2.どのように新聞記者が音環 境を受け止めたのかということを考察し、最後に3.新聞 によるサウンドスケープの普及活動を検討したい。

過去のサウンドスケープの研究は難しい。まず、時代を 経るごとに残された録音や録画は少なくなり、100年以前 になるならば、文字や画像を材料に研究に取り組まなけれ ばならないからである。また、過去の音環境を記録するこ とを目的に執筆された文章が数少ないというのも理由の一 つである。研究の際には、ほとんど常に他の目的で作成さ れた文章を相手にしなくてはならない。

本発表は、ある日のある時間帯を克明に記録して紹介す るという趣向を凝らした『京都日出新聞』の連載記事に基 づいて過去の音環境を明らかにし、サウンドスケープを考 える試みである。当時の新聞メディアの持つ影響力の大き さを考えるならば、この記事は京都のサウンドスケープを 多くの新聞読者に広めたとも考えられる。明治期京都の音 という身近なテーマによるところも大きかったのだろう、 発表後に活発な質疑応答が行われた。

最初の発言は、時計の音がまさに近代の音であるという 確認である。実際、電気時計の普及によって無音の時計が 逼在する現代を概観し、精密時計の無い近世を思い浮かべ るならば、まったくその通りかもしれない。また、続けて、 現代の都市では時計の音が住居から路上に洩れ聞こえるど ころか、逆に侵入してくる路上の交通音がやかましくてか なわぬようになってしまったという指摘もあった。

過去の音環境を調査する際に調査地点のゾーン分けー たとえば商業地とか住宅地といった具合に――を行う必要 を指摘する意見もあったが、これもまた重要な着眼点であ る。花街の状況など、偶然に新聞記者の取材があるゾーン となった連載では、鮮やかにある地点の音の特色が捉えら れていたことに気づかされた。

路面電車の音に関する指摘が少ないのはなぜかという疑 問もあった。おそらく、質問者が指摘したように、明治 40 年という時期が近代化の定着期であるということで説明す ることができるのではないだろうか。開通した当初は驚き の的であった路面電車もこの頃にはすっかり生活になじん でしまったのだろう。その他、子供の声があまり言及され ていないのはなぜかという質問もあった。実際、明治期日 本における年齢別人口構成を思い描くならば、子供の声は 現在よりもはるかにありふれていたに違いない。しかし、 本連載では言及は少ない。理由は分からず、この問題は今 後検討してみることにしたい。

続く発表は鈴木秀樹氏の「音を見る」。ローランド株式 会社の長谷川秀和氏との共同発表で、音を視覚的に捉える 教育機材を教室に導入した教育実践研究である。

【要旨】

「音を見る」ことによって、より深く「音を聴く」こと に誘うサウンド・エデュケーションの試みについて報告す

勤務校のサウンド・エクスプローラ部をメインフィール ドとして、これまでに様々なサウンド・エデュケーション の試みを展開してきたが、それらはいずれも「じっと黙っ て音を聴く」ことを出発点としていた。だが、実は小学生 を「じっと黙って音を聴く」モードに誘うことは容易では ない。特に人数が多ければ多いほど、それは難しくなる。 サウンド・エクスプローラ部に5人という人数制限を設け ているのもそのためである。

だが、「音を見る」という体験をさせることで、大人数 の子どもたちを「じっと黙って音を聴く」モードに誘うこ とができた。

「音を見る」ために使ったのは、ローランド株式会社の 開発した R-Mix というソフトウェアである。これを使うと、 音を「周波数、定位、音量」の3つのパラメーターで分析 し、グラフィカルに表示することができる。

学習発表会という行事で、このソフトを使ってサウン ド・エクスプローラ部の児童に発表をさせた。発表の流れ はこのようなものである。

- [1] 最初に R-Mix の画面を見せながらいくつかの音を聴
- [2] それを繰り返した後で、クイズを出す。音を聴かせ ずに R-Mix の画面だけで、それは何の音かを考えさせる。
- [3] 最後に、R-Mix の画面を見せながら音を流して正解 を発表する。

まず、[2]の時点で聴衆である児童たちは完全な静寂と なって画面に見入る。これは稀有な瞬間だった。400人 以上の児童が、じっと黙って完全な静寂の中で音を想う。 そんなことは今までに決してなかった。

そして[3]の段階。ここで答えである音【トランペット の音なのだが】が流れた瞬間、子どもたちは歓声やら溜息 やらを発するわけだが、そこまではやはりじっと音を聴こ うとしていた。

繰り返すが、小学生を「じっと黙って音を聴く」モード に誘うことは容易ではない。それを実現するための手段と して、コンピュータのソフトウェアがここまではっきりと 効果を発揮したことはなかったように思う。

本発表では、こうした効果について明らかにすると共に、 今後の課題、サウンド・エデュケーションの開発について

の提言を行いたい。

音に耳を澄ますことは簡単なようで難しい。本研究は周波数、定位、音量の観点から視覚的に音を認識できるシステムである R-Mix の助けを借りて、あたかも武道の試合で緊張感を持って相手を待ち受けるが如く、「じっと黙って音を聴く」状態を作り出すことを探究したものである。教育現場への高性能な機械の導入は、未来の小学校の授業を見ているようであった。

質疑応答で問題になったのは、R-Mix における音を視覚に変換する仕様についてである。システムでは音量の大小がサーモグラフィのような色の変化に対応しているが、児童はこれを戸惑い無く理解できるのかという問いが発せられた。決定的な意見は出なかったが、虹色で音量を表現するよりも、明度の違いで表現する方が分りやすいのではないだろうか。加えて、ユニバーサルデザインの観点から考えても、表示に何らかの配慮があったほうが良いように感じた。

システムはまだ実験段階で、単位時間当たりの音量の変化などは表示できないらしい。しかしながら、音を視覚的に捉える体験は、将来自然科学を学ぶ際に非常に役立つのではないだろうか。発表を聴きながら、はるか昔にレコードの溝とスピーカーから出てくる音との関連を発見した時のことを思い出していた。児童にとって R-Mix 体験は、知的好奇心溢れるものだったに違いない。



図3. 研究発表会の様子1

前半最後の発表は斎藤馨氏のグループによる「ライブ音配信システムとツイッターによるサウンドスケープアーカイブ構築検討」。サウンドアーカイブを作る試みである。

【要旨】

1. 背景と目的

サウンドスケープを後世に残す方法にサウンドアーカイブがある。録音データと、録音の時間と場所、録音された音に関する様々な事項の記述記載とを一体的に保管する。インターネット公開をするならば、これらをデジタル化しデータベースを作成し、サーバに搭載して公開サービスできるがこれらを継続的安定的に遂行する事は困難が多く実現は難しい。

情報通信技術とソーシャルメディアの普及により、多く

の人がネットから提供される情報に手軽に触れながらコメントを発信し、同じような情報に興味を持つ人たちが意見 交換しながらコミュニティを形成し、それに伴って類似の 情報が交換されるようになっている。

そこで、定点マイクの収録音をインターネットでライブ 配信し、これを聞く人々がネットで発信するコメントを蓄 積すれば、録音に関する記述となり、サウドスケープアー カイブの基本情報に活用できると考えた。

2. 方法

プライバシー問題の起きにくい森林生態音を対象にライブ音配信システムを開発構築する。ライブ音はインターネットで公開配信し、同時に録音ファイルを作成し公開する。ライブ音配信はソーシャルメディアの一つであるTwitter を利用し、特定のハッシュタグを用いて周知する。ライブ音のリスナーは同じハッシュタグ付きでコメントをつぶやいてもらう。ハッシュタグ付きのつぶやきを、別途ログファイルとしてサーバに蓄積しながら公開する。これにより録音ファイルの特定の録音時間にコメントが付与できる。

3. 結果

東京大学秩父演習林内ブナ・イヌブナ天然林内の観測鉄 塔最上部に設置した森林景観ロボットカメラのマイクにライブ音配信システムを追加設置し、衛星回線によりインターネット接続して現地音声ストリーミングを大学側サーバで受けた後、録音とインターネット配信を行なうシステムを構築し試験運用を 2010 年 3 月より開始し、システム改良を加えながら現在迄運用を重ねている。ツイッターでのハッシュタグ付きつぶやきのログは 2011 年 4 月より開始して現在も順調につぶやきデータのログを収録している。

野鳥の鳴き声が活発となる日の出前後のライブ音配信では、リスナーが数名程度聞いており、鳴き声から鳥の種判別できるリスナーのつぶやきは、直接に録音に関する解説情報として利用できる。また現地で鳥の縄張り争い等特徴的な音がすると多くのリスナーが聞きながらつぶやくため、特異な生態音であることをログから判定することができた。

サウンドアーカイブの一般的なイメージは、世界を切り 取ってパッケージ化して保存し、音の文脈も合わせて記録 するという、いわば音の標本作りであるが、これに対して 本発表で考えるサウンドアーカイブは、現実を聴覚と視覚 の観点から捉え、リアルタイムで送信し、同時に配信され る音に関して発せられた言葉も収集するという、いわばプロセスを固定化していく試みである。発想の斬新さに大変 感心した。奇妙な発想かもしれないが、世界を限なく報道 することに熱意を注ぎ結果的に記録するという観点から、この試みは新聞というメディアに近いようにも思われる。 もっとも、いわゆる「圧力」の影響は遥かに少ない。

アーカイブの運用に関して野鳥の鳴き声を例にした紹介 も行われた。マイクが鳴声を拾い、耳にした人々がそれを 野鳥研究の知識に照らし合わせて説明し、それが固定化さ れる営みである。

発表後、活発な質疑応答が行われた。幾つか拾ってみると、アートと震災との関連を指摘するコメントがあった。 この試みから連想されるのは、早くも 20 世紀後半に衛星回 線を使って洋の東西を結んだ白(パイク)南準(ナムジュン)に よる《バイバイキップリング》等のサテライトアートであ る。だが、誰もが作り手になれるという観点から見るなら ば、このプロジェクトは Twitter を通じてよりいっそう開か れているように思われた。また、人間の生活圏でこの試み を行う可能性も問われた。確かに興味深い。だが、プライ バシーという観点から考えるならばいささか問題があるか もしれない。もっとも、プライバシーという観念も時が経 つにつれて急速に変化する可能性があるかもしれない。



図 4. 研究発表会の様子 2

休憩を挟んで行われた最後の二つの発表は庭園のサウン ドスケープの研究である。曽和治好氏、土田義郎氏、栗山 伴芳氏による共同研究の「庭園のサウンドスケープ調査に 関する基礎的考察」および、同じく土田氏の「庭園の音風 景の時刻推移 兼六園と玄宮園におけるケーススタディ」 が行われた。最初に庭園のサウンドスケープ研究の概略が 示され、次いで事例研究が紹介されるという構成だったの で、二つの発表の要旨を纏めて紹介し、合わせて報告を行 いたい。

【要旨】

「庭園のサウンドスケープ調査に関する基礎的考察」 これまでランドスケープ研究分野において、庭園のサウ ンドスケープ研究に関するケーススタディが報告されてい る。京都においては、桂離宮庭園(江戸期)、詩仙堂庭園 (江戸期)、對龍山荘庭園(明治期)、無鄰庵庭園(明治期)、 金沢においては、兼六園(江戸期)、成異閣(江戸期)などの サウンドスケープに関する調査研究である。これらの研究 では庭園の音環境やサウンドスケープに関する新知見、つ まり庭園の自然環境や空間構成によって生まれるサウンド スケープ、滝音や水音を造園の自然表現として取り扱う感 性と作庭技術、地形・水系などの物理的な空間構成と音空 間の関連性、周辺環境からみた庭園内サウンドスケープ保 全に関する諸問題、小説や詩歌など著作物の中に現れてく る庭園の水音に関する社会的認知の拡大など、我が国の庭 園のサウンドスケープを窺い知る上で、きわめて重要な新 知見が蓄積されつつある。また 2011 年度、日本サウンド スケープ協会において「庭園のサウンドスケープ・ワーキ ンググループ」が発足し、例会として「日中共同研究・京

都と中国の庭園サウンドスケープの比較」国際ワークショ ップが開催された。この国際ワークショップにおいて両国 のこれまでの庭園サウンドスケープ研究に関する報告と、 それらに関する討論が展開され、日本と中国の庭園サウン ドスケープに関する比較研究の嚆矢となった。この展開を 受け、庭園のサウンドスケープ・ワーキンググループは、 これまで通り個別庭園のサウンドスケープに関する点的な 研究深化を継続するとともに、庭園におけるサウンドスケ ープの有り様について、地域レベルにおいて多数存在する 庭園を対象として、総体的・面的な庭園サウンドスケープ の調査研究にも取り組むこととなった。具体的には、まず 京都市および金沢市をフィールドに設定し、両都市に多数 存在する庭園のサウンドスケープ・プロフィール調査を実 施する予定である。本研究発表会においては、中国との共 同研究への展開も視野に入れ、それぞれの調査対象庭園に おけるサウンドスケープ・プロフィールを作成する際の、 調査項目や分析評価に関する基本フォーマットに関する考 察結果を発表する。

【要旨】

「庭園の音風景の時刻推移 兼六園と玄宮園におけるケ ーススタディ」

庭園は基本的には朝から夕方までの間に開園し、夜間は 立ち入り禁止となる。しかし、庭園によっては夜の庭園の 魅力を伝えるために期間限定での開放を行っている場所が ある。それは、紅葉の季節のライトアップなどである。ま た、滋賀県の玄宮園では夜に虫の音を聞かせるために夜間 開放を行っている。玄宮園のように音を楽しむために夜間 開放している庭園は大変珍しい。このことから他の庭園で も夜間の音を楽しむことはできるのではないかと思われる。

公園は現代人には比較的親しみやすく、日常生活中でも 身近な存在である。地域の市民に対してたいていは無料で 開放され、散策や運動といったことを通じた福祉を実現し ている。公園と庭園を比較した場合、類似する点もあるが 異なる点も多い。庭園は回遊するためのルートが多く設置 されているが、直線的な空間は馬場として用いられたよう な箇所を除いてはほとんど存在しない。また、植栽も多様 であり虫や鳥などが多く存在している。池泉は庭園の大き な特徴の一つであり、庭園の風景の表情を多様にする働き がある。このような複雑な空間構成はたたずみ眺める視点 場が多くなる。同時に視点場は音の聴取点ともなっていた のではないかと考えられる。公園は運動や遊戯の空間を確 保するということもあって樹木は限定され、空間構成は単 純である。庭園の方が、多様な音風景を実現しているもの と推測できる。特に大名庭園は、その当時の最も大きな娯 楽施設であり、そこには作庭者の自然観、宇宙観といった ものが色濃く反映されている。

我々の研究は、庭園と近傍に位置する公園の、音環境の 昼夜測定による比較分析を行う。録音データの分析結果な どの物理的な評価と、実際に調査者が聴取した音源の種類 を分析することで音環境の質的な評価を試みる。

最初に行われた曽和氏の発表は、2011年9月から継続的 に行われてきた庭園のサウンドスケープの共同研究の概略 を紹介し、今後の課題を示すものである。簡潔にして要領を得たもので、専門外の分野であったが落ち着いて傾聴することができた。興味深く思ったのは、中国における雨の音を楽しむ文化や、中国における庭園を囲む土塀をサウンドスケープの観点から考察する試みである。比較研究の面白さと奥深さを感じた。

質疑応答の最初は庭園における時代様式である。自然音への志向性は時代にかかわらず通底しているものの、建築様式が時代につれて変化するように庭園形式も時代に応じて変化し、庭の音のあり方も変化するという回答が与えられた。庭園を味わうというよりも庭園を造る方向から研究することの重要性の指摘もあった。あるいは、世界の庭園等における水の音に関する指摘もあり、地域によってさまざまに創意工夫が疑らされる庭園が紹介された。

続く土田氏の発表は秋の夜の庭園と公園の音環境の比較研究であり、自然科学的なアプローチで庭園が考察された。 目標として掲げられるのは、時代を超えて伝えられてきた 高度に洗練された庭園がどのように造られてきたのかとい うことを解明する試みである。

質疑応答では、まず測定に関する技術的な事柄が問われた。高音で鳴く虫の声を騒音計で捉えるにしては、データが不足しているのではないかという問いだが、データは取ったものの発表では使用しなかったというのが回答である。続いて、研究のスタンスを問う質疑が続いた。例えば、そもそも、公園や庭園で音を楽しむとはどういうことなのだろうか?その他、石庭の音に関するコメントもあった。庭園と内と外とが音で繋がる石庭のサウンドスケープは、刺激的な議論を生み出すに違いない。

4 おわりに

シンポジウムと共催にしたのが功を奏したのか多くの参加者に恵まれた。うれしく思う。また、お借りした会場はとても行き届いたもので、快適に発表会を行うことができた。ご尽力いただいた小川博司先生をはじめとする関西大学の教員・学生の方々に厚く感謝したい。

なお、研究発表会の報告記事を協会誌へ掲載することが 急慮決まったものの、発表会からかなりの時間が経過して しまったのでレポート依頼が難しく、研究発表会委員長の 責任ということで上野が執筆した。来年度は複数のレポー ターによるさまざまな角度からの批評・報告が並ぶように 努力したい。過渡期の混乱ということでお許し願いたい。



図 5. 学舎より北摂を臨む

日本サウンドスケープ協会 2012年度 秋季研究発表会 報告

A Report of SAJ Autumn Annual Meeting 2012

●船場 ひさお

Hisao Nakamura FUNABA フェリス女学院大学 Ferris University

1 研究発表会 開催概要

日本サウンドスケープ協会 2012 年度秋季研究発表会は、 2012 年 12 月 22 日(土)、横浜にて開催された。

当初、横浜山手地区にあるエリスマン邸・地下ホールでの開催を計画したが、発表申込みが多数にのぼり、時間内に全ての発表を終わらせることができないと判断されたため、急遽横浜市開港記念会館の会議室にて第2部を開催することとなった。2つの会場は徒歩で20~30分程度の距離にあるが、その間には横浜の観光名所が多数あり、またクリスマス直前の大変華やかな季節でもあることから、参加者の皆様にはそれぞれサウンドウォークを楽しみながら移動してもらう趣向とした。

研究発表会当日は、朝から強い雨が降るあいにくの天候だったが、会場を移す頃には穏やかな晴れ間が見えるようになり、予定通り参加者は思い思いに第2会場へと移動した。

以下に、開催概要を記す。

日本サウンドスケープ協会 2012 年度 秋季研究発表会

◇開催日時: 2012 年 12 月 22 日(土)10:00~20:45 (昼休み、会場移動を含む)

◇場所:

エリスマン邸

(横浜市中区元町 1-77-4) 10:00~15:30

横浜市開港記念会館9号室

(横浜市中区本町1-6) 17:50~20:45

◇タイムスケジュール:

【第1会場(エリスマン邸)】

10:00 開会挨拶

10:15~11:55 研究発表 3件

11:55 昼食案内・諸連絡/昼食休憩

13:10~15:05 研究発表 4件

15:05 第2会場の案内・諸連絡

15:15 クリスマス直前の横浜 サウンドウォーク

(第2会場へ移動)

【第2会場(横浜市開港記念会館)】

17:45 再開案内 17:50~20:00 研究発表 4 件 20:00 研究交流会

20:45 閉会

エリスマン邸



横浜市開港記念会館



2 発表内容

2.1 地域社会におけるサウンド・エデュケーション実践報告「音風景でつづる家康の散歩道」

小菅由加里、西村昌子(音の泉サロン)

サウンドウォークをプログラムとするサウンド・エデュケーションは各地で様々な趣向で行われている。しかしながら、一般市民を対象としたものは単発的な取り組みで終わってしまう事例が少なくない。音を聴く耳を育て、聴覚を通して環境を感じ取る能力を養うというサウンド・エデュケーションの理念からすると、一時の「働きかけ」で「望ましい姿に変化させ」るのは容易ではないだろう。地

域におけるサウンド・エデュケーションの取り組みを一時 的なイベントにとどめることなく、住民に対する環境教育 に繋げていくには、継続的に行っていく必要があろう。そ こで、地域に根ざしたサウンド・エデュケーションを模索 すべく、ブンテック NPO グループ「音の泉サロン」では、 発表者が生まれ育ち且つ現在も居住している浜松市におい て、2012年3、8、11月の3回にわたって一般市民対象の サウンドウォーク「音風景でつづる家康の散歩道」を企 画・実施した。定期的な実施により、チラシ・新聞・タウ ン誌などを通じた情報発信の機会が増え、春・夏・秋の季 節毎の開催によりリピーターを獲得するなど、継続的に地 域の人々に音環境に目を向ける働きかけが可能となった。 同じルートを用いることで、リピーターにとっては季節の 違いによる音風景をより実感することができ、また企画・ 実行者にとっては、前回の反省を次回に生かせることから 回を追う毎に実施内容がブラッシュアップされ、音聴きポ イントのアドバイスも充実させることができた。

発表ではその他、ルート設定の経緯、各回の実施内容や 「ふりかえり」の様子、参加者が書いた音の記録・アンケ ート・感想文なども紹介された。参加者たちがどのように 地域の音を聴き、何を感じたのかが報告され、地域でのサ ウンド・エデュケーション実践の参考事例である本企画の 果たした役割や効果、今後の展望などが論じられた。

2.2 野球の音風景~応援が選手に与える影響を 中心に~

筒井章平、杉浦匠、鳥越けい子 (青山学院大学総合文化政策学部)

野球をひとつ社会や文化としてとらえ、そこに「個人、 あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているか に強調点の置かれた音の環境」と定義されるサウンドスケ ープの概念を当てはめたとき、「野球のサウンドスケープ」 という研究テーマが成立する。これは、野球に限らず、そ の他のスポーツにも言えることであるが、そのような特定 のスポーツのサウンドスケープをテーマにした調査研究は これまで行われていない。本研究の新規性と特徴はそこに

本研究の前提として、鳥越ゼミに発表者(筒井)とその 1年上の杉浦という野球部の選手が所属しており、どちら も幼少期より野球にその人生を賭けてきたという事実があ る。それを踏まえたうえで調査としては、周囲の選手その 他の人々からの聞き取り調査、実際の試合時のフィールド ワーク等を実施する。そうした調査を通じて、本研究では 先ず、野球の音風景の基本的な構成要素を明らかにしたう えで、特に「応援の音」を中心に考察を進めていく。

選手のメンタルを高めるため大きな力をもつのが音であ る。特に野球の試合中には、球を打つ音や「客席からのヤ ジ」など、選手のテンションを、いい意味でも悪い意味で も変化させる音が多く存在している。そうしたなかで、選 手に力を送るための音として発せられるのが「応援の音」

応援に使われる音楽にはどのようなものが多いか、声や 楽器にはどのような特徴があるのか、また応援があるとき

と無いときでは結果にどのような違いを及ぼすかを明らか にする。そういった一般的にはあまり知られていない、

"現場"で感じることのできる音を、発表者(筒井)の経 験と、高校、大学、社会人、プロそれぞれのステージで活 躍している現役の選手たちへのインタビューを踏まえた考 察をまとめる。

発表では自らが野球の一流選手であるからこそ感じとる ことのできる内容がふんだんに盛り込まれ、大変興味深い 発表となった。



2.3 サウンドスケープの考え方を活用した都市 環境の価値共有化手法開発のための実践的 研究~日本橋川における船上イベント「名 橋たちの音を聴く」を事例として~

鷲野宏(都市楽師プロジェクト)、鳥越けい子(青山 学院大学)、山内悟(エス・シー・アライアンス)

「名橋たちの音を聴く」は、運河を移動する船上という 特殊な状況において、刻々と変化する「都市の音環境の意 識化」を契機に都市環境そのものへの関心を刺激し、その 価値を共有することを意図した作品であるが、本考察を通 じて作品の中に用いられた方法が、都市環境価値の共有化 のためにどのように作用したのかを客観的に捉えるための 手がかりとしたい。

「名橋たちの音を聴く」では、江戸以来の400年ほど の歴史が鳥瞰できる要素を環境にもつ特異なエリアである 東京都中央区と千代田区を流れる日本橋川のうち、環境的 変化に富んだ常磐橋から江戸橋までを運行ルートとし、使 用船舶は、演奏の響きや都市の音をはじめ、風や光をダイ レクトに感じるために屋根の無いものにしている。船の運 行に伴う船上の音環境の変化を活用して、様々な音楽的仕 掛け等をプログラミングすることで、音の反響や都市の音 など環境的要因を意識化し、都市環境そのものへの意識を 刺激し、「その場らしさ」を半ば強制的に体感することを 目的とする作品である。

「名橋たちの音を聴く」は、選定した10カ所程度の場 所での演奏やサウンドエデュケーションで構成され、船の 運航により変化する周辺環境と密接に関係したつくりとな っている。これらは、場のもつ音環境はもちろん景観や歴 史などを踏まえて「語り」と共に演出される。

発表では、これまで実施したプログラム、録音/録画/

画像などの記録、ゲストの反応等が紹介され、参加者との情報共有がはかられた。

2.4 サウンドマークで紹介する青山学院大学~ 学校文化資源の発掘と発信のためのメディ ア開発をめざして~

佐藤秀樹、鳥越けい子 (青山学院大学総合文化政策学部)

「サウンドマーク(標識音)」とは「特定のサウンドスケープを顕著に特徴づけるもの」あるいは「その共同体の人々にとって特に尊重され、注意されるような特徴をもった音」である。本プロジェクトは、村落のみならず学校もまた一種の共同体であるとすれば「学校のサウンドマーク」が存在するはずだという考えかたから、「青山学院大学のサウンドマーク」を発掘すること、さらには学校案内等に資するそのメディア化を試みるものである。

青山学院大学のサウンドマークとしては、2010 年度のゼミ活動を通じて既に、いくつかのものを把握している。なかでも、授業開始等の時刻を告げるチャイムは、そのメロディが学院の歴史と密接に関連した賛美歌から取られており、そこには大学の歴史や伝統を日々伝えようという思いが込められている。その他、キャンパス内にいくつかある礼拝堂の音、キャンパスソングや応援団の歌など、さまざまなものがある。現在の青山学院は、学生の所属キャンパス再編や校舎の新設など、大学として様々な変化が訪れている。この時期に音・映像・文章という3つの観点から学院の現状を記録し、後世に残していくことで、青山学院の変遷をたどる一つの資料としての活用も期待している。

本プロジェクトでは、それらの音の記録と発信のためのメディアを制作する。つまり、それらサウンドマークをメディア(アーカイブ)化し、その内容を多くの人々に伝えることができるようにすることで、青山学院 OB・OG に青学での生活を思い出してもらう。と同時に、外部生や青山学院への進学を考えている人が、その校風を理解するための一助としてもらうこともできるだろう。

発表では、プロジェクトの概要と共に、制作しているメ ディアの紹介が行われた。

2.5 龍の棲む街: 香港の新年と大都市の芸能 辻本香子(総合研究大学院大学 博士課程)

香港では、旧暦の1月1日から約二週間、街全体が祝賀の雰囲気に包まれる。この時期、中国出身者が集住する地域では、世界中で華やかな色の獅子と龍が行きかい、太鼓と銅鑼、シンバルの音が鳴り響く。龍舞と獅子舞である。この二つは併せて語られることが多いが、発表者はおもに龍舞を対象として、香港での調査を続けてきた。

龍舞は、もともと中国の各地において地域の伝統芸能として受け継がれてきたものであるが、二十世紀後半以降、東南アジアの華人たちの活動を起点として、現代的なスポーツ競技としての側面が強められた。舞い手の人数や龍の大きさなどが規格化され、運動場や体育館において、点数制の審査を伴う試合が行われている。しかし香港においてはこの限りではなく、個人的な祝いの席やイベントのほか、

ショッピングモールの開店祝いなどに龍が招かれて、華を添えることがある。旧正月の期間はこうした祝いのパフォーマンスをもっとも多く見聞できる期間であり、人々は龍や獅子のイベントに遭遇すると、身体に触れたり、記念撮影をする。

現在の香港には無数の龍舞・獅子舞チームがあり、競技活動を主とする団体、祝い事でのパフォーマンスを主とする団体に分けられる。発表者は 2009 年より 2011 年まで、競技龍舞を主としつつ、パフォーマンスも請け負う団体に所属し、メンバーとして楽器を習得する傍ら、フィールドワークを行った。龍舞の担い手は、主として 13 歳から 30歳までの若者たちである。発表では、この調査をもとに、2012 年の旧正月の期間に撮影した映像が流された。

この映像はおもに三つの部分からなる。まずは、旧暦の1月1日に、香港のメインストリートを通行止めにし、TV中継が行われる大規模なパレードをその演技者の視点から撮影したものである。路上で行われる大がかりなイベントに、「中国的」とされる龍舞がどのような役割を果たしているかを表現する。次に、それに続いて行われる、公園やオフィス、パーティなどに招聘されておこなうパフォーマンスの風景である。これらは屋内で行われることも多い。最後に、こうしたパフォーマンス、および試合のための練習風景を伝える。こうした音風景を通し、人が密集した大都市において、龍舞にともなう大きな音がどのように受け入れられ、聴かれているのかについて論じられた。

2.6 「金澤月見光路 2012」における音の演出 土田義郎、藤原佑樹、松澤亮介(金沢工業大学)

「金澤月見光路」は、金沢工業大学建築系の学生が金沢市の中心部において実施する光とアートのイベントである。学生が主体となり、地域の商店街やNPOと連携した産学連携のプロジェクトとしての活動が継続的に行われている。2004年度より毎年秋の時期の3日間ほど開催されるそのイベントは、「学生のまち」を推進している金沢市の恒例行事として定着し、多くの市民に感動を与えている。そこで展示されるオブジェは美的視点、構造的視点、環境的視点から厳しく吟味されており、造形のユニークさという点で他の地域におけるライトアップイベントとは一線を画している。

また、学生の発表の場としての位置づけだけではなく、地域住民主体型の活動として金沢市の中心市街地の活性化という課題への取り組みという意味もあり、2006 年度には文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定された。これらに対する総合的な評価から 2009 年にはグッドデザイン賞にも選定されている。

このイベントは灯りを中心とするイベントであり、当初はサウンドスケープを考慮した計画はされていなかった。
2010年度になり、全体計画には視覚だけでなく聴覚的な効果も重要であるということから、音による演出も取り入れられた。都市空間全体のサウンドスケープを意識した計画により、ゾーンごとの特徴を示すことにもつながっている。
2012年度はメインエリアにストーリー性を持たせた効果音を流すということのほかに、金属片のチャイムを仕込ん

だ手持ちの照明を用いた動きのある音響効果を作り出すと いうアクティビティを取り入れている。

発表では 2012 年度の「金澤月見光路」の準備状況や、当 日の様子がサウンドスケープデザインの事例として、録音 された動画と音によって紹介された。



2.7 都市の記憶を辿るサウンドウォーク用音声 ガイドの開発~東京都・表参道エリアを事 例として~

清野佳織、鳥越けい子、岡部篤行 (青山学院大学総合文化政策学部)

サウンドスケープの考え方を踏まえた「まち歩きワーク ショップ」のためには、「リスニングウォーク」や「サウ ンドウォーク」といったタイトルのもと、日本各地では既 にさまざまなプログラムが実践されている。その多くは予 め設定されたエリアと時間帯に、特定のリーダーや案内人 等が複数の参加者を引率する形式で実施されている。その ため、多くの人数が一度に参加できない、ワークショップ の回数が限定される、参加者が好きな日時にワークショッ プに参加できない等々の問題がある。

こうした情況を踏まえ、本プロジェクトは、特定のエリ アを対象としたサウンドウォーク用音声ガイドの開発をめ ざすものであり、「記憶やイメージレベルの音」も大切に するサウンドスケープの考え方から、特定のエリアで「今 聞こえる」実際の音の存在に注意を喚起するだけではなく、 同じ場所でかつて聞かれた音をそのコンテンツとして取り 上げることをその特色としている。

案内人の声に代わるのは、携帯情報端末による音声ガイ ド。東京大学空間情報科学研究センター有川研究室で開発 された「pTalk」と呼ばれる iPhone/iPad 用の位置情報コン テンツ発信ツールを利用する。「pTalk」は利用者の現在地 を識別し、その地点に適した情報を提供すると同時に、各 種のメディアを通じてその場所に関連する多様な情報を伝 えることができる。

ガイド開発に当たって、そのフィールドとするのは、東 京の港区と渋谷区に跨る「表参道」を中心とするエリア。 現在は「ファッションの街」として知られるが、江戸時代 から明治・大正・昭和と、その地域の変遷を辿ることがで きる。端末に入れる情報コンテンツとしては、口頭伝承を 含めた「耳の証人」のテキスト、古地図、写真等の画像、

インタビューの録音音声等の利用を計画している。

発表では、音声ガイド開発のプロセスとその結果、さら にはその音声ガイトを使って行った実験を通じて把握され た成果と課題について報告がなされ、「見えないモノ」の 重要性と場所が持つ価値を再発見するための新たなサウン ドウォークの可能性についての考察についても紹介された。

2.8 水音の知覚がもたらす新たな建築空間の拡 がり 一視覚から聴覚へ一

後藤さとみ (法政大学デザイン工学研究科 建築学)

日本南部の多雨地域には昔から、雨を集積して一定方向 に流す竪桶が、生活の知恵の一つとして取り入れられてい た。現在でも寺社や日本庭園のある家屋の軒先には趣向を 凝らしたモダンで複雑なデザインの竪どいが見られる。そ してその中には手水鉢に水を落とす仕組みや、形状やマテ リアルに音響を意識したデザインもあり、雨の落ちる音を 楽しむ小空間の創設を行っている例もある。

従来より建築分野では音環境というと騒音レベルの分析 や遮音などの工夫が中心で、自然環境が作り出す音を積極 的に内部空間に取り入れる視線が少なかった。しかし、雨 音を生かした公共建築物(毎日新聞本社ビル、府中美術館、 出雲市ビッグハート出雲、時雨亭等)や、従来茶室側にし かなかった水琴窟の建築内部空間への移動など、音を空間 内に取り組む試みが行われている。

発表ではこれらの事例が多数紹介され、限られた建築面 積の中に水平方向にも垂直方向にも広がる空間が、五感の 中の聴覚を生かして創出されうることが報告された。



2.9 3 つのサウンドスケープについての試論

箕浦一哉 (山梨県立大学)

サウンドスケープは、提唱者マリー・シェーファーの著 書『世界の調律』がきわめて広範に音の諸側面を扱ってい ることからも理解されるように、概念としての射程がきわ めて広い。一方、サウンドスケープ概念を用いた個々の研 究においては、広範な射程の全体を取り扱うことは通常困 難であることから、結果として、サウンドスケープ概念を 受容する上での力点の置き方に相違が生じている。本報告 では、フェリックス・ガタリの「3 つのエコロジー」論を 参考に、サウンドスケープ研究に「環境的サウンドスケー プ」「社会的サウンドスケープ」「精神的サウンドスケー

プ」の3つの立場があると想定することを通じて、サウンドスケープ概念受容の広がりについての整理を試みる。ここで、「環境的サウンドスケープ」とはある特定の環境(空間/場所)における音の存在に重点を置いてサウンドスケープを理解する立場、「社会的サウンドスケープ」とは音の経験の集団性・共通性に重点を置く立場、「精神的サウンドスケープ」とは人間(個人)が音をどのように経験するのかという点に重点を置く立場として想定している。これらは相互に排他的なカテゴリーではなく、サウンドスケープ概念理解の理念型を仮に示したものである。また、ここではサウンドスケープ概念の正統的解釈がいかなるものかを論じることが目的ではなく、さまざまな研究の立場の分布を可視化することによってサウンドスケープ概念の意義や応用可能性をあらためて検討するとともに、異なる立場の間の議論を深めることをねらいとしている。

発表では、以上のような想定のもとに、『世界の調律』 およびいくつかの論考を分析した結果、これらの 3 つの立場がいずれもサウンドスケープ研究に包摂されるべきものである一方で、個々の研究においては立場の相違が相互の理解を阻む場合もあることが報告され、サウンドスケープ研究の総合的な発展のためには異なる立場への理解が必要であると言及された。

2.10 庭園の内部条件と周辺環境に着目した音環 境の特性に関する研究

金井祐輔、原大貴、土田義郎 (金沢工業大学)

本研究では、特に庭園の音環境を形成する周辺環境に着 目し、大名屋敷・武家屋敷・商家・寺院など規模の異なる 庭園において音環境の比較・分析を行うことで、周辺環境 との関係性を調査する。

かつて加賀百万石の城下町として栄えた金沢は、京都・ 江戸・大阪に次ぐ日本有数の古都とされている。元々大名 屋敷や武家屋敷や寺院などが多く存在しており、第二次世 界大戦時に、空襲の影響を受けなかったこともあり、今も 多く残されている。庭園においても兼六園などいくつかの 庭園は保存され公開されている。一般公開されている庭園 においては景観などの視覚的な部分で注目されることが多 い。しかし、庭園での楽しみ方には視覚的なものに加え聴 覚的な楽しみもまた重要な点の一つである。兼六園のよう な広々とした大規模な庭園や、武家や商家のような小規模 な庭園など、それぞれの庭園にそれぞれの地形の違い、周 囲が建築物で囲まれているなどといった周辺環境の違いが ある。これらが庭園の音環境に大きく影響するのではない かと考えた。

実験を行うにあたって庭園のリストアップをし、それを元に実際に現地で下見調査を行い、庭園としての機能が保たれていることに注目して選定を行った。このことから比較・分析を行う箇所を大名庭園においては兼六園、武家屋敷としては西田家庭園、野村家庭園、商家においては喜多家に限定して比較・分析を行うこととした。対象のうち既往研究されている庭園で、使用可能なデータは用い、調査されていない庭園においては実際に測定を行う。下見調査と並行して文献調査を行ったところ、西田家玉泉園、兼六

園、松風閣庭園は平面図が保存されており、これらを元に 聴取点を推定した。

測定を行うにあたって、騒音計と録音機器を用いて測定をする。時間帯を1回目8:30~9:30、2回目11:30~12:30、3回目を16:30~17:30とし、それぞれの時間内で10分間ずつ測定する。このとき同じ庭園での測定の際は、時間を時計などで確認しながらそれぞれの聴取点において同時測定を行う。騒音計、録音機器の高さは120cmに固定し図面により推定した聴取点にて測定する。騒音計を用いて騒音レベルを測定し、録音機器を用いて音源聴取を行う。比較方法として、等価騒音レベル、相対累積度数分布、可聴時間率による比較を行う。

発表は、金井さんと原さんが2人で行う形がとられ、学生らしい若々しい発表に、多くの質疑が展開された。



2.11 「サヨンの鐘」のサウンドスケープ ーリ ヨヘン社タイヤル族の音の記憶とアイデン ティティー

小西潤子 (静岡大学教育学部)

1938 年 9 月 27 日、17 歳のサヨンが、日本人教師の徴集を見送って荷物搬送の際、豪雨で増水した激流に墜落する事件が起こった。後日、事件を知った長谷川台湾総統がサヨンをたたえる鐘をリヨヘン社に贈った。これをきっかけに、「サヨンの鐘」物語は日本と台湾でとても有名になり、渡辺はま子歌唱の《サヨンの鐘》(西條八十作詞、古賀政男作曲)をはじめ、演劇、美術、文芸、紙芝居、映画、教科書にも採録された。

戦後、「サヨンの鐘」は、政治的な理由から喪失され、1958 年タイヤル族も山深いリヨヘン社から金岳部落に集団移転した。1998 年 6 月、南澳郷が観光スポットとして莎韻紀念公園を整備し、「莎韻の鐘」を設置した。この「鐘」からは、ビッグベンのチャイム音、それにつづいて胡美香による《サヨンの鐘》と蔡琴による《月光小夜曲》(中国語版《サヨンの鐘》)が流れる。歌だけでも計 7 分 40 秒ほどになるこの音は、毎日、朝 8 時から夕方 6 時まで 1 時間ごとに鳴るという。一方、リヨヘンの旧集落調査を行った金岳社区発展協会は、2008 年金岳の「莎韻の鐘」を建立し

た。にもかかわらず、サヨンの子孫は元の「サヨンの鐘」 の写真を筆者に見せて、「あれは『サヨンの鐘』とは違う」 と主張した。

「サヨンの鐘」物語は、台湾文学や植民地研究では、日 本の軍事プロパガンダや台湾原住民教化事業の観点から論 考されてきた。しかしながら、さまざまな作品を通して見 えてくるのは、支配者側の建前としてのスローガンである。 タイヤル族は、「サヨンの鐘」をどのように受け入れてい ったのか? また、「サヨンの鐘」がリヨヘン社で響くこと が、どのような意味があったのか? サウンドスケープから のアプローチによって、タイヤル族にとってのサヨンの鐘 が何であったのかが明らかになるのではないか?

本研究は、長尾和男の記録と小説(1943年)を手掛かり に、当時のリヨヘンの音環境の特徴を見出す。事件数年後 (おそらく1942年) に現地訪問した長尾は、リョヘンおよ びその道程で耳にした音をたくさん記している。また、タ イヤル族の人々が「サヨンの鐘」の音が響いたリヨヘンの 空間をどのようにとらえていたかを把握するために、1963 年の李らによる民族誌を用いる。これは、現在でも地元の 過去を記した貴重な資料として教育現場でも用いられてお り、時期的にもサヨンの子孫が中年層だった頃の記録であ ることから、事件当時の人々の世界観を振り返るのに適し ている。

発表は多くの画像や音資料を使いながら行われ、次第に 会場全体がその内容に惹きこまれていくような雰囲気が作 り出された。

3 参加者の声

今回の研究発表会には、約70名という多くの参加者にお いでいただいた。青山学院大学、金沢工業大学の学生によ る発表があり、またフェリス女学院大学の学生がボランテ ィアで会場運営をサポートしていたこともあり、若々しい 雰囲気がある一方で、協会設立当時からのメンバーが久し ぶりに元気な姿を見せるなど、質疑応答や交流会は和気あ いあいとした中にも程良い緊張感が溢れ、活気のある会と

参加者は様々な感想を述べていたが、ここでは学生参加 者の声を紹介する。

エリスマン邸は初めて訪れる場所だった。山手地区には あまり訪れる機会がなく、異国情緒があって高級住宅街で もあるこの場所は私には敷居が高い場所のようにも感じて しまう。しかしこうして今回訪れることができ、遠くから も多くの方が参加されて発表を拝聴することができ、卒業 論文への励みにもなった。また、横浜市民として迎え入 れ る側ともなったため、この発表会に参加された方々には、 横浜の魅力を少しでも感じていただけたなら、幸いに思う。

(青山学院大学 淺見夢大)

一日お手伝いさせていただき、とても勉強になった。中 でも、野球の音風景に関する研究が印象に残った。私自身 も弓道をやっており、野球のように音楽での応援などはな い静かなスポーツであるが、考えてみれば静かだからこそ、 弓を引くことに集中でき良い結果につながる。そして、 様々な音があることにも気付く。私は今 3 年生であり、ち ょうど卒業研究のテーマを考える時期なので、今日のこと を元に弓道のサウンドスケープを研究してみたいと思った。

(フェリス女学院大学 池田智穂)



4 おわりに

横浜で研究発表会が開催できないかと、鳥越理事長から 相談されたのが 7 月の終わりだったと記憶している。当初 フェリス女学院大学での開催を検討したが、週末に校舎を 使うのが難しいことから、近隣の西洋館で、横浜の異国情 緒を感じながら参加者がゆっくりディスカッションできる 研究発表会を目指すこととなった。

横浜・山手地区には、横浜市緑の協会が所有する西洋館 が7つあり、そのうちの4つが中の一部を一般に貸出して いる。規模や使い勝手などを考え、フェリスに一番近いエ リスマン邸の地下ホールを借りることにしたが、これらの 西洋館は使用料がとても安く、市民の絵画展などに使われ ており、大変人気がある。このため4ヶ月前の抽選日に会 場に出向いてくじを引く必要があり、果たして本当にここ で開催できるのだろうかという一抹の不安を抱きつつ、8 月半ばの日曜日10時に、私はエリスマン邸を訪れた。

朝から暑い日だったが、10 時少し前には 20 名近い人が 抽選会場を訪れていた。先着順にくじを引き、その番号の 若い順に12月の使用希望日を埋めていくという方法である。 1グループが最大1週間会場を借りられる上、12月は23 日からクリスマス仕様で一般貸出しはなしという条件のた め、チャンスのある土曜日はわずか3回。こんな中で私が ひいたくじの番号は「4」。これはもう無理!と思ったが、 私の前の3人がカレンダーに書き込んだ状況を見ると、21 日(金)と22日(土)だけがぽっかり空いている。ここで 予約しても、こんな忙しい時期に研究発表会なんてできる のだろうかと思ったが他に選択肢はなく、とにかく申込用 紙に記入して帰途についた。

関係者の方々にはかったところ、思いがけず皆さん喜ん でくださり、どうにか12月中に研究発表会を開催すること ができることになった。暮れの忙しい時期ではあるが、前 向きに考えれば横浜が一番華やかに輝くクリスマス直前。 良い季節と言えばその通りである。

しかし、発表会開催にはもう一波乱あった。発表締切直 前になって予想以上の発表申込みがあり、前述の通りエリ

スマン邸だけでは発表時間が納まらなくなってしまったのである。これがわかったのが10月初め。せっかくの申込みをお断りするのも残念なため、夕方から夜にかけてどこか他の会場を借りられないか探し始めた。横浜市開港記念会館は大きなホールの他に中小の会議室、セミナー室が多数備えられている。平日ならば空いていることが多いが、土曜日の夜、中規模の部屋が空いていることは考えにくかった。しかし電話してみると22日の夜、9号室だけ空いているとのこと。この9号室は規模的にちょうど良い部屋ということで、すぐにここを押さえた。

このような綱渡り状態の中で、奇跡的に開催できたのが 今回の研究発表会である。蓋を開けてみれば、準備した講 演論文集が足りなくなってしまうかという程の参加者を数 えることができ、学生、研究者、実務者など、当初のサウ ンドスケープ協会の設立趣旨に合致する幅広い方々の自由 で活発な発言で盛況な会となった。

今回実行委員長の大任を仰せつかり、自分なりにバタバタと動いて何とか無事に開催できた研究発表会であるが、 実行委員はじめ多くの方々の協力なくしてはあり得ない会だったと思う。この場を借りて皆様に心より御礼申しあげます。

あらためて感じたことは、一同に会することの大切さ、 同じ音を聞き、同じものを見て、感じたことを話し合うこ とで生まれる何かがあり、サウンドスケープを考える上で はこれがとても重要だということである。

次回の研究発表会にはぜひフェリスの学生にも発表して もらいたいと強く感じた一日であった。

ワーキング・グループ活動報告

2011~2012 年度サウンド・エデュケーション・ワーキング・グループ

An Activity Report of Sound Education Working Group in 2011-2012

●土田 義郎

Yoshio TSUCHIDA 金沢工業大学

Kanazawa Institute of Technology

キーワード:サウンド・エデュケーション、環境教育

keywords: Sound education, Environmental education

1 活動の概要

2011-2012 年度は、まず、「録音」を用いたサウンド・エデュケーションの手法をテーマに掲げた。いままで機器を利用した手法を扱ってこなかったが、少し異なる点からアプローチを試みた。会員、及び一般への普及ということを意図して、2回のワークショップを開催した。その第1回目は2012年3月に金沢において実施し、2回目は2012年6月に東京において実施した。次いで、サウンド・エデュケーションの意義について話し合う集まりを行う予定である。

2. 「録音」を活用したワークショップ

2.1 ワークショップの目的

サウンド・エデュケーション・ワーキング・グループ (以下「本 WG」) では、サウンド・エデュケーションを実際に経験してもらう機会を設けることを、活動の目的の一つとしている。実際に行おうとしても、経験が無いとなかなか実施してみようという気持ちになれない。経験することで敷居を下げることになり、広くサウンド・エデュケーションが普及する一つのきっかけになるのではと考えている。今回は、会員外である大学生・大学院生にも参加を強く呼びかけた。これからの教育という意味も含め、積極的に参加してもらうように働きかけた。

2.2 「録音」というアクティビティのねらい

私たちが生活している環境に目を向け、その中で聞こえる特定の音を注意深く聞く。同じ範疇にある音でも、様々な音があるのは、その地域性(文化・習慣・気候など)による。また、場所によって聞こえ方にも差が生じてくる。同じ音を集めたはずでもその中に差異がある。それは社会の表層的、あるいは本質的な違いを認識したり、物理的な現象を理解したりすることを促すことにつながるだろう。

また、録音できなかった音に気づかせることで、それは さらに広がることだろう。音楽的な美意識につながること ももちろんあるだろうが、より広く自然、社会、文化に対 して認識の間口を広げ、柔軟な発想へと導きたい。

2.3 「録音」というアクティビティ

録音を行うということの意味合いについては、本WG内の会合でディスカッションを重ねた。その上で表1に示す点を確認した。

表1 「録音」に関する覚書

- ・録音は必ずしもサウンド・エデュケーションでは必要 条件ではない。
- ・録音したものは音環境そのものではない。音とは身体性の強いものである。
- ・通常の録音では、対象をハイファイに記録することに 注意がはらわれる。しかしサウンドスケープの考え方と しては全体性の中で音をとらえる。
- ・録音をきっかけにして音に対して興味を抱いてもらうようなアクティビティとする。
- ・利点と欠点

利点:記録が残る。体験を共有化することができる。 欠点:道具が必要。録音にも技術が必要。

今回の「録音」をテーマにしたアクティビティに関しては、文献1の課題 68 を参考にしている。オリジナルの課題は「今度は、録音のためにひとつの音のタイプを選んで、できるだけ変化に富んだ多くの音の実例を集めてみよう。」というものである。「扉、門、自動車のクラクション、電気掃除機」が例示されている。本 WG の事前検討で、最後まで候補に残ったのが「扉」と「駅」であった。最終的には「駅」では漠然としていることと、地方で実施する際に身近な場所に駅が少ないということから、「扉」を対象として課題を構成することとした。

2.4 内容

2回に渡って行われたワークショップの概要を表 2、及び3に示す。第1回のWSでは、テレビ局の取材もあった(図 1)。その様子は地方局のテレビ番組 2)において紹介された。

表 2 第1回ワークショップ実施概要

日時	2012年3月3日(土) 13:00~17:00
場所	金沢工業大学 7号館 306室
参加者	4名
参加費	会員と学生は無料 (会員外は任意の寄付)

表3 第2回ワークショップ実施概要

日時	2012年6月9日(土)13:30~17:00
場所	青山学院大学 第 17 号館 3 階 17302 番教室
参加者	15名
参加費	会員と学生は無料(会員外は任意の寄付)



図1 テレビ番組において紹介された第1回WSの様子

録音は作業にかなり時間を要する。当日に全員が一斉に 録音をして巡るという方法もあるが、今回は時間を短縮し つつ様々な音を持ち寄るという意味から、事前に音を録音 してもらうこととした。そのために「指令書」を用意した (表 4)。主催側は当日、パソコン、プロジェクタ、スピー カを用意する。パソコンには動画や録音を記録したメディ アが読み込めるようにしておく。WS は下記の手順で進行 させた。

(1)聞こえてくる音に耳を澄ます

まずは、録音場所や状況などのメタ・データを示さずに 録音された音だけを聴く。必要であれば何回も聞き返す。 それができるのは、「録音」の大きな特徴である。

(2)音源の推定

聞こえた音の特徴、例えば音の響きの状態から空間の広 がり、音質から材質感が感じ取れる。分析的聴取から音源 を推定し、それがどの程度当っているかを確認する。

(3) 感じたことの話し合い

間違えたとするとなぜかを考える。身近でありながら聞 いたことのない音や音として認識していなかったものがあ るだろう。聞いたことがあっても録音として聞いてみると 違って聞こえたものもあるだろう。録音できなかったが知 っている音もある。それらを含めてブレスト的に出し合っ

これらの作業を通じて、人間の認識やまちの魅力につい ても考えることができる。また、音の類型化を考えること

は、サウンド・エデュケーションの中でも基本的な活動で ある。

表 4 指令書の文言

「扉」の音を集めてみよう。フォーマットは mp3(音の み)と静止画、もしくはmp4(動画と音)とする。USB メモリか SD カードに入れて持ち寄る。録音した場所や 状況について説明できるようにしておこう。できればそ れらも Word などでメモしておきたい。

集める音は1人当たり5個を目標としてみる。もちろん これより少なくても構わない。扉の特徴が分かるように するには、どのようにしたらよいかを考えて録音しよう。 どんな風景が見えてくるだろうか。

3. 例会企画

今までのWGの活動は、サウンド・エデュケーションの 手法や技術に重点があった。ここでもう一度、その本質的 な意義について広く議論する場も必要であることが認識さ れた。そのような趣旨の実現のための集まりを、2013年3 月に WG 主催の例会として企画中である。

内容は、話題提供とパネル展示を考えている。サウンド エデュケーション関連の話題を提供可能な会員に、各自の 実践例(背景、趣旨、課題等)を語ってもらう。その際、 活動内容を大きめのボードにまとめて、ポスターセッショ ンのようにするというアイデアも出ている。過去に実施し た内容もパネル化することで、活動の総括的展示としても 成立させたいという意図もある。

註

- 1) R.・マリー・シェーファー(鳥越けい子、若尾裕、今 田匡彦訳):『サウンド・エデュケーション』, (春秋社、 東京、1992), pp. 96-99.
- 2) 『五木寛之の新金沢百景 金沢の音色』, テレビ金沢, 2012.3.24 放送.

サウンド・エデュケーション WG 2012 年度メンバー

土田義郎(代表)、鳥越けい子、永幡幸司、小林田鶴子、兼 古勝史、鈴木秀樹、吉仲淳、神林哲平(順不同)

連絡先: tsuchida@neptune.kanazawa-it.ac.jp

2012年度 庭園のサウンドスケープ・ワーキンググループ活動報告

An Activity Report of Japanese Garden Soundscape Working group.

●曽和 治好 Haruyoshi SOWA 京都造形芸術大学

Kyoto University of Art and Design

キーワード:庭園、歴史、サウンドスケープ

keywords: Garden, History, Soundscape

1 はじめに

庭園のサウンドスケープ・ワーキンググループは 2011 年8月に発足し、2011年9月に開催された「日中共同研究・京都と中国の庭園サウンドスケープの比較」を皮切りに、 庭園のサウンドスケープに関する研究発表・教育活動・研究会などに取り組んでいる。

2 2012 年度の諸活動

2.1.研究発表

まず研究発表に関して報告する。当協会 2012 年春季研究 発表会において、「庭園のサウンドスケープ調査に関する基 礎的考察」(曽和治好、土田義郎、栗山伴芳)、「庭園の音風 景の時刻推移 兼六園と玄宮園におけるケーススタディ」 (土田義郎)を報告した。また秋季研究発表会においては、 「庭園の内部条件と周辺環境に着目した音環境の特性に関 する研究」(金井祐輔、原大貴、土田義郎)を報告した。ま た関連学会での研究発表にも取り組んでいる。これらの研 究をとおして、今後、庭園のサウンドスケープに関する調 査を実施する際に、調査対象をどのような側面から調査し てゆくかの枠組みについて考察するとともに、時間経過や、 内部と周辺環境との関連など音環境を考える上で重要な要 因についての検討を重ね、加えて調査時の使用機材・手法 など具体的な調査方法論についての試行に取り組んだ。各 研究の詳細については当該講演論文集を参照いただきたい。 これらの研究をとおして、今後の庭園サウンドスケープ調 査に向けての調査項目や使用機材、対象地域、対象庭園の 絞り込みなどが進んだ。

2.2 教育活動

次いで、教育活動として「静けさを楽しむ」という社会人向け公開講座に取り組んだ。実施にあたり、歴史街道推進協議会・近鉄文化サロンが主催し、当ワーキンググループが協力するかたちを取った。庭園のサウンドスケープ、特に「静けさを」楽しむことことを題材としたため、30名限定という少人数設定の講座とした。募集開始とともに申込が集中し、即日でキャンセル待ち状態となった。この影響で、協会員の皆様に充分な案内をすることが出来なかった事に

ついて、この場を借りてお詫びしたい。

2012年9月15日に第1回目の講義。同月23日の第2回目は庭園での現地研修とした。

第1回の講義題目は「日本人の愛した音風情」と題し、曽和が担当した。講義においては、最初にサウンドスケープの基礎事項や本協会活動の概要などの紹介からはじまり、シェーファーが作曲した音楽などを導入部に使用し、加えて虫の鳴き声や環境音を交えるなど、一般の受講者が音の感性からサウンドスケープという概念に親しめるよう工夫した。後半では日本庭園の音環境調査の概説も含め、日本庭園のサウンドスケープが醸し出す独特の風情や、今回の講座のテーマである「静けさを楽しむ」感性に迫ろうとした。

第2回は、「庭で感じる日本の音」として庭園のサウンドスケープに関する現地研修を実施した。庭園現地でのサウンドスケープ解説は土田、曽和に加えて、庭園サウンドスケープ研究者の栗山伴芳氏が担当した。研修先は京都市左京区南禅寺界隈に位置する對龍山荘庭園。明治期の造園家、植治(うえじ)こと小川治平衛の作庭による自然風景式の名園である。本庭園内には琵琶湖疎水を利用した滝や水落ちが多数配されており、30名の受講者は水音を楽しみながら閑静なサウンドスケープを味わうことができた。受講者全員から講座内容について好評であったことに加え、庭園の所有者に庭園のサウンドスケープ研究の有効性に関するご理解と御協力をいただいたことも本講座の成果である。

2.3 研究会

2012 年度の活動の締めくくりとして、1月に金沢における庭園サウンドスケープ予備調査および研究会を実施した。まず予備調査においては、玉泉院丸庭園遺構および石垣を訪れ、発掘された庭園遺構の流れの形態や滝との関係性について現地討論を行った。金沢城の中でも特徴ある幾何学状の意匠を施された石垣を背景とした庭園で、金沢城調査研究所によれば、特徴ある水景が存在したと推測されている。今後、復元整備が施され、公園として一般市民に公開される計画が石川県により推進されている。参加者間の討論では、庭園の水景による特徴的なサウンドスケープの存在が期待され、本ワーキンググループの調査対象としても重要な庭園遺構であることが確認された。

研究会では「庭園に息づく音風景の世界」をテーマとした。3名が庭園サウンドスケープ研究に関する話題提供を

行い、外部から2名を加えての開催となった。

まず曽和は中国・蘇州の庭園のサウンドスケープについ て発表した。雨音を楽しむ中国南部独自の音感性の話から 始まり、蘇州の概要と蘇州古典園林と呼ばれる庭園群の分 布について説明した後、摂生園庭園にある「聴雨軒(ちょう うけん)」という建物が、バショウやハスの葉に落ちる雨音 を楽しむための庭園施設であることなどについて紹介した。 発表内容を一般向けに再編集した記事が、研究会終了後、 大阪府公園協会の運営する広報サイト www.osoto.jp に掲

続いて土田は、大名庭園と武家・庶民の庭園について、 これまで当協会の研究発表会で報告した研究事例をもとに、 音風景の時刻推移や周辺環境との関連性に関する調査結果 の総括を行った。加えて土田から環境音の録音と、録音さ れた音の聞き取りと分析方法、騒音計と録音システムの連 動、研究室でのコンピューターによるデータ分析手法など、 具体的な調査方法論についての解説があり、今後の調査に 向けて貴重な情報共有が図られた。

栗山は、兼六園の翠滝の滝音が時代変遷とともに、人々 に認識され、社会的認知が拡大していった状況について、 これまでの研究成果を報告した。栗山によれば、江戸時代 に武家を中心として拡がった翠滝の音の評判は、明治期の 兼六園の一般開放とともに一般市民へと拡がり、大正・昭 和期には文学の素材となり、滝音の更なる社会的認知が拡 大した。このように庭園内の一つの滝が広く社会に認知さ れている事例はサウンドスケープを研究する上でも貴重で あり、当グループとしても重要な事例と位置づけたい。

相互討論においては、予備調査や発表内容をふまえ、庭 園サウンドスケープ研究の意義の再確認や、今後の調査展 開に向けての調査対象庭園、調査方法論などについての意 見交換が行われた。



写真1: 玉泉院丸庭園遺構および石垣

表1「庭園に息づく音風景の世界」研究会開催概要

日時:	2013年1月17日(木) 16:00-19:00
場所:	金沢工業大学 扇が丘キャンパス (21 号館 5 階
	502 室)
主催:	日本サウンドスケープ協会 庭園のサウンド
	スケープ・ワーキンググループ
プログ	(1)中国・蘇州の庭園~雨の音風景を楽しむ…
ラム	曽和治好(京都造形芸術大学)
	(2)大名庭園と武家・庶民の庭園~石川県内の
	庭園から…土田義郎(金沢工業大学)
	(3)兼六園・翠滝の音の受けとめ方に関する研
	究 …栗山伴芳(栗山造園)
	(4)話題提供者三名による鼎談

3 今後に向けて

国際ワークショップ終了後、2012年度は蓄積期間となっ た。研究事例の地道な積上げと、成果発表や教育活動へ展 開などを経て、庭園のサウンドスケープ研究が、行政機関、 新聞メディア、文化団体、企業などに徐々にではあるが認 知されはじめている。

次年度は新規メンバーの参加も募り、庭園のサウンドス ケープ調査の拡充、研究費の獲得に注力する。今後も関係 各所からの御指導や御協力をお願いしたい。

表 2 庭園のサウンドスケープ・ワーキンググループ

メンバー	平松幸三 (京都大学)
	鳥越けい子(青山学院大学)
	土田義郎 (金沢工業大学)
	曽和治好 (京都造形芸術大学)
連絡先	京都造形芸術大学
	環境デザイン学科 曽和研究室
	075-791-9121(代)
	halsowa@kuad.kyoto-art.ac.jp
	http://land-lab.jimdo.com

編集後記

『サウンドスケープ』第14巻をお届けいたします。まずは発行が大変遅くなりましたことを心よりお詫び申し上げます。

本巻は電子ジャーナル版『サウンドスケープ』として初めての巻となりました。紙媒体からの移行については手探りのところもあり、今回は DVD 媒体での発行とさせていただきました。将来的には協会ホームページから各コンテンツにアクセスできるよう現在も検討を続けております。この電子化により音声や動画を含むことが可能となりました。これはサウンドスケープの協会誌として可能性を大きく拡げるものと考えております。本巻では震災プロジェクトに関する音声・動画コンテンツを収録しておりますので報告とともにご視聴ください。

本巻の特集のひとつはその震災プロジェクトの活動報告であり、被災した音の名所の状況のレポートとともに、失われた音の風景がどうなったのか定点観測によってとらえる試みが続けられています。震災から1年以上が過ぎた調査でも「時が止まり、海風の音だけが妙に印象に残っている」場所の、かつての音が一日も早く戻ることを祈ります。もう一つの小特集「個人化社会とサウンドスケープ」は2012年度の協会シンポジウムでの話題と議論を取り上げたものです。音を持ち歩ける時代において、人々のサウンドスケープへの認識はどうなっていくのでしょうか。また、年二回の開催となった研究発表会についてはそれぞれの発表に関する詳細な報告をいただきましたが、それを通じて発表会場の触発的な雰囲気が伝わってきます。

さて、電子化の機会に投稿規定・投稿要領の改訂も進めております。 音声・動画を含むことができるようにするとともに、会員のみなさま のより幅広い活動の投稿をいただけるよう、投稿カテゴリーについて も拡大する予定です。今後の協会誌にもご期待下さい。

協会誌編集委員会 委員長・第14巻編集担当 川井敬二

日本サウンドスケープ協会誌

『サウンドスケープ』第 14 巻, 2013 年 5 月 SOUNDS CAPE

Journal of the Soundscape Association of Japan (JSAJ) Vol. 14

発行: 日本サウンドスケープ協会

発行人: 西江雅之

編集委員: 川井敬二 (委員長), 川崎義博, 永幡幸司, 鳥越けい子

大庭照代,佐藤宏,土田義郎,箕浦一哉

編集事務局:〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1

熊本大学工学部 川井研究室

TEL. 096-342-3567 FAX. 096-342-3569

本誌の内容を無断でコピーすることを禁ずる。

Journal of the Soundscape Association of Japan

Soundscape

Vol. 14 (2013)

President: NISHIE Masayuki Editors: KAWAI Keiji (Chief),

KAWASAKI Yoshihiro, MINOURA Kazuya, NAGAHATA Koji, OBA Teruyo,

SATO Hiroshi, TORIGOE Keiko, TSUCHIDA Yoshio

http://www.saj.gr.jp

CONTENTS

Special Articles: Soundscape Project for Earthquake Disaster 3.11

NAGAHATA Koji: Outlines of the Soundscape Project for Earthquake Disaster 3.11 NAGAHATA Koji: A Report on the Visiting Soundscapes of the Affected Area Project

Ohya Eiji: Bell Crickets in Miyagino

TORIGOE Keiko: Goishi Kaigan, Kaminari Iwa / Thunder Rock

SATO Hiroshi: Sounds of Seashore Facing Outer Sea: Visiting Soundscapes of Iwaki and Idzura

NAGAHATA Koji: Fukushima Soundscape Project

KAWASAKI Yoshihiro: Fixed - point Recording Project

MINOURA Kazuya: Impressions after participating the project for soundscape observation in the

tsunami-stricken areas

NAGAHATA Koji: Discussion on What Soundscape Can/Should Do for Society in This Age

Special Articles: Individualized Society and Soundscape

DAIMON Shin-ya: Report: Symposium "Individualized Society and Soundscape" MINAMIDA Katsuya, TSUJIMOTO Kyoko, OGAWA Hiroshi

Special Article for the 20th Anniversary of SAJ

Round-Table Talk: Pre-History of Soundscape Association Japan, Part 1

HIRAMATSU Kozo, IKEMURA Hiroyuki, UENO Masaaki, SATO Hiroshi and TORIGOE Keiko

Reports

UENO Masaaki: A report of SAJ 2012 spring meeting

FUNABA-NAKAMURA Hisao: A report of SAJ 2012 autumn meeting

TSUCHIDA Yoshio: An Activity Report of Sound Education Working Group in 2011-2012 SOWA Haruyoshi: An Activity Report of Japanese Garden Soundscape Working Group in 2012

From the Editorial Board